

出藍文庫

12-1

「合同誌寄稿まとめ」

近藤 貴弥 編



出藍文庫

目次

幸福な死（毒殺合同）	五
白露（二十四節気合同）	二五
ビブロフィリアとさまよえる妹（ラノベ合同）	三九
ダ・カーポ（歴史合同）	五九
願い（わかばん合同）	八三
居場所（ストーリーカー合同）	一二三
夏至（咲霊合同）	一四一
後書き	二四八

幸福な死

紫檀の文机の一番下の引き出しに、メディスン・メランコリーから授かった薬と八意永琳から授かった薬が、一つの硝子瓶に混じっていることを知っているのは、稗田阿求ただ一人だけだった。

阿求がメディスンに永琳から授かっている薬と瓜二つの薬を作ってもらうように頼んだのは、『幻想縁起』の編纂を後少しで終える冬のことであった。

阿求は常日頃飲む薬の中に、全く同じ色や形をした毒薬を混ぜることによって、誰にも見つけられず、阿求の記憶力があつたとしても瞬時に薬か毒か分からないようにして、いつでも死ぬるようにしたのである。

薬をはじめ阿求の肉体に関することは、八意永琳から使いとして訪れる鈴仙・優曇華院・イナバによって管理されている。

が、その薬の中に、死に至る毒薬が紛れ込んでいることは、鈴仙も永琳も気づいていない。薬が少なくなった時、鈴仙に瓶を見せていることあるが。何一つ疑問に思われたことがない。阿求がそんなことをしたのは、何となく死のうと思つたからではない。

7 幸福な死

御阿礼の子は『幻想縁起』の編纂を終えるまでは、八雲紫や四季映姫・ヤマザナドゥや小野塚小町などに生かされる。

先代達の時代は妖怪に襲われたり、流行り病に罹ったりしたため、『幻想縁起』の編纂の最中に亡くなってしまうことがあった。未完の『幻想縁起』は、人里に間違った情報を与えてしまい、幻想郷の人間が減ってしまう。そこで、『幻想縁起』の編纂を終えるまでの間は、御阿礼の子の生は保証されることになったのだ。

そのように保証された生の中で、『幻想縁起』を書き上げるまで御阿礼の子は死のうにも死ねないのであるか、『幻想縁起』の編纂を終えなければ、おおよそ三十年と定められている時間が延ばされるのだろうか、と自らの生きられる時間のことを考えてしまうのは当然だった。

『幻想縁起』の編纂という公務を終えた瞬間、小野塚小町に命を刈り取られるかもしれない。全ての先代が公務後のことを記録に残していないのも、そういう可能性を考えてしまう一つでもあった。

稗田阿求が、『幻想縁起』編纂のためだけに生かされている、人間の姿をした人間ではないような存在に思えて不安で仕方なかったのである。

この毒薬がそんな阿求の願いを叶える唯一の物なのである。自らの手で死ぬるということだけが、稗田阿求が稗田阿求だと思えるのであった。その瞬間のみ、御阿礼の子などという存在ではなく、稗田阿求として生きていると猛烈に思えるのであった。

もし、毒薬を服せば、紫が血相を変えて飛んでくるだろうか。仮に飛んできたところで、阿求の意識は既にないだろう。

次代の御阿礼の子は、もつと厳重な紫の監視下に置かれることになってしまうのか。あるいは、これほど平和ならば、もう、『幻想縁起』は不要と判断され、御阿礼の子は阿求で終わってしまうのだろうか。

稗田阿求にとって、次代の御阿礼の子が、どのような運命を辿ろうが何とも思わなかった。「阿求、居る？」

と、玄関の方から藤原妹紅の声がしたのはそんな時であった。玄関まで行くと、厳しい寒

9 幸福な死

さに阿求は震え上がった。

分厚いコート、マフラーに手袋と耳当て、と完全防備している妹紅を見て、急いで部屋へ上げた。妹紅の持つ暖色の風呂敷に視線を落とし、問うた。

「寒いですね、それは？」

「これお裾分け」

「何ですか？」

「大根」

「大根ですか？」

妹紅が野菜を持つてくるのは今日が初めてではない。春は露の臺、夏は筍、秋は芋、と色々な物を持つてきてくれた。

その好意に嫌悪感を覚えるわけではないのだが、どこか落ち着かない心持ちがあつた。

妹紅を火鉢で暖かな部屋へ通した。阿求も火鉢の前に座し、湯気立つお茶を飲みながら、妹紅の言葉を待った。妹紅はゆっくりと暖まりながら、こう言つた。

「温かいのが良いなあ」

「温かいのですか、少しお待ちください」

妹紅の好意を振り払うのは失礼に思えた。その言葉に操られ、阿求が何か簡単な一品を振る舞う。そんなことが、妹紅が来た時の恒例となっていた。

少し前までは、『幻想縁起』に集中するために給仕が居たのだが、終りが近くなり、暇を出した。給仕は皆、阿求が生活できるのか心配しているようだった。阿求の輝かしい笑顔を見てもまだまだ不安だったらしく、『一人で暮らすということについて』という本を阿求に渡し、屋敷から去った。

この広い屋敷には、阿求と時々訪れる客人である妹紅と鈴仙の他には誰も居ない。料理も掃除も洗濯も、阿求一人で行うしかなかった。給仕達の本のお陰か生活ができないことはなかった。それでも、給仕達が居る時と比べて、随分と一日が短いように覺えた。

春は布団から出るのが億劫になり、のんびりと過ごした。そうすると、普段の調子で締め帯が窮屈になったような違和感を覺えた。夏は暑く、火を扱う台所に向かいたくなくなっ

11 幸福な死

た。ずっと洗濯をしておきたかった。秋は読書と食事に全てを捧げた。そうすると、また帯にいつもと違った苦しさがあった。冬になると水は冷たく、屋敷に入る隙間風に身震いを覚えることがあり、火鉢の前から動きたくなくなることが何度もあった。

『幻想縁起』の編纂に割ける時間は、給仕の居た時と比べると大きく減った。しかし、そういう何気ないことに、阿求は確かな満足を覚えていた。

料理は全然できなかったが、妹紅やミステイアや慧音のお陰で少しずつ作れる品が増えた。そういうこともあって、最近では妹紅のお裾分けに先の失礼とは全然違う申しわけなさを覚えていた。

妹紅は味噌の匂いに釣られたのか、部屋から出て、台所まで来ていた。阿求の持つ盆に並ぶ味噌田楽や徳利を見て、嬉しそうにこう言った。

「良いねえ」

「ちよつと季節外れじゃないでしょうか？」

「良いんじゃない。私が何でもいって言ったんだし」

つまみ食いをしよとすする妹紅に、阿求はたしなめるように言う。

「駄目ですよ、妹紅さん。お手すきでしたら机の物、端に置いておいてくれませんか？」

両手を離せない阿求に代わって、妹紅はすぐに引き戸を開け、丸机に置いてある本や文やらを適当な所にしまってくれた。

「どこにしまおう？」

「机の一番下に」

その時丁度、文机の一番下の引き出しを開けた。妹紅の紅くなった頬に青い色が走つたのを、阿求は見逃さなかつた。妹紅は文をしまい、本を壁際に寄せてくれた。

細やかな食事は、言いがたい空気を払拭するように催された。

「私、公務を終えましたら、お祝いに、どこかへ行きたいです」

「それは、ここから出て、旅をしたいってこと？ 大変だよ？ 雨に降られたら寒いし、泊まる所なんて野宿なんて当たり前よ？ ある人が優しかったら泊めてもらえるかもしれないけどさ。何より、行って、帰ってこないといけないんだからさ」

13 幸福な死

「でしたら、妹紅さん、一緒に来てくれませんか？」

阿求がそう頼んだ時、妹紅の箸が止まった。濃い紅色の頬は酒のせいだけではないだろう。少しの静けさの後、妹紅は一笑してこう言った。

「私？」

「はい、妹紅さんでしたら、外の世界について詳しいと思いますので」

『幻想縁起』を編んでいる時、当然、藤原妹紅のことも収めればならなかった。永琳や輝夜から妹紅のことを聞き、妹紅本人の口からも聞いた。妹紅本人は語らなかつたが、妹紅の父が原因で輝夜との仲が悪いことを教えてもらった。そして、外の住人であつたことも知れた。妹紅と外の世界に行けたら、きっと良いことが沢山あるだろう。そうして、普段通りに薬を飲んで、土に還れたらどれほど幸せだろうか。

阿求の思い描く幸福と比べて、妹紅の表情は全然明るくなかつた。

「私じゃ駄目だよ。私は全然薬にも阿求の身体の状態についても詳しくない。鈴仙か永琳と一緒にの方が良いわ。私だと何かあつた時、何もできない」

「それでも……」

それでも良いですと続けようとした時、妹紅の瞳の底に蠢く悲しい気色を見て、阿求は何も言えなくなつた。

「もう、自分が無力だと思つるのは懲り懲りだわ」

藤原妹紅といえ、不老不死の薬を飲み、蓬萊人となつた人間である。それだけでなく、炎を操る。そのような妹紅を、誰が無力と言えようか。

阿求は頬に血が上がってくるのを覚えながら、熱のある調子で断言した。

「妹紅さんはそんなことありません。無力だなんて、そんなことありません。……私が保証します。ですから、生きて、必ず生きてここに帰ってきます……」

そこから先は言葉にならなかつた。頬に温かいものが流れ、赤いスカートに幾つかの染みを作つた。

どうして流れてきたのか分からず、阿求は戸惑つた。堪えようとしても止めどなく溢れ、いつしか身を屈めた。

15 幸福な死

妹紅は一瞬目を睜り、強張った顔をしたのが見えた。きっと、妹紅には身体の具合が悪いように映ることだろう。

阿求は必死になって否定しようと思った。が、言葉は何一つ音にならず、肩だけが激しく、喘ぐように、上下する。阿求はいつしか両手で顔を覆い、妹紅に心配をかけないように首を振った。

妹紅の大きな手がそっと背中を撫でていた。彼女の慈しむ声に浮き沈みする不安を、阿求は拭いたかった。けれども、咳き込むばかりで何も言葉にならなかった。

「ごめんなさい。そんなつもりで言ったわけじゃなかったの。あなたのことが心配で、ただ、それだけなのよ」

阿求は頷き、赤い目を妹紅に向けて、振り絞るように言った。

「……大丈夫、です。大丈夫……。妹紅さん、一緒に——」

妹紅の目も今にも溢れそうな涙があった。しかし、声はそんなことを思わせないほど優しく、力強かった。

「いいよ、一緒に行こう」

※

『幻想縁起』の編纂を終えた時、季節はまた一つ巡り、雪がちらついていた。灰色の雲が空一面を詰め尽くしていた。晴れていたら澄んだ空に、幾つもの星が輝いているのが見えたことだろう。

砂浜を歩きながら話す阿求と妹紅の言葉には、白い息が付き添っていた。左手を握る妹紅の手は、北風に晒され、随分と冷たかった。阿求の手も同じように冷たいことだろう。そんな些細なことが、何だか嬉しかった。

「寒くありませんか？」

「大丈夫だよ。阿求は？」

「大丈夫です」

「紫様様だね」

阿求と妹紅の旅に最も喜んだのは、紫だった。『幻想縁起』を編み終えた時、そのことを話すと、すぐに準備に取り掛かってくれた。ただスキマを用意するだけでなく、夏に行くのならば紗や絹の着物を織る、冬に行くのならば打掛や羽織を織ると息巻いていた。

予想外の出来事に気圧され、防寒性の高い臙脂色の長羽織を新調してもらったことにした。

長羽織は今までに羽織ったことのない温かさがあった。一体何を織ったのだろうか、と疑問に思うと、紫は嬉しそうに笑うだけで何も言わなかった。

ここを選んだのは、阿求の希望だった。幻想郷にはなく、最も外の世界を感じさせるのはここしかなかった。

海は四方を見渡しても、阿求と妹紅以外の人影は見当たらなかった。海というのは、人で溢れて返っているという知識があった阿求は、妹紅に純粹な疑問をぶつけた。

「妹紅さん、全然人がいませんよ」

妹紅は阿求の質問が面白かったのか笑いながら答えた。

「寒いからね。海っていうのは、大体、泳ぐ所だから。にとりだつて冬場は引き籠もつていいでしょ？」

阿求は砂浜に腰を下ろし、慣れない磯の臭いに時々両眉を寄せながら、暗い海を眺めていた。群れからはぐれた白い鳥が一羽で広大な海原を飛んでいった。

「私は眺めている方が好きです」

「私もそっちの方が好きだよ」

阿求は懐から一通の手搔を取り出し、努めて明るい声で妹紅に言った。

「妹紅さん、私が死んだ時にこれを読んでください」

「……今、そんなことを言わなくてもいいじゃない」

「今だから言えるんです。幻想郷に戻った時、私は生きていますかどうか分かりません」

「どうして？」

妹紅の低い声に、阿求は怖気づきながらもしつかりと答えた。

「先代は誰も、『幻想縁起』の編纂を終えた後のことを記録してないんです。どうして、誰も、

書いてないんでしょうか？それが怖いんです」

妹紅は優しい調子で、昔を振り返るように語り始めた。

「怯える必要はないよ。」

……八代目・阿弥は、普通の女の子として生きた。それは次の御阿礼の子に伝えることじゃないって思ったから、書かなかった。日記を読まれるなんて恥ずかしいじゃない、って言うていたわ。

七代目・阿七は、最期までどういう男だったか分からないわ。『幻想縁起』の編纂をしながら、私達宛に遺書を書いた。その遺書に従ったから、記録はないの。

六代目・阿夢は、真面目な女だったわ。仕事一筋の馬鹿な女よ。『幻想縁起』の編纂を終えたら、私の役目はない、って言うて、湖の底から見つかったわ。……だから、記録はないの。五代目・阿悟は病弱な男だったわ。病床で『幻想縁起』の編纂を続けていたわね。あの子は他に考える余裕なんてなかったでしょうね……『幻想縁起』の編纂の途中で亡くなったのだから。

四代目・阿余は初めての女の子だったわ。四代目で初めての女の子だったから、阿礼も大いに慌てたことでしょうね。色々な所に色々な手紙を書いていたわ。私も何通か持っている。手紙の最後はいつもこうよ。『この手紙の公開を禁ずる』って。記録は手紙だから散り散りとなっているのよ。

阿求の屋敷になかったら、紫か幽々子か……そこらへんに集中しているんじゃない？ 何とか『幻想縁起』の編纂を終えたけど、おかしい記述があつて、この時代は大変だったのよ。紫に頼まれて、自警団なんてやつたりね。

三代目・阿末は酒と女が好きで、紫に色々と言われながら書いたわ。そんなこともあつてか、『幻想郷縁起』には誤字だとか読めない字とかあつて、大変だったわ。こんな男の物を後世に残すのは恥だと、紫が全部燃やしたのよ。だから、残っていないの。

二代目・阿彌は『幻想郷縁起』の編纂の途中で、地震に巻き込まれたから、記録はないのよ。初代・阿一のもこの時の地震に巻き込まれたんじゃないかしら」

妹紅が語り終えた時、阿求はどんどんと早くなる鼓動を必死に抑え込んで、こう訊いた。

「妹紅さん、あなたは何人の御阿礼の子と会ったことがあるんですか？」

月光を浴びる妹紅の頬に、輝くものが流れた。

「全員よ。阿礼や阿一からのお願いだから。皆が『幻想郷縁起』の編纂をして、普通の子として生きられる時間を過ごせるように。だから、ずっと側に居たわ」

阿求は烈しい幸福に襲われ、戦き、しばらく、息をするのを忘れた。息を吹き返した時、こういう言葉も出てきた。

「妹紅さん、私、幸せです。それ、捨ててください」

「うん、……良かった。私もだよ。あなたに会えてよかった」

阿求と妹紅はにっこり笑った。初めて触れた唇は寒さのせいか震えていた。

※

阿求は二通の手紙をしたためると、朝食を食べ、いつものように薬を飲んだ。薬を飲んだ

時に覚える苦味がなく、飲んだ瞬間、これが毒薬であると理解した。

吐き出そうとしても、次の瞬間には心地好いまどろみの中にいるようで身体の自由が利かない。身体の力が急に抜け、文机の上に身体が落ちた。

『この手紙を妹紅さんが読まれているということは、私はメデイスン・メラニコリーに作成を依頼した毒を飲んだ、ということでしょう。』

妹紅さんが発見したあの瓶の中に、私でもしっかりと思い出さないと見分けが付かないように、死に至る毒薬が入っていたんです。

もっと、もっと生きようと思っていました。でも、怖いです。私も妹紅さんも悲しむことが。

ですから、ここで、私も妹紅さんも最も幸福な今、死にます。何も言わずにごめんなさい。さようなら、また会いましょう』

『この手紙を書いているのは、先代、九代目・稗田阿求です。あなたがどのような生活を送るのか全然分かりません。』

あなたが男の子なのか女の子なのかも分かりません。ですが、きっと、藤原妹紅と名乗る人が来ます。その人は優しいです。どうか信じてください。

『私みたいに死んではいけません。生きられる限り精一杯生きてください』〈了〉

白露

「まだ帰って来てないの？ 手紙は？」

「それが何にも……。何か聞いてませんか？」

「何も聞いてないわ」

藤原妹紅は稗田阿求の屋敷へ足を運び、阿求が不在であることにいよいよ驚きを露わにした。稗田阿求が永遠亭に行つて、今日で一週間となる。女中も心配なようで、何か知っているのではないかと妹紅の前に腰を落ち着かせたが、妹紅が何も知らないと分かるとすぐに立ち上がろうとした。

「待って」

「何か？」

「少し、話し相手になつてちょうだい」

「私でいいんですか？」

「ええ、いいのよ」

と言つたが、妹紅と女中の間に沈黙が降つてきたのはすぐだった。女中は慣れないことな

のか、落ち着きなく、ぎこちなく黙っている。妹紅は机の上に茶が一つしかないことに気がつき、腰を上げようとした。女中はすぐに妹紅が動こうとしたことに気付き声を上げた。

「どちらに？」

「あなたの分の紅茶を」

「いえ、私のことは気になさらず……え、いや、私がやりますので」

「いいのよ、別に。話し相手なんだから」

柔らかく女中を制し、妹紅は台所へ向かった。どこに何があるのかは女中より妹紅の方が詳しくかった。台所に向かう途中に書斎の方へ足を運んでみたが、障子はやはり閉ざされていた。戸には丁寧な字で書かれた『編纂中です、入らないでください』という札が掛けられている。これは阿求が考えた女中対策である。あの女中はよく編纂中の書斎へ入ってきた。編纂中は静かでないし集中できない阿求は、すぐにその音に反応し、困ったように両眉を寄せる。女中は阿求にも弁明していたが、悪気があって編纂中に入ってきているのではない。むしろ、非常に気を遣っているのだ。阿求は毎食後に紅茶を飲むのを常としていたが、起きた時

や寝る前、編纂の途中に、紅茶や軽い食事を食べることが多かった。そういう習慣を、女中も知っていたためか、女中が書齋に来るのは、鉄瓶が空になった頃や漆器の更に菓子がなく
なつた頃だった。

その気遣いが双方の間で上手く伝わらず、自然と妹紅が取り持つことになった。だから妹紅が女中の代わりをすることもあれば、阿求の言葉を女中に伝えることもあった。

妹紅は台所で紅茶の用意をしながら、新聞を読む別の女中に声をかけた。女中は眼鏡を外し、静かに答える。

「阿求のこと、書いてある？」

「書いてあるわけではないですか」

「やっぱり？ 何か良いことある？」

「季節の変わり目だから気を付けてください、って」

「もう？」

「もうです……紅茶、運んだ方が良いでしょう」

「もうちよつと蒸らさない」と

「あの娘は、あんまり好きじゃないです」

「そうなの？」

「砂糖はそちらの棚にありますので。三つあれば足ります」

「……甘くない？」

「甘い方が好みなんです」

「阿求と大違いね」

「大変ですよ」

「お疲れ様、ありがとうね、いつも」

「仕事ですから」

阿求の代になって、変わったことは幾つかある。一つは九代目が乙女なこと。一つは女中が全員変わっていること。一つは紅茶の消費が屋敷に広まったこと。一つは書斎に蓄音機が置かれるようになったこと。乙女の趣味が屋敷全体に広がり、八代目の阿弥と比べて、時が

ゆっくりと動いていること。

一つ一つ数えはじめると沢山あるが、変わらないこともある。例えば、妹紅が屋敷に来ること。これは、初代である阿一の代から続いている。まだ幻想郷が幻想郷と呼ばれず、外の世界の村だった頃、妹紅は阿一と出会った。彼はあの村で珍しく、字が読め、書けた。妹紅もその珍しい一人であったため、彼の書を覗いたり、言葉の意味を訊いたり、阿一の分からない部分も手伝ったりしていた。そういう生活は長続きせず、いつまで経っても若い妹紅を、阿一は訝しむ、村の平和のために、妹紅を拒んだ。

それでも、こうして妹紅が屋敷に足を運んでいるのは、阿一が一生を終え、阿爾に転生し、阿爾が亡くなり、阿未がこの世に生を授かり……阿求が育ったからである。もし、御阿礼の子が妹紅や輝夜のように老いることも死ぬこともなければ、妹紅はここまで足を運ばなかったであろう。

足繁く通うのは、今度の御阿礼の子はどのような一生を歩むのであろうか、先代のようなことは起きないであろうか、そういう老婆心からだった。もし、先代達と同じような失敗を

繰り返そうとするのならば、妹紅が制しなければならぬ。もし、変わったことがあれば、妹紅が支えなければならぬ。先代の話を交えながら。先代達の思い返してみると、やはり、今回の事は何かが変だ。

客間に戻り、机に紅茶を置くと、女中はすぐに三つ砂糖を入れた。

「やっぱり、長いわ」

「阿求様ですか」

「そうよ、前はこんなことなかったんだけどね」

「前……阿弥様の時にも、永遠亭に行くことはあったんですか？」

「あつたわ。けど、仮に検査だとしても、ここまで時間がかかったことはなかったわ。時間がかかりそうだったら、永琳が一筆執らせるし」

女中の顔が微かに曇り、妹紅はすぐに否定の言葉を並べた。

「阿求が倒れたとかだったら、鈴仙が飛んでくるから大丈夫よ」

そういう言葉を並べた妹紅であったが、妹紅自身も女中の思っているようなことについて

考えないわけではなかった。何の連絡もなく帰らないとなれば、そういう可能性も考えてしまふ。阿求の生はもう折り返し地点に至っている。

御阿礼の子が永遠亭に足を運ぶようになったのは、阿求が初めてではない。阿弥の代から、里の診療所の設備や医者では限界が生じるようになった。阿弥の生きると、人里の生きる感覚に微妙な違いがあり、信用できなくなると漏らしていた。それからというもの、鈴仙が薬を届けに来る時に状態を診るのだが発見できないこともあり、定期的に永遠亭に足を運ぶようになった。

それでも、今回のように何の連絡もなく帰ってこない日はなかった。女中との話を適当なところで切り上げ、永遠亭へ様子を見に行った方が良さそうだ。

女中に一声かけようとした時、玄関の方が騒がしくなった。大きな声が響いてきた。

「阿求様！」

客間の空気が軽くなり、妹紅と女中が動くようになったのは同時だった。女中は俊敏に反応し、すぐに客間から出て行った。騒々しい足音が遠ざかるのを聞きながら、妹紅は何事もなかつ

たように腰を落ち着かせた。女中のように彼女の元へ駆け寄りたかったが、一気に阿求の元へ人が集まれば、彼女を心配させてしまうことだろう。

女中が客人が来ていることを知らせるのならば、阿求の方から妹紅の所に来ることだろう。妹紅は静かに茶碗を傾け、阿求を待った。阿求が来た時、何を訊こうかと考えながら。阿求が永遠亭へ訪れている間、書斎は一度も開けられていない。となれば、目を通さなければならぬ物が堆く積まれていることだろう。

妹紅が客間を出た時、二人の女中に挟まれ諦めたように微苦笑をする阿求が来た。久し振りに見た阿求は、記憶の中と比べて少し頬周りの肉が削れたようで、薄い影が入っているようだった。けれども、妹紅はそんなことを気にしないように笑顔を浮かべた。

「お帰り、長かったじゃない」

微笑を浮かべる阿求の言葉の端に、妹紅は聞き慣れない棘を感じた。少し距離を覚えさせるような痛みだったが、妹紅は踏み込むように言う。

「ただいんです。何かありましたか？」

「何もなかったら来ないわよ」

「紅茶でも飲みますか？」

阿求は機敏に二人の女中に命じていたが、言葉の最後の方は強い調子を無理に吐いているように聞こえた。

「書斎でも構いませんか？」

「ええ」

一週間振りに踏み入れた書斎は、庭の空気を浴び、冷たくなっていた。雨が降っていたのか庭の葉はいずれも濡れ、雫を滴らせていた。阿求は文机の上に積み上げられた葉書や手紙を見て、困ったように眉を寄せた。そのどれもが、阿求の体調を伺うものであった。

返事を認める筆の走る音の間を、時々、露が落ちる音が響いた。妹紅は阿求の筆運びを見ながら、その指先も少し細くなったような錯覚を覚えた。妹紅は殆ど確信を持って訊いた。

「倒れたのね？」

「済みません、黙っていて」

「遅かれ早かれ、起きてしまうことだからね、いいのよ」

「言おうとした時には病床でして」

「でしようね」

阿求は筆を置き、堪えていた胸の痛みを吐き出すように何度も咳を漏らす。苦しそうに寄る眉や薄つすらと瞳に浮かぶ涙を見て、また永遠亭へ帰るのだらうと分かった。今度は一週間と短い期間ではない。そのまま、もう屋敷には帰ってこないことも有り得るかもしれない。

永遠亭に足を運べばいつでも会えるかもしれないが、ここで阿求とこうして会い、話せるのは残り僅かかもしれない。妹紅が去った後、再び永遠亭に向かうことだって考えられる。どうして、帰ってきたのであろうか。そんな残酷な質問をぶつけられるほど、妹紅は阿求達を知らないわけがなかった。

35 白露
永遠亭は御阿礼の子の家ではなければ、帰る場所でもない。御阿礼の子が帰ってくる場所はこの屋敷なのだ。そして、そこで待つ者達こそ、帰ってくる所なのである。そこで安らかな眠りに落ち、次代へと転生すれば良い。しかしそれは、妹紅達を始めとした外部の考え方

である。

阿求は一つの返事を書き、庭へ目を遣った。葉の先の白露が落ち、寂しい音が書齋へ広がった。一つ落ちたかと思えば、少し間隔が開き、また一つと白露が落ちる。阿求はそのうち、ぼつりと本音を漏らした。

「冬まで頑張るって約束したんです」

「……どうして冬なの？」

「秋は寂しいじゃありませんか。寂しくありませんでしたか？」

妹紅は小さく頷き、目頭を抑え、こういう我儘を口にした。

「でも、冬は寒いわ。春は楽しくないし、夏は涼が欲しくなるのよ」

「それは随分と困りましたね」

阿求は安心したように嬉しそうに笑う。妹紅も釣られて笑う。もうすぐ、山の葉が色付き、霜が降り、厳しい寒さが続く頃になるだろう。その頃、阿求はどこにいたのであるうか。ここではないどこかへいるのではないだろうか。

別れはいつでも嫌だった。次代へ転生するといつても別れは別れなのである。御阿礼の子の側にいるだけで、妹紅はどれほど彼等を支えられ、助けになっているのか分からない。

妹紅はそういう手助けや支えになれない人間であった。そういう感覚は命に限りがある者達の特権であり、妹紅にとつては辛い体験になるからだ。しかし、それでも、御阿礼の子達にはそういう感情が働いてしまう。

「冬までなんて言わず、もっと、一杯……もっと」

「妹紅さん……」

阿求のか細い指が妹紅の頬を撫で、露を拭う。震える手で妹紅を包み、こういう和歌を囁いた。

「夕置きて明日は消ぬる白露の消ぬべき恋も我れはするかも」〈了〉

ビブロフィリアとさまよえる妹

稗田阿求は鈴奈庵に本を返しに行った時、怒りを顔全面に出している本居小鈴から一冊の本を受け取った。小口が日に焼けた本は、一部の頁が破れ取られている。

過去に、阿求の屋敷で保管されていた巻物が字喰い虫の被害を受け、読めなくなったのは違い、人間か妖怪が作為的に行ったことである。

しかし、鈴奈庵はこの前訪れた時と何ら変化が見受けられない。

「泥棒ってこと？」

「多分ね。阿求のところは？」

「ないわ」

「私の所だけなのかしら……？」

「紅魔館は？」

「咲夜さんが来た時に訊いてみるわ」

「これは、いつ気付いたの？」

「今朝よ」

「昨日の晩は？」

「何ともなかったのよ」

「錠を解いて、侵入して、破る……。狙いは何なのかしら……」

「それが分かったら苦勞しないわよ」

阿求が頁を捲り、他に破られたところがないか確認していると、破れている頁より前のところに、桜色の葉が挟まれていた。その葉は、小鈴が愛用している葉だった。

小鈴は、客が来るまでの間、この本を読もうとしていたのだろう。そうして読み進めていく内に、頁が破り取られていることに気付いたのだ。しかも、一頁、二頁ではなく、かなりまとまった量を力任せに破られている。

阿求は小鈴の心情を気遣うように優しく声をかけたが、逆効果だったらしく、悲鳴のような声が返って来た。

「……災難ね」

「災難なんてことじゃないわよ！ 物語はいよいよ佳境！ 愛した二人はどうなるのかってと

ころなの！そこを、そこを……！」

このことは、小鈴が疑問に思っていたように、鈴奈庵だけで終るとは思えない。必ずや阿求の屋敷まで伸びてくることであろう。

おそらく、犯人は妖怪であろう。どの程度ならば、犯行に及べるのか試しているのではないだろうか。小鈴は可能だった、紅魔館はどうか、香霖堂はどうか、魔理沙の所はどうか、そして、阿求の屋敷は……。

阿求の屋敷には『幻想郷縁起』編纂のための貴重な資料が保管されている。犯人の狙いはおそらく、その資料なのではないか。資料を狙うと推測したところで、一体、どのような妖怪なのか判別できない。

「妖怪の仕業かしら？」

「どっちでもいいわ。私は、許せないのよ。読書の楽しみを奪った犯人が！」

「そうね。霊夢さんには？」

「妖怪だったら、お願いするわ。いい？人間だったら、許さないから」

「人間だったらどうするわけ？」

「一生地獄みたいな労働を強いるのよ。音を上げても許さないわ。ビブロフィリアの本を奪ったんだから！」

復讐に燃える小鈴に分かれを告げ、阿求は屋敷に戻り、すぐに屋敷の保管されている資料を一ヶ所に集めるように命じた。それから、交代制で見張りをしてほしい、ということも頼んだ。

突然のことに戸惑う女中達だったが、鈴奈庵での事件を説明するとすぐに納得したように緊張を帯びた顔付きで警護の任を全うしようとする。

阿求も資料の山と一緒に閉じこもり、来るべき犯人を、『幻想郷縁起』の編纂を行いながら待とうと思った。

女中達と大量の食料を買い込んだ帰り、咲夜と出会った。彼女もまた、両手一杯に食料を抱えている。

「咲夜さん、鈴奈庵で書物を破られることがあったんです。紅魔館は平気ですか？」

「パチュリー様が憤っていて大変よ」

「……まさか、紅魔館ですか？」

「愛読書の一部が破られていてね……。もう図書館には誰も入れさせないとのことよ」

「もし入れば？」

「黒焦げですって」

「それは随分と……」

「外部の犯行だから容赦しないそうよ」

「外部？」

「ええ、まさか、私達を疑って？」

「いえ、そんなわけでは……」

「破られた頁が屋敷内にないんだから、外部の犯行と見て間違いなさそうよ。鈴奈庵は？」

「分かりませんねえ。ただ、小鈴の所もパチュリーさんの所も同一犯と見て良さそうです」

「犯人はまた来るわ」

「そんな危険を犯すでしょうか？」

「どうして来ないと思うの？ 蔵書を考えれば、パチュリー様の所が一番じゃない」

「小鈴の所に行つてから、パチュリーさんの所へ行つたんでしょか……。パチュリーさんがそのことに気付いたのは何時なんです？」

「今朝よ」

「小鈴が気付いたのも今朝なんです」

「おかしいわね……。紅魔館に昨夜、客人はないのよ」

「今朝はどうです？」

「魔理沙が来たぐらいよ」

「魔理沙さんがそんなことをするとは思えませんね」

「そうですね。それで、どうして来ない？」

「もう一度図書館に入るには危険過ぎることだと思つてんです。犯人が誰で、どのような方法で入つたのか、どうしてそんなことをしたのかは分かりません。ですが、そんなことをした

パチュリーさんの所にもう一度なんて愚かなことをするとは考えられません」

門番には美鈴がおり、内部に侵入できたところで時を止められる咲夜が待ち構えており、吸血鬼のスカレット姉妹、図書館の主であるパチュリーに気付かれず、本の一部を奪い去るなど人間のできることではない。もし、次、同じようなことが起きれば、十中八九、妖怪の仕業である。

「それにですね、パチュリーさんの所に置いてある本って読めないですよね」

「読めない？」

「色々な国の言葉で書かれているんですよ。どこにどの言葉でしまっているのかパチュリーさんと小悪魔さんしか知らないと思います。ですから、読める本を選んでいる間に、パチュリーさん達に見付かる可能性もあるわけです。

たとえ蔵書が多くても、これほど危険な所に再び行くと考えられません」

「……ただの馬鹿ではないみたいね」

「おそらく、ですが」

「それじゃ、阿求は次、どこが狙われると思うの？」

「分かりません、犯人じゃないんですから。でも、きっと人里だと思えます」

「どうして？」

「妖怪がいまさんから」

悲しき結論に辿り着き、引き籠もる前に霊夢に一報を入れようか悩んだ。誰が何のために、このようなことをしているのか分からない今、そもそも犯人が人間なのか妖怪なのか確かではない今、霊夢に頼むのは時期尚早のような気がしてならないのだ。

※

屋敷に戻った頃、日は沈みかけていた。本の山に背をあずけ、まだ読んでいない資料を読んでいた。

その資料は先代の日記や取り留めのない雑記の山だった。俳句や和歌もあれば、少女らし

い恋の悩みや手紙も本としてまとめられていた。

手紙の束の中へ、古明地さとりからの手紙があった。

『阿弥へ』

お手紙ありがとうございます。その願いは叶えない方が良いと思います。恋は罪悪ですよ、分かっていますか？ きつと分からないかもしれません。ですが、あなたのように短命ですと恋は罪悪になってしまふんです。

いいですか？ 分からないようでしたら、分かるような本を何冊かお貸しします』

さとりがそういうことを書くとは非常に説得力があった。さとりは彼女の身を案じて、そのようなことを書いているのだろう。

『阿弥へ』

先日は済みませんでした。ついあなたが嬉しそうでしたので、あんなことを警告として書いてしまいました。

このことから分かると思いますが、恋は人を変えます。人に限らず私達妖怪を変えてし

まうころでしょう。ですから、阿弥、あなたはできたら今のままでいてください。

何事も変わらないのが一番なのです。変わってしまったえば、きつと今まで何ともなかったことに悲しくなったり、寂しくなったり、辛くなったり、苦しくなったり……沢山、嫌なことが起きます。ですから、あなたは普通に生きればそれで良いんです。ずれることなく、まっすぐ、あなたはあなたの生を全うすべきなのです。

もし、あなたが嫌でなければ、また手紙を書いてください。あなたの文章は人間的ですごく楽しいです。』

阿求はさとりの手紙を読み、自分も先代のようにさとりに一筆執ろうと考えた。今、さとりは地霊殿でたった一人で、本を読んでいることだろう。彼女の寂しさが少しでも治まれば良い。

さとりから借りた本の名前は、先代の日記に度々登場していた。しかし、返したのかどうかさとりの返事から分からない。本の山を探すと、それらしい古い本があった。

阿求は本を読みながら、さとりへの手紙を書いた。

『古明地さとりさんへ』

久し振りでです。いよいよ寒さが本格的になってきましたが、地霊殿は寒くありませんか？
書庫を整理していると先代が保管していた手紙が出てきました。そこのにあなたの名前があり、書庫の中にあなたが貸した本もありましたので、こうして筆を執ってみました。

今は先代が読んだであろう『こころ』を読みながら、書いています。この話はいつ読んでも、悲しく、淋しく、どうして私達人間はこうも愚かなのでしょうか？ 誰にも恋い焦がれず、己の向上に心血を注げば、彼等のようにならないのかもしれないかもしれません。

ですが、そんなことは私達が人間である以上、不可能なんです。

さとりさんはどう思いますか？

それと全然関係ありませんが、本は大事にしておいてください。さとりさんの蔵書は少ないですから。最近、里や紅魔館で本の頁が、それも愛読書が破られるということがあります。お返事お待ちしております。さとりさんさえよろしければ、先代のように友でありたいです』
阿求はそれから、『こころ』を読んだ。いつしか夜が明け、寒々しい陽の光が窓から入り

込んでいた。欠伸を一つ零し、『ごころ』と手紙をさとりに送った。

『追伸

遅れて済みません。本を返します』

※

『阿求へ

久し振りです。随分と久し振りで、少し忘れていました。あなたのこともそして本のこと
も。ありがとうございます。

でも、阿求、頁を破ったのならば正直に言ってほしかったです。それも遺書の部分をごつ
そり。

読み返してみても、びっくりしました。同時に非常に腹立たしく思います。あなたの書いて

いた通り、これも妖怪の仕業なのでしょうか？ 今こそあなたと会って、そのところを見た
いと思つたことはありません。

それでも、あなたからの手紙は嬉しいです。阿弥の手紙も唐突でしたから、同じ魂を有し
ていると分かりました。きっと、歴代の御阿礼の子も思うがままに手紙を書いたことなので
しょう。

謝罪でも何でもいいのでお返事待っています』

阿求は破つた記憶はない。しかも、そんな物語の大事な部分を破るなど許せるものではな
い。『こころ』は先生の遺書のための物語だ。そして、あの本はさとりと御阿礼の子を繋ぐ
大切な本である。

必ずや犯人を見つけ出し、この心の内を吐き出せねばならない。心の内を吐き出せず別れ
る前に。

その夜も阿求は本の山に背を預け、四方八方に気を張り巡らせながら、来るべき妖怪に備
えていた。四方に呪符を貼り、妖怪に備える。

その時である。障子が開き、一人の少女が入ってきた。黒い帽子を被った、色の薄い少女であった。

深い碧眼が、阿求を見つめていた。阿求も少女を見ていた。優しく声をかけると、意外そうな調子が返ってきた。

「古明地こいしさんですね」

「……どうして？」

「どうしてでしょうね。周波が合っただけです」

「周波？ 何それ」

本へと向かうこいしの前に阿求は立ち塞がった。

「私とこいしさんの思いが、『こころ』を通して一致しただけです」

阿求は彼女のことを知っていた。同時に、彼女でなければ今回のことは不可能であると分かっていた。

古明地こいしは無意識の妖怪である。咲夜やパチュリーや小鈴や阿求の無意識を操って、

犯行に移ったのである。ならば、こういう疑問が残る。

「どうです？ アリサの告白は、杉子の思いは、先生の気持ちは分かりそうですか？」

その言葉に、こいしは微笑して、畳に座り込んだ。

「全然。皆、面白そうに読むから気になって読んでみたけど全然分からないわ。所詮、嘘じゃない」

「でも、傷付かない嘘だと思いませんか？」

「皆淋しくなって、結局傷付いているじゃない……」

「だから、破ったんですか？」

「どうして、作られた世界ですら人間達は傷付け合うの？」

「それは、私達が互いを思ったり、思われたりするからです。酷いことを言いますが、そんなふうに相手を思うことによって自己の罪を相手に擦り付けるんです」

碧眼が阿求を射抜くように睨む。

「……そんなことをしてどうなるの？」

「自分が楽になれます」

阿求はそう言ったが、全然そうではないことを知っていた。

しかし、こいしにそのことを説明しても、まだ難しいことだろう。彼女の世界には、一かゼロしかない。一とゼロの狭間という極小さな、微細な思ひは、彼女自身がこれから身を持つて知らなければならぬ。

「やっぱり人間って身勝手に、我が儘で、救いようがないわ」

こいしの叫びが、阿求の心を穿つ。彼女は姉妹二人で、阿求よりもずっとずっと沢山の人間を見てきた。

そして彼女達は、彼女達なりに生きるために別々の生き方を歩んだ。

こいしの幸福を奪い、この事件の犯人まで仕立て上げてしまったのは、阿求達人間の心の内なのである。

移りやすく、物語に夢中になってしまふ阿求達ビブロフィリアの罪であった。

それでも、否、だからこそ、阿求達はこいしを許せなかった。

「その通りです。ですので、こうして本を読み、同じ失敗をしないようにしているんです」
「本当？」

こいしの瑞々しい目が、阿求を覗き込む。阿求は静かに、それでもしつかりと頷いた。すると、こいしは踵を返し、部屋から出て行こうとした。

去り際、こいしは低い声でこう言った。

「嘘だったら許さないから」

破り捨てられた物語の断片が部屋に散らばっていた。阿求は全てを集め、真っ先にさとりに手紙を書いた。

※

『さとりさんへ』

事の顛末は、簡単に書いてしまいますと、私達人間の心が、古明地こいしの猜疑心を育ん

でしまったんです。

私達の心があまりに醜く、汚れ、彼女の瞳を汚してしまいました。彼女は私達のその汚れが、あんな物語があるからだと思い、行動しました。

こいしさんを責めようと思いましたが。ですが、私達人間にそのような資格はあるんでしょうか？ 私達が追いやった妖怪を、私達が再び言葉を浴びせるなど……。

私にはできませんでした。

ですので、さとりさん、お願いがあります。唯一の姉として、こいしさんを叱ってください。よろしくお願いします。

『ごころ』の遺書はこいしさんから返してもらってくださいます。もしさとりさんの本棚に妖魔本がありましたら至急送ってください。助かります』

阿求は屋敷の者に命じ、最高級の紅茶とお菓子を用意させ、怒り狂う小鈴がこれで少しは落ち着いてくれればいいのに、と脇に置いたさとりからの送り物を見た。〈了〉

ダ
・
カ
ー
ポ

イタリア王国の首相であるムッソリーニが処刑されたが、シチリア島西部に位置するモンテプレは何一つ変わらなかった。

村唯一の小さな教会は先の戦争の爆撃を受け、アフリカからの熱い風や地中海の生温い風や日差しに晒されることとなった。牧師もオルガンの弾き手もない教会に足を運ぶ住民が少なく、いつしか人が寄り付かなくなった。

そんな教会から、オルガンの音が聞こえるようになったのは、この夏からであった。

少女は、地中海の強い日差しを遮るように目深に赤い帽子を被り、流れる汗を気にせず一心不乱にピアノを弾く。

サルヴァトーレ・ジュリアーノは瓦礫に腰掛け、時々、彼女の奏でる曲に耳を傾ける。軽やかで爽やかな、朝を思わせる調べを。

音楽に疎いサルヴァトーレは、ミサで聞いたこのとない音楽だったため、どこか異国の音楽なのだろうと考えていた。シチリアは地中海の中心に位置することから、フェニキア人、ギリシア人、ローマ人、アラブ人、フランス人、スペイン人、イタリア人に絶えず支配され

続け、様々な国の文化と人間が折々に混じり合っている。

加えて、長い航海の休憩地点として用いられることもあり、サルヴァトーレは、彼女もきつと他所の国の商人の娘なのだろうと、異様に白い耳を見て、そんなことを思った。

彼女の演奏は、朝を思わせるだけで終る。続きを弾こうと幾つかの音を出すのだが、どれも違うのか、小首を傾げる。何日も同じ節を聞かされるサルヴァトーレはいよいよ傍観できなくなった。

「おはよう。何て曲なんだ？」

まだ十代の半ばにも達していない幼い顔立ちをした、丸々とした薄茶色の瞳が、何かを訴えるようにサルヴァトーレを見つめている。

「昔、皆で弾いていた曲」

「良い曲だ、続きは弾かないのか？」

「思い出せないの。姉さん達と一緒に弾いていたことは覚えているのだけど……」

彼女の頬が幸福な過去を思い返すかのように緩んだ。サルヴァトーレの過去は彼女のように

に良いものではない。

サルヴァトーレは生きるために警察を射殺し、山賊となったのである。

戦争に敗れた多くの国がそういう経過を迎えるように、イタリアも食糧危機に陥った。加えて、経済の混乱も合わさり、明日を生きられる保証があったのは、大土地所有者や医師といった特権階級の間達だけだった。

食いつなぐための食糧は無論、酒や煙草といった嗜好品、靴や衣類、全てが闇市に揃っていた。しかし、シチリア島の大部分を占める小作人達は、法外な値段で取引される闇市で物を買う、生きる術を見付けられず、飢えと貧困の中で過ごすことを余儀なくされた。

サルヴァトーレは警察に追わながら、私腹を肥やす地主達の家を襲い、独立を夢見る農民達に明日を生きるための食料を分け与えた。

サルヴァトーレはオルガンに歩み寄り、何十と聞いた旋律を繰り返す。彼女ののように清々しいものではなく、辿々しい、教会の背後にそびえる禿山のような荒いものだった。

サルヴァトーレは堪らず笑った。彼女は笑わず、サルヴァトーレに教えるようにゆっくり

と丁寧に弾いた。白い指が鍵盤の上で踊ると、弾んだ音が返ってくる。

「……凄いな」

「あなただつてできるわ。ねえ、一緒に練習しない？」

もしサルヴァトーレが山賊でなければ、ただの青年だったのならば、シチリアのどこにでもいる農夫であれば、彼女の言葉を笑顔で受け入れたことだろう。サルヴァトーレはもう、普通の青年ではない。絶えず警察に怯え、『名誉ある男』と呼ばれるマフィアにもなれない、ならず者の一人である。

生きるために悪党になったサルヴァトーレが彼女と深く関われば、彼女の奏でる音楽が、今のようなものではなくなるような気がする。

彼女の音楽が変わってしまうぐらいならば、サルヴァトーレは永遠に聴き手で良かった。時々訪れ、彼女の演奏に耳を傾ける。それだけで十分なのだ。

「お前がもう少し大きくなったら、教えてくれよ」

「そう、じゃ、待っているわ。約束ね」

「サルヴァトーレ。サルヴァトーレ・ジュリアーノ」

「リリカよ。リリカ・プリズムリバー」

リリカの姉のことを一切、訊かなかった。訊いてしまえば、姉達を探してしまい、過去を知ろうとし、今のような演者と聞き手の関係ではなくなってしまうような恐れがある気がしたのだ。

山賊と関わる者達の末路はいずれも悲惨である。懸命に匿ったところで、警察にしょつ引かれる。

ただ姉達と再会したいだけだったリリカの願いは叶えられず、サルヴァトーレと関わってしまったがゆえ歪められてしまうことは目に見えている。

サルヴァトーレはそんなことのために山賊になったのではない。己のために、ただ己のためだけに山賊になったのである。

「私、ここで待っているわ」

リリカの澄んだ声を背に受けながら、サルヴァトーレは教会を去った。一人残ったリリカ

の賛美歌を聞きながら、彼女がシチリアを支配する熱気に巻き込まれないことを神へと祈っていた。

シチリア独立運動に、それまで連合軍と繋がっていたマフィアが合流したのは、何もマフィアがシチリア民族だからという理由だけではない。独立運動には指導者はいたが、実務的な政治に強い人間達がいなかった。その隙間を埋めるべく連合軍から各地に登用されたマフィアが丁度良い存在になった。

独立運動はマフィアというシチリアにおける最大権力を存在を取り入れることに成功し、政治家や警察やアメリカと繋がり、農民達の独立への思いは一層増すこととなった。

マフィアという存在はシチリア島民の憧れであり、『名誉ある男』と呼ばれ続けている集団である。

彼等は、他民族から支配され続け、法の下にも実質的な政治からも虐げられたシチリア民族が、独自の法や掟として作り上げたものである。

サルヴァトーレはリリカと別れた後、ロバに跨り、モンテプレからかなり離れた名もない

あばら屋の倉庫に降り立った。日は高い所に昇り、故郷の禿山すら見えない。少し経って、ジープから、一人の髭の男が降りてきた。

折り目の正しいスーツを着た浅黒い男は、大土地所有者か政治家か医者か弁護士か、所謂、特権階級の人間だとサルヴァトーレの嗅覚が捉えた。

サルヴァトーレは特権階級の人間が持ち合わせている警察の影に勘付き、瞬時に懐に手を忍ばせた。拳銃の標準を合わせたが、男は動じることなく、低い声で訊く。

「独立についてどう思う？」

「どう？」

「今の状況について、どう思う？」

「そんな難しいことは分からない」

「そうか。ならば、こう言えば分かるか？ シチリア独立運動は、このままでは失敗に終る」

反射的に引き金を引いた。が、怒りに震えた腕では、男の胸に風穴を空けることはできず、明後日の方向に駆ける。

サルヴァトーレには何故、独立運動が失敗に終るのか分からなかった。全ての島民の願いが何故、そのようなことになるのか分からなかった。

ただ一つ分かることは、この男は敵だということだ。独立運動が失敗に終るわけがない。マフィアが介入しているのだ。名譽ある男達が賛同してくれているのだ。

両手で銃を握り、再び男の胸に銃口を合わせる。男は銃口を向けられているのに拘らず、落ち着き払った調子で続ける。

「失敗に終わらせないために、お前に義勇軍に入ってほしい」

シチリア独立運動義勇軍というものがあるのを聞いたことがある。独立運動が武力を用いての闘争となった頃から、シチリア東部に位置するカターニアを中心に広がったものだ。しかしそれは、東部だけの現象ではなかったのか。何故、西部にいるサルヴァトーレの元へ、男の元へそんなものが広がっているのだろうか。

独立運動の裏でどのようなことが動いているのか全然分からなかった。それでも、義勇軍に参加できるのならば、それで良かった。

義勇軍に入るということは、山賊ではなくなり、祖国であるシチリアのために戦う戦士になることを意味する。

これは、己を山賊に仕立てあげた国家との戦いでもある。サルヴァトーレがこれまで行ってきた殺人、放火、窃盗という数々の犯罪を帳消しにできるかもしれない。

サルヴァトーレは銃を下ろしたが、男の言葉を正直に信じられなかった。こちらから提案しなければ、男達の都合の良いように使われるだけだ。

「独立した暁には、俺がこれまで行ってきたことを帳消しにしてほしい」

「容易いことだ」

サルヴァトーレは銃をしまい、男の手を取った。

それからまもなくサルヴァトーレの仲間達は、義勇軍となれたことを喜び、すぐに行動を開始しようとした。しかし、サルヴァトーレは彼等を引き留めた。義勇軍になれたところで、戦う相手はこれまでと何ら変わらない。

独立運動の熱気により農民を巻き込むことができるが、彼等の協力を仰ぎ、戦力として共

に戦わせることはできない。彼等はただの農民なのである。銃の使い方も殺し方も知らない、過酷な今を生き抜くことしかできないか弱い存在なのである。

義勇軍の名の元、各地に散らばった仲間達を集めることは出来るだろうが、敵たる警察や軍隊が待つてくれるとは思えない。サルヴァトーレ達は義勇軍であり、山賊でもあるのだ。山賊が独立運動に関わっていることが表沙汰になってしまえば、運動に陰を落とす可能性がある。

義勇軍になれたからといって、大々的に動くことは許されない。山賊であることを絶えず忘れず、動かなければならない。

何より、警察や軍隊と真正面から戦ったところで、勝てる可能性は非常に低い。相手の人数は勿論、武器の差もある。マフィアから武器を流してもらうことも考えたが、政治家や警察はどこで繋がっているのか明らかではない以上、協力を仰ぐのは危ない。

マフィアによる根回しが警察まで伸びていることを聞取引で見たことがある。サルヴァトーレ達が驢馬で小規模な取引を行っているのは警察に見つかる一方で、トラックで運ぶ男達は

見逃された。

彼等と戦うためには武器を調達しながら戦わなければならない。山賊であったサルヴァートル達は、平地で戦うよりも山で隠れながら戦う方が優位に立てる。真正面から敵に対峙すれば、五十人前後の部隊はすぐに壊滅する。

地の利を活かせるところで、少数を誘き出しながら戦った方が良い。攻め時は夜、火がよく燃え広がる冬に行動を開始するべきであろう。

※

モンテレプレの朝は、オルガンと共にやってくる。錦の御旗を携えて、再び、やって来ると、風はいつしか秋の気配を忍ばせていた。

リリカの姿はそこにはなく、代わりに雲のように柔らかそうな少女が座っている。少女の

音色はリリカに近しいものがありながら、リリカとは全然比べ物にならないほど陽気な音色だった。

まるで、サルヴァトーレが独立の戦士となったのを祝福するかのような音楽だった。

リリカの姿がないことが寂しく思えたが、東部の争いが、西部にも吹き荒れる前に彼女がシチリアを去ったと考えると安心した。

リリカは姉達と再会できたであろうか。それだけが気がかりだった。もし再会できたのならば、あの曲の全貌が知りたい。

「なあ、そこに小さい少女がいたんだ。見たことないか？」

少女はオルガンの拍に合わせてながら答える。

「見たことないかなあ」

「何も言わずに去ることないのにな」

「人との出会いは一期一会。出会いがあれば別れもあるわ。別れもあれば再会もあるってことね」

少女の隣に立ち、リリカの弾いていた旋律を思い出すかのようにゆっくりと、丁寧に、記憶の眠る彼女の運指を追いかけるかのように弾く。

彼女の音のように絹の如し柔らかさではなかったけれども、教会の背後にそびえる禿山のように奇妙なものではなく、地中海の深い青が朝焼けを受け、光り輝いているように広大な音色だった。

サルヴァトーレはそれ以上は弾けなかったが演奏は止まらず、少女が流れるように続きを引き受けた。少女の横顔は、リリカの楽しそうな横顔によく似ている。

オルガンの上で踊る指は、待ちに待ったように激しさを増す。朝を思わせた静かな旋律は段々と激しさを増し、鳥や猿や牛や驢馬などの動物達を目覚めさせ、人間達も起き始め、宴のような騒がしい真昼が出来る。

しかし、彼女の指も、リリカがそうであったように途中で止まった。

「……姉か」

「そうよ。皆、会えそうで会えない」

「リリカに会ったら、伝えておく」

「お願いね。えっと……」

「ジュリアーノだ。これからシチリアを駆け巡るから会えるさ」

「凄いわね、メルランよ。でも、無理はしちゃ駄目よ？」

「無理はしないさ。でもよ、俺達の夢が後少しで叶うんだ」

「夢？」

「音楽のように何にも縛らず、虐げられずに生きられる時が来るんだ」

サルヴァトーレにとって、独立運動は他の島民達とは全く違った色を持っている。

罪が許されるために罪を重ねる矛盾があったが、これまでの罪とこれからの罪は全然重みが違う。独立の名の元に行う全てのことは、独立のために全てが許される。大義のために戦うことがこれほどまでに心が踊るとは思わなかった。

サルヴァトーレはこの時だけは、戦士として生きるこの瞬間だけは、『名誉ある男』だと自負できた。劣悪な環境で生きる農民達を解放する一人の男として生きることが、全身を躍

動させる。

少女は何かを探すように適当な音を鳴らす。

「思い出せたら弾いてあげるわ」

サルヴァトーレは頷くだけで何とも言わなかった。

冬になり、サルヴァトーレ達は遂に動き出した。月の明かりだけを頼りに、部隊は警察宿舎に飛びかかる。火を放ち、少量の武器や弾薬を奪うと山の四方八方へ逃げる。追ってくる警察を待ち伏せした部隊が仕留める。そんなことを警察相手に何度か繰り返し、武器を増やした。義勇軍の戦いであると証明するように旗を立て、サルヴァトーレは己の名で、シチリア独立万歳、と書き残した。

軍と戦うことになれば、痛手を負うことは分かりきっている。昨年、パレルモで繰り広げられたデモに軍が発砲した事件は、記憶に新しい。

それでも、襲撃を繰り返すと軍との衝突は避けられず、時には銃撃戦を繰り広げることもあった。軍の石油貯蔵所などを襲ったり、トラックを奪ったりした。政府は、パン一斤が三

リラの時代に、サルヴァトーレの首に八十万リラの賞金を懸けるに至った。

サルヴァトーレの義勇軍は、警察や軍だけではなく、刑務所も襲った。受刑者の中の見知った顔を逃し、シチリア独立のために戦ってほしいと義勇軍に取り込んだ。独立した暁には、普通のシチリア島民として生きられるように。

サルヴァトーレはいつの間にか故郷のモンテプレで農民達から尊敬の眼差しを向けられていることに気付いた。外に出ると、サルヴァトーレ、と声をかける。

それが誇らしく思える一方で、恥ずかしく笑い、名声から逃げるように誰も居ないひっそりとした教会に身を寄せる。すると、オルガンの影からそっと見慣れた白い顔が出てくる。

彼女の顔は姉と出会えたのか一層光り輝いていた。サルヴァトーレも己のこのように嬉しかった。

「おめでとう」

「ありがとう、サルヴァトーレも？」

「……何が？」

「なんだか嬉しそう」

「そうか？」

「うん」

リリカはいつものようにオルガンの前に座り、サルヴァトーレも彼女の側に立つと、リリカは小さく腰を動かして、半分だけ椅子を空けた。

「ピアノが教えてくれるわ」

「本当か？」

「試してみればいいじゃない」

笑顔で訝しむサルヴァトーレに、リリカも笑顔で応じる。

高く澄んだ二人の音色は、青く輝く空に響き渡る。この音楽がまだ会えない者に届けばいいと互いが思っているのが、時々微かに鍵盤に残る熱さから十分に分かった。

サルヴァトーレもリリカも全然互いのことを知らなかったが、二人の音楽はこの時、示し合わせたかのように全く同じであった。

彼女と共に姉達を待つのならばそれで良かったが、今のサルヴァトーレならば、独立義勇軍の大佐であるサルヴァトーレならば、リリカが許すのならば彼女の手を取り、シチリアを駆け巡ることが許されるような気がした。

その夜、ある男と会っていた。厚い胸板を折り目の正しいスーツで隠す、髭面の、義勇軍参加を要請したあの男である。

男の話聞いたサルヴァトーレは全然納得ができず、こう訊き返した。

「……どうということだ？」

独立運動の指導者であるフィンツキアーノ・アプリーレが逮捕されたのである。彼は反ファシズムであり、共産主義との連合を拒み、大土地所有者、国会議員などの中道派を独立運動賛成に巻き込んだ凄腕の政治家である。

サルヴァトーレはただちに、マフィアの臭いを嗅ぎ取った。独立運動の裏で、何か別のことが蠢いていることに勘付いたアプリーレを、マフィアに処されるより早く警察が逮捕した。

が、警察が、マフィアの意向を無視できるとは思えない。この一件には他の事情も重なっているのだろうか。

男は重い口を開いた。

「私も詳しいことは分からないが、政府はいよいよこの運動に終止符を打つ気なのだろう」男は続けて、イタリア本土のことを話してくれた。憲法制定議会選挙で共和制になることを恐れた王政擁護派が動いている、と。

サルヴァトーレには政治のことが分からず、男の話すことがどれほど独立運動に関係しているのか何一つ分からなかった。

しかし、独立運動の動きが政治運動から武装闘争に変わったように、もう一つ変わろうとしている気配だけは分かった。けれども、どのような形に変わるのか見通す頭は有していなかった。

※

イタリアが新しい時代を迎えるべく、一九四六年三月一六日、国王代行命令第九八号により、制憲議会選挙と同時に君主制か共和制かを問う政体問題の国民投票が行うことが決定された。

シチリアの独立は法律に則った形で解決され、独立主義者も法の中でその活動を展開することとなり、独立主義者達の恩赦をイタリア政府は約束した。

イタリア政府の約束に、サルヴァトーレ・ジュリアーノ達の名前はなかった。山賊の名前はどこにもなかった。釈放されたアプリーレはこう言う。

「山賊達による独立運動によって、シチリアの独立は歪められた。諸君らも見ただあろう？ 燃え盛る警察宿舎を、刑務所を！ 私達は、シチリアを無政府状態に陥れた奴等を許さぬ。彼等は敵である！」

独立運動で生じた全ての厄災、武装闘争を山賊達に擦り付けることにより、彼等は純白へと返り咲いたのである。混乱したシチリアを、サルヴァトーレ達山賊という敵を作ることに

よつて、一つにまとめ上げたのである。

様々な夢を託した独立運動がその火を燃やし尽くした時、サルヴァトーレは再びただの山賊になった。

行き場を失つたサルヴァトーレは、救いを求めるかのように教会へと足を運んだ。

夜暗に紛れるように、黒い帽子を被つた少女がオルガン前に座っている。帽子の間から、月明かりを浴びて輝く金の髪が見える。

彼女の調べは海底から響いてくるように重く、苦しいものだった。サルヴァトーレ知らず知らずのうちにオルガンの側に座り込み、涙を流した。

何故、シチリアの独立は失敗に終わったのであろうか。何故、サルヴァトーレの罪は許されないのだろうか。ただ、一日でも長く生きたかっただけなのに、何故、警察に追われなければならないのだろうか。

静かなオルガンは、サルヴァトーレの怨嗟と涙を拾い上げるかのように徐々に大きくなる。サルヴァトーレは涙を拭い、少女を見上げる。少女は指を止め、笑いかけた。

「ありがとう。きみのお陰で再び出会えたよ。お礼にどう？ 私達、プリズムリバー三姉妹の演奏を」

「……ああ、良いのを頼む」

どこからともなく立派な教会にあるような濃いピアノの音が聞こえた。音は違えど、その旋律はリリカのものであった。管弦楽の高い音がサルヴァトーレを包んだ。底抜けに明るいメルランの旋律が、淋しいほど胸に広がる。そして、黒い少女のヴァイオリンの味わい深い旋律が、夜と共にモンテプレに落ちた。

彼女達の仰々しい音楽を聞きながら、どうして彼女達の夢は叶えられ、己の夢は叶えられなかったのだろうか思わざるを得なかった。

独立運動というシチリア人の夢破れ、罪の清算というサルヴァトーレ個人の夢も敗れ去った。夢から覚め、待ち受けていたのは、逃れられない冷酷な現実だった。約束を破ったのなら、それ相応の報いを受けなければならない。

あの男が、サルヴァトーレに独立運動を持ち掛けなければ、甘美な夢を見ることもなかった。

あの男だけは生かしておくわけにはいかない。あの男だけは共に地獄に付き合ってもわな
ければならない。

演奏を終えた彼女達に、サルヴァトーレは拍手を送り、別れの言葉を口にした。

「さよならだ、リリカ。今度は離れ離れになるなよ」

買ったばかりの煙草に火を灯し、教会を去った。(了)

願
い

凍て空に一条の星が駆ける。森の方へ流れ落ちた頃、湖に女波が立ったかと思えば、見慣れた顔が現れた。常闇に響いた姫の声は、眠っていた森を突としてざわつかせる。

「騎士さんは一体何を願いましたか？」

「願ひ？」

「ご存知ありませんか？ 流星に願いを込めれば、その願いが叶うって」

赤はそのような星辰信仰を信じられず、姫のように願うことができず、むしろ、どうして己の願いを星に願わなければならないのだろうかと嘲笑してしまう側だった。姫がこうして顔を出したのも、きつと星に何かを願うためだろうと思うと、今も喉のあたりに熱を覚えた。しかし、何かを願ったであろう姫の綻びた頬を見ると、そういうことを言ってしまうのが負け惜しみのように思え、自分の言いたいことも正直に伝えられなくなった。

あの一糸の星は果たして、願いを叶えるのであろうか。あの星は他の星とは違う特殊な何かを宿しているとでもいうのだろうか。あの星は、妖怪しか見上げることのないこの地で、既に明かりが落ち、身を守るように沈黙に徹している人里に住む人間達の願いを叶えず、妖

怪の願いを叶えるつもりなのだろうか。

寒々と静かな夜に起きている妖怪のどのような願いを、星は聞き届けるのであろうか。そこに、姫の声は届くのであろうか。

「姫は一体何を？」

「騎士さんが言ってくだされば、言います」

「それじゃ、聞けないわね」

「間に合いませんでしたか？」

「叶えたい願いがなかっただけよ」

姫は意外そうに赤の顔を見た後、瞬く間に、白い吐息が見えるほど近くに寄り、深い海色の瞳を向ける。濡れた髪から水が滴り、首筋を伝う。柔らかな月の光を受ける唇は、赤の本心を見抜いたのか品良く笑みを浮かべる。

星に何を願ったのか分からず、言おうとしない彼女を一時でも触れていたいと願い、そつと、濡れた頬に手を遣った。姫の白い頬に熱が帯びた。しかし、姫は何も言わず、赤の手に

自分自身の手を重ねた。

彼女の頬は冷たく、赤は身体の底が震え上がったが、手は驚くほどに温かいままだった。きつとそれは、姫の頬の底を流れる温かな血潮のせいであろう。

二人は示し合わせたかのように沈黙を守っていたが、姫は赤の手を離し、陸へ飛び上がるうとする。姫の視線の先には、真つ暗な森へ落ちんとする星があった。湖がうねり、赤は為す術もなく押し倒された。蘆の香りが、鼻先をかすめた。

姫はずっと遠くに流れたであろう星を追いかけるようにどこかを見ている。声をかけても、赤のことなど眼中にないようだった。

その態度に、熱いものが込み上がってくるのを覚えた。濡れたことに対する怒りではなく、押し倒されたことに対する怒りでもなく、無視されたことでもなく、姫との間に生じたことではなく、あ的一条の流星に、はつきりとした不快感を覚えたのだ。

何故、姫は流星に執着するのであるか。何故、流星は、姫の願いを叶えないのであろうか。何故、流星は姫の願いを聞け、己は聞けないのであろうか。もし、己に姫のような願い

があれば、姫に伝えられれば、姫も教えてくれるのだろうか。

そう考えたところで、願いが生じるわけではなかった。姫の願いを聞くことが、赤の願いといえないこともないのだが、そんなことを伝えたところで、姫の紅潮を誘うだけだ。

姫は星に興味を失ったのか、赤を見下ろしていた。陰の濃くなった姫の瞳は、赤の胸底にあつた嫉妬を浮かび上がらせた。

「姫の叶えたいことって何？」

寂しげに潤む彼女の目を見ると、次、いつ流れてくるか分からない星に頼らざるを得ない姫を見ると、己の無力を痛感してしまう。己は姫にとつて、ただ一人の友でしかないのだろうか。騎士と呼ばれる己は、姫の願いすら満足に叶えられず、騎士と呼ばれる方がいいのだろうか。

「誰かに言ったら、叶わなくなってしまうんです。だから、言えません」

「星に願いはできた？」

「内緒です」

それ以上話しても、何も得られないと悟り、姫を抱きかかえた。思ったよりも軽かった姫

は、赤の腕の中で当惑した様子を見せ、尾が隠しきれない困惑を示すかのように、赤の腕や胸を叩く。

「騎士さん、あの、大丈夫ですよ？」

「どうせ一人じゃ帰れないでしょ？」

「時間はかかりますが、大丈夫ですよ？」

「危ないから駄目よ」

靴が湖に浸かり、身を切るように冷たい湖水が素足を濡らしたが、赤は気にかける素振りを見せず、姫を元の所へ帰した

「冬は良いですね」

姫は愛らしく、まだ冷めない赤の温もりを確かめるかのように、頬に手を遣る。湖から出た赤は、姫の言葉を反芻させるが、姫のような良さは見付けられなかった。

「……良いかしら？」

「ええ、良いです。お嫌いですか？」

「好きではないわ」

「夏もお嫌いですか？」

「春も夏も秋も好きではないわね」

「少し、寂しいですね」

「寂しい？」

姫の言っていることを、全然分らない。赤は幻想郷を包む四季が好きではなかったが、寂しさを覚えたことは一切ない。

何が好きで、何が嫌いで、何を願うか——そういうことを赤は考えようとしなかった。というよりも、考えられる環境にこの身を置いたことがなかったのである。

そういう人間らしい感覚をただただ冷笑する立場に立っていた己は、主君の好みに応じて変えられた己は、そういうことを考えられる姫が、寂しいという感情を懐ける姫が、同じ妖怪なのにも拘らず、そういうふう生きられる姫が、羨ましい。

不意に赤の胸に、とある願望が灯った。

「姫のようになりたいわ」

「……騎士さん？」

「姫のように星に願い、ある時を好み、寂しいという感情を懐けるように……」

「私みたいになっても、良いことなんてありませんよ。私は、この湖でしか生きられないんです。だから、こういうふうにしかな生きられないんです。ですが、騎士さんは違うじゃありませんか」

「でも、私、叶えたいことがないのよ」

「明日も会いましょう？ 明日だけじゃなく、明後日も、その次の日も……雪が溶け、花開く時になっても、うだるような暑さの時でも、楓の色が変わる時も、また雪が降るようになって、私に会いに来てくれませんか？ そうしたら、叶えたいことが出て来ます」

「本当？」

「本当です。信用、できませんか？」

「少し、怖いわ」

「怖い？」

「……どうしてからしね？」

「大丈夫です。私と一緒に大丈夫です」

姫の優しい言葉の何を信用すればいいのか分からなかったが、赤はあまりに自然と、姫と一緒にいるのならば、恐怖も和らぐに違いない、姫がいるということが赤の心に大きな安らぎを与えたのは紛れもない事実だった。

赤蛮奇として、姫の隣に存在することが許されたようで、今までとは全く違う己になれたような気がした。

姫は急に恥ずかしくなったのか水面に顔を隠し、対岸へと泳ぐ。

追いかけてようとしたりと時、湖へ星が流れる。赤は片膝を付き、両手を組み、再び姫と会えることを願った。かつて誰かに聞いたように、胸の内で三度唱え、天象を司る神に届くように祈る。

91 願い
星に願うと、それまでいっていた嫉妬や不快感は赤の心から消え去る。赤の心に残って

いたのは、再び姫と出会えた時、何を話そうか、という小さな幸福だけであった。そんな赤の姿を見ていたのか、姫の笑い声が湖の向こう側から響いてきた。

「一体何を願いましたか？」

「秘密。姫が教えてくれるなら、言っただけでもいいわ」

「それじゃ、聞けませんね」

「そう？ 残念ね」

「騎士さん、私、ここで待ってます。その時にでも教えてください」

「誰かに言うとはわなくなるんじゃないかなかったの？」

姫の頬が微かに膨らんだ。

「……意地悪です」

赤はなんだか、そういう姫を見ることが嬉しくなって、彼女の心情を逆撫でしないように笑う。

姫の歌は、互いの胸の内が融け合い、一つになったように幸福に彩られていた。

※

翌日の晴れた真昼、赤は、とある人間の宅に呼ばれた。稗田や霧雨ほどではないが、その人間も里ではそれなりの人間と見え、門前に守衛を置き、赤を案内する男も前後に二人おり、それぞれ大小の刀を腰に下げている。隣の部屋には腕の立つ者を控えさせいるのか、障子越しから蛇のような視線を感じる。

妖怪である赤にとってしてみれば、これほどの人間達に囲まれたところで何ともない。背後の男の首を落とす、そのまま前の男の胸を突けば済む。騒ぎに気付いて隣の部屋が来たところで、たかが人間一人である。

しかし、主人が、赤を対峙させるためだけに男を控えさせているとは考えにくい。つまり、隣の部屋の人間は、赤に存在を認めさせるために控えているだけなのかもしれない。

客間には、背中の丸まった、顔中皺だらけの老爺が座っていた。老爺はまだ眠りの中にい

るのか船を漕いでいるかのようには首を前後に動かしている。袖から垂れた指はやつれ、人間の腕力でも容易くおれてしまうことだろう。

赤が客間に入った時、丁度冷たい風が吹き、老爺の頬をそよいだ。昏い目が宙をさまよひ、赤を見つけた時、嗚れ声を上がった。

「赤」

「ここに居ります」

「……そこか」

「話、とは？」

赤は老爺の前に腰を据え、すぐに本題へ移ろうとした。

話を切り上げ、姫へ会いに行きたかった。人里で暮らす赤が、昼間に湖に近付くことは容易ではない。もし、人間に見つかってしまえば、会いにくくなってしまふ。ゆえに、二人は言葉にしなかったが、自然と夜にしか顔を会わせない日が多くなった。が、昨夜のことがあり、姫にすぐにでも会いたい。彼女の願いを聞きたい。

「そう急くな。しばし、付き合え。話があると伝えたはずだが？」

「この後も予定がありますので」

「藤原曰く、今日は警護の依頼も何もないと聞いている」

「彼女は彼女、私には私の都合があります。それで、話とは？」

「のう、赤よ、儂は幾つになる？」

「卒寿では？」

「儂はまだ、三十路のような、四十路のような、まだ十二分に活力があつた時分に襲われることがある」

「ゆっくりお休みになってください」

「最近、深く寝れないことが多い。目覚めても、まだ月が高く、遠くから妖怪の歌が聞こえてくる。もう一度寝ようとしても寝られず、床に就きながら、その歌声に耳を傾ける……儂を呼ぶかのように遠くから響いてくる、あの高い声を。その歌声をもっと近くで聞きたいという思うのじゃが、儂の足にはどうも力が入らないことがある。十年前、二十年前では起こ

り得なかったことだ」

「心身を酷使しているのでしょう、少し暇をとつてもいいのではないのでしょうか」

「赤、××家の三男坊が妖怪に襲われて死んだと聞かされていないか？ まだ十に満たない子だ……」

「いつでしょうか？」

「昨夜、帰りが遅く、搜索の依頼を出した。発見した時には、妖怪に喰われていたとのことだ」

「私は何をしていたのか、と？」

「そんなことは責めん。お主にもお主の都合があるのだろうか？」

「でしたら、何を？」

「儂等は妖怪に怯えながらも、生き、……生き続けている。先月は風邪をこじらせ、食欲を失い、老体は更に肉を失い、療養のために伏しているのだが、このまま目覚めず、微睡みの果てに、この身も朽ちるのではないだろうかと思った」

「お身体が優れないのでしたら……」

「今も自分自身が無事なのか無事ではないのか分からぬ。ただ、こうして問答しているということは、無事なのかもしれぬ」

「それなら良かったです。話は報告だけですか？」

「赤よ、僕はこのまま生き続けるのも苦しい。しかしだからといって、死にたいわけではない。隣の部屋に控えていた男の袖が擦れた。が、畳の軋む音は聞こえない。腰に挿している刀に手を添え、抜くか抜かまいか逡巡しているのだろうか。」

老爺もまた、言葉を選んでいるのか口を閉ざしている。不可解な沈黙は、まるで何かの合図のようだった。赤はこの間に、首を落とす手伝いでもすれば良いのだろうか。しかしそれは、部外者が独断で行っていいことではない。

介錯人に一声かけようとした時、老爺はようやく口を開けた。不揃いな、残数の少なくなつた歯が鈍く光る。目を輝きを取り戻し、本人が言っていたようなかつての瑞々しい光が、瞳の内に蘇っていた。

「こういう噂を聞いたことがあるか？ 曰く、人魚の肉を食せば、不死になれる、と」

赤は瞬時に老爺の首を掻き切ろうとした時、隣の部屋の存在を思い出した。何故、まだ動かない、この男は一体何のために控えているのか。主人が命の危機に晒されるといふのに、一体何を考えているのだろうか。障子越しに主人が殺されるのを傍観する気なのか。ならば、隣の部屋に居る男は老爺の付き人なのであろうか。

廊下へと繋がる障子には人の気配が二つある。時折、何かを伝えるに来るのか三つになったり、四つになったりする。その度、刀に吊るしたのであろう鈴の音が、客間に響いた。

老爺の首を掻き切り、出口を塞ぐ男達の胸に穴を空けたとすれば、隣の男の首に手をかけるまで僅かな時間を要する。

その間に、男を逃がしてしまえば、名家の主人を殺めてしまった事実は瞬く間に狭い人里に広がってしまい、赤は人里を離れざるを得ない。人里で暮らす赤としては避けなければならぬ。

ここで老爺が殺せないとすれば、その依頼を引き受けなければならぬ。名家の主人から

の直々な願いとなれば、人里に身を潜める以上、簡単には断れない。もし断れば、成功率を考慮し、妹紅に依頼される可能性が極めて高いが、姫と対峙するとなれば湖であるため、妹紅が引き受けるとは考えにくい。

博麗の巫女という妖怪退治の専門家がいますが、あの少女の元にまで話が行くとは思えない。老爺の欲するものは妖怪退治ではなく、人魚の肉なのである。博麗の巫女はスペルカードルーラーという特殊なルーラー下では大いなる力を発揮するが、もともと原始的な命のやり取りにおいて、どれほどの力を発揮できるのかは分からない。しかしそれでも、博麗の巫女は外せないだろう。

「そういうことは、博麗の巫女に頼むことではありませんか？」

「お主は人魚がどういう存在なのか知らぬのか？」

老爺に問われなくとも、赤は彼女のことを知っている。歌を好み、月夜になると神経が昂ぶり、激しい調子で歌うことを。湖の底から眺める空が不気味で怖いと涙した彼女を。些細なことでも頬を膨らませる彼女の何度も見た、機嫌を損ねる彼女のために人里であったことを

話すと目を輝かせ、尾を犬のように大きく振ることを知っている。

赤は膝の上に重ねた手を震えるほど強い握り、迸りそうな感情を噛み砕き、飲み込む。

「よく、……よく知っています」

「ならば、分かるであろう？」

「私ならば、そのようなことを任せても平気、と？」

「本来ならば、この件は藤原に依頼することだったのだが、彼女が断つてな。曰く、己の力量では人魚を仕留めるのは難しい、とのことだ。代わりに尋ねた時、お主の名前が挙がった。赤ならば、上手くやってくれるでしょう、とお墨付きで」

それは妹紅なりの気遣いであり、本音は全然違うところにある。不老不死である妹紅が、老爺の蛮行に賛同するはずがない。彼女は誰よりも不老不死について知っている。一時の感情に身を任せ、不老不死になればどうなってしまうのか、彼女は知っている。

この老人はここで息の根を止めなければ、必ずや別の手段に打って出る。己がただ生きるためだけに他の生を奪う。妹紅の耳に入り、赤の元に巡ってきたということは、ここで老爺

の息の根を止めろということなのに違いない。そうに決まっている。

赤は表情を引き締め、計画を練り始めた。

「その件、引き受けてます。ですが、幾つかお願いしてもよろしいでしょうか？」

「言うてみる」

「人魚は妖怪の一種であり、昼間は水底で生きております、そこを仕留めるのは、いくら名手であれ、至難の業かと思われれます。ですので、決行は夜。貴殿も同行してほしいのです」
結果を待ただけだと思っていた老爺は驚いたように声を上げる。

「人魚との戦いで、どのようなことが起こるのか分かりません。仮に人魚の血肉を手に入れたところで、人里に戻ってくるころに力尽きる可能性がないと断言できないわけです。折角手に入れた人魚の血肉が、妖怪に食べられてもいいのでしたら、ここで待っていただけでも構いません」

「……お主がそこまで言うのならば、儂も出向こう」

「ありがとうございます。必ず、護衛の者をお願いします。ご老体ですので、馬車を引かせ

てもいいかと」

「貴様は姫のことに集中しろ。細々とした部分は、藤原と話す」

「お心遣い、ありがとうございます」

「話は以上だ」

※

姫と会う前に、老爺との会合で溜まり溜まった感情や震えを吐き出し、まだ何事も知らなかった赤に戻ろうとしたのだが、吐いても吐いても、全然戻れない。口の中が酸味で一杯になっても、最悪な想像は止まらない。

姫を胸を突く己の姿が浮かぶ。手の震えが、息遣いが、何かを伝えようと必死に唇を動かすも言葉にならない姫の姿が、頬を伝う熱い涙が思い描かれる。惨劇が起こる前に、老爺達を殺すつもりなのにも拘らず、両の手にあるはずのない感覚がこびりついている。

姫にそのことを伝えるか伝ええないべきなのか悩んでいると、いつの間にか月が高いところに昇っており、答えのない問答を繰り返した赤は顔を顰め、頭を冷やすように外へ出た。

茹でたように熱くなった頭が冷やされるようで心地良く、歩みは次第に軽やかになり、なかつたはずの目的地が決まり、足取りは軽くなる。

人里を抜け、森の中に入ると奥から微かながら柔らかない歌声が聞こえてくる。森が開けると、湖に浮かび、月の明かりを全身に浴びる姫の姿があつた。赤が草の根を踏む音に、姫の身体は大きく跳ねる。

姫は赤が来るまでの間、こうして月に歌い上げていたのだろう。流れ星が見えるように水面まで出て来て、一体何を願ったのだろうか。

姫と赤はしばらく無言で見つめ合った。見られてはいけなるところを見られてしまったよな、見てはいけなるところを見てしまったよな——互いの羞恥は、ようやく会えた二人から悲しいほどに言葉を奪った。二人は無言のまま、近寄る。

人魚である姫は陸へ上がることはできず、二本の足がある赤は湖へ入ることはできず、二

人の境界が広がっていたが、赤はその境界を破るかのように手を伸ばし、姫の細い顎に手を遣る。

何があつたのか伝えたかつたが、どれも整理がつかず、言葉にできない。しかし、もし本当に老爺の思い通りなことが起きてしまえば、未遂で終わらせることが確定しているのに、焦燥や不安が生み出した妄想は留まることを知らないようだった。

赤は姫の肌を刃を突き立てるような真似はしないが、いつまでも動かないとなれば、老爺は静かに別の手段を採ることだろう。遅くなってしまうえば、赤ではない何者かが姫を討つことは有り得てしまうことだった。

赤が殺すか、赤ではない何者かが殺すか。事は、赤の気付かない間にそんなところまで発展していた。

赤は急速に再び不安になり、指先が震えていることに気付いた。見上げる姫は何も言わず、手を包む。

赤は今しかないこの時を、永遠に忘れられない時にしたかった。姫の唇に、震える唇を重

ねた。触れるだけの柔らかい接吻。姫は何かを訴えるように、潤んだ瞳を向ける。赤い頬、細い喉の内に幾つもの言葉があるのか、姫は喉のあたりに手を遣り、眉を微かに顰めた。

姫の仕草に、赤は胸に嫌な痛みが走った。赤が姫に言えないことがあるように、姫もまた何か言えないことがあるのではないだろうか。赤の杞憂で終わってほしいことだったが、姫の曇った顔から、そう遠く未来に何か起こる予感を覚える。

姫は取り繕うように微笑み、ようやく声を上げた。

「何かありましたか？」

声は掠れ、とてもだが、あの華やかな声から程遠いものだった。姫自身も声の違いに気付いたのか恥じ入る。

「心配しないでください、歌い過ぎただけですから。それより騎士さん、大丈夫ですか？」

「私？」

「はい、何だか今夜、変です」

姫は微かに熱の残る唇に手を遣る。赤はこの時になってようやく、己の行動の衝撃に気付

き、全身に熱が広がり、嫌な汗が背中を伝う。

もう隠し通せないため、昼の出来事を全て話した。けれども、そのことに赤が関わっていること、姫を討ち取るように依頼されたことまでは告白できなかった。

「近い内に、ここに人間が来る。その時、どうか、水底にいて」

姫の瞳に暗い波がさざめく。

「……何があるんですか？」

「全部、全部終わった時に話すから」

「どうして、騎士さんはそんなことを知っているんですか？」

「人里で聞いたのよ」

「騎士さんは、その時、その、人間が来た時、どうするんですか？」

姫にだけは嘘をつきたくなかった。彼女を傷付けないために嘘をつけるほど器用ではなく、賢くない。そういう頭脳を持っていれば彼女のことを思っ、嘘の一つでもつくべきなのであろう。今、この瞬間の彼女の不安を拭うように。

しかし、赤の頭を占めているのは、そんな今のことではなかった。もっと先、姫が人間の来る未来を不安がるように、赤もまたその未来に不安を覚えている。この不安は姫の胸にある不安とは全然違う不安であり、恐怖と呼んでも過言ではない。

もしその時が来たら、赤は本当に姫に刃を向けてしまうのだろうか。そうなる前に事を終わらせる気であるが、老爺達の目的が姫である以上、姫の肌に傷ができる可能性は高い。

夜の幻想郷を人間が動く以上、護衛の数はそれ相応の数になると考えた方が良いだろう。その全てを殲滅し、姫まで護衛することが可能だろうか。

「騎士さん」

姫のかすれた声を聞き、彼女の目から雫が零れ、頬を伝い、赤の手の甲を濡らした。

「私が狙われるんでしょう？」

人魚である姫の側に人間が来る理由など一つしかない。そのことを、姫自身が気付けないわけではない。

赤は全ての憶測を振り切るように首を振り、真摯に姫を見つめる。己は何のために、姫の

側にいるのであろうか。姫と約束したのである。いかなる時も彼女の側にいる、と。ならば、たとえ、老爺の命令であろうと、赤の採る行動は一つしかない。

「大丈夫、私が守るわ。約束したじゃない。一緒に居るんでしょ？」

「ですが、それでは騎士さんが……」

「姫」

「何でしょうか？」

「私と一緒に大丈夫よ」

赤の胸には、叶えたい願いが全くなかったあの時とは考えられないような願いがあった。姫が拵え、赤が願ったものではなく、赤の胸の内から溢れてくる自然な願い。

「姫を守る。それが、私の願い」

赤は恭しく頭を下げ、姫の手の甲を取り、忠誠を誓った。

※

「方が一のことがありますので、こちらへ」

「真ん中？」

「妖怪は飛び道具を使うことができますので、端は危険です」

六人掛けの箱馬車の中は、老爺を守るように赤が手前の扉の方に、妹紅が奥の方に座り、三人の前の老爺の選んだ三人の遣いが座る。

「しかし、こうも見えぬとは……」

「身を守るためには仕方ないことです」

老爺の持つ馬車には頭上を覆う帆がなかったため、急いで河童に瘴気を防げるような帆を用意させた。

老爺達にこのような準備をするのは哀れだったが、森の妖怪に殺されてしまえば、人間が妖怪に襲われてしまったただけだ。それだけは、再び老爺のような人間を生み出してしまおう。

己のために、姫の命を狙う者が出てくるだろう。老爺達には、姫を狙ってしまったがゆえに死んでもらわなければならぬ。

老爺達だけは、赤自身の手で殺めなければならぬ。

赤達を乗せた馬車は、人間達が動いていることを悟られないように松明を用いず、月明かりだけを頼りに出発した。

澄んだ月の光は、細い光を散らすばかりで一丈先も見えず、馬車は迷わないように足元を確かめるようゆっくりと進む。不審そうに帆や車内を見渡していた左右の遣い達は馬車が不規則に揺れる度に、揃って腰にぶら下げた刀に手を遣る。そんなことが起こると真ん中に座る遣いの者は決まって、一言二言零すのであった。

六人の間に会話らしい会話はなく、闇に潜まっている妖怪や動物の唸り声や鳴き声や小さくなる人里の喧騒が寂しく響いてくる。

果たして、老爺は何を考えているのだろうか。見果てぬ夢に一体、何を託すのであろうか。赤は変わり映えのしない景色に飽きたように声をかける。

「人魚の肉を食らって、どうする気なんです？」

「何もする気はない」

「……ならば、何故？」

「お主は儂の話聞いておらぬのか？ これ以上齢を重ねるのも辛い。しかし、だからといって死ぬのも恐ろしい。苦しいのも痛いのも好まぬ」

「だから、人魚を？」

「生きるために討つ。古来より変わらぬことであろう？」

「不老不死になって、後悔はしませんか？」

「藤原？」

「決めてください。人間として死ぬか、不老不死の化け物として生きるか」

「旦那様、着きました」

「赤、頼むぞ」

連日の歌声もなく、北風が草木を揺らす。雲が流れたのか、水面には暗い影が落ちている

だけだった。目を凝らしてみても、姫がどこにいるのか見えない。

赤は諦めたように馬車へ戻る。

「人魚の姿はありません」

「湖にいたのではないのか？」

「逃げられたようです」

「人魚は儂等とは違い、腰から下は魚だ。逃げられるはずがなからう。しかと探せ」

「一人では難しいです」

老爺は石像のように動かない遣いの者達を見て、顔を顰める。

「何をぼさつとしている貴様等も動かんか」

「しかし、主をおいておくわけにはいきません」

「儂の側には藤原がおる。安心しろ」

「何人かで探した方が早く終るわ。私がいるから大丈夫よ」

赤を先頭に遣いの者達と一緒に、湖の中にいるはずであろう人魚を探す。遣いの者は絶え

ず柄に手を遣り、三人は片時も離れようしない。

「おい、そう固まるな。離れる、敵は湖だ。囲むように散れ」

「頭、ですが……」

「四人いる。臆することはない」

「妖怪ですよ？ 人間じゃないんです」

「赤も言っていただろう？ 妖怪は飛び道具を用いることもある。離れる」

「どうして俺達がこんなことを……」

「気持ち分かる。だが、任命されてしまったのだから仕方あるまい」

「頭は平気なんですか？」

「怖いさ。しかしだからといって、ここで逃げて、主を死なすわけにはいかない」

馬車の内から赤達の姿は見えない今、彼等を殺すには絶好の機会であろう。

一人を殺した時、残った二人がどのような行動に出るかは分からない。赤に刃を向けるだろうか、老爺の安全を確保するために馬車を走らせるだろうか。どちらであれ、老爺の側に

妹紅がいる以上、老爺が外に出てくることはない。組み敷いてでも、安全を優先し、老爺が外に出ることを防ぐだろう。

赤は膝を折り、水底を覗き込むように顔を近付ける。その時、赤の首が草原の上に落ちた。短い悲鳴が上がる。赤は残った胴体を操り、力任せに最も近く男の顔を掴み森へ放り投げた。草を踏む音と同時に、男の鋭い声が飛ぶ。

「下がれ！」

腰を抜かし尻もちをついた男の首を切り落とした。首元から、一本の刀が飛び出すのはほとんど同時だった。赤が後半歩でも踏み込んでいたら、男が後半歩下がっていれば、赤の胸に刃が貫いていたことだろう。

冷や汗を拭い下がると、馬車を背に、澹然と構え直す男の姿がある。赤は首を回収し、湖を背に立つ。男は荒い息と共に言葉を吐いた。

「……お前は何だ？」

「赤蛮奇よ。あなたは？」

「化け物相手に名乗る名前はない」

「あなたも一緒じゃない。仲間が使えないと即座に判断して、普通、する？」

「生きるためだ」

「思ったより冷酷なのね」

「好きに言えばいい」

男は、赤の奥を見た。

「そこに人魚がいるんだな？」

「どうしてそう思うのかしら？」

「俺を狙わず、距離をとった。二人をすぐに殺せる腕を有しているのならば、わざわざ下がる必要はあるまい」

「一人は虚をついた、一人は戦意を喪失していた。簡単だった。でも、あなたは違う」

「買い被るのはよしてくれ」

「事実よ」

「俺はもう生かされているだけだ」

「その通り。ねえ、殺す前に教えてくれない？」

「湖を背にする道理がない。俺達の狙いは人魚姫だ。湖に住んでいると分かっているのならば、余計と分からない。なあ、赤、妖怪は飛び道具を使うらしいな？」

「そうね」

「何故、お前が知っているんだ？」

男はそう問うた後、赤と己との距離を見て、息を整え、構えた。

「いや、答えなくていい。その代わりに、一つだけ確認させてくれ」

「よしみで聞いてあげる」

「主人の首も刎ねるか？」

「当然よ。姫を狙う人間は殺す」

男が一步踏み込み、駆けようとした刹那、赤の指先から玉が弾け、幾条もの矢のように男の身体を貫く。男は赤に近付けないと判断するな否や、湖に目掛け、刀を投げる。が、刀は

幕のように広がった弾に飲み込まれる。

赤の放った弾は勢いそのまま馬と引き手を切り裂き、ドアを突き破る。馬車から老爺が這うように出て来た。惨状に戦き、その顔が恐怖に凍ったのはすぐだった。事切れた遣いを見て、か細い声を上げる。

「……何をしている？ お主の役目はそうじゃないだろう？ 赤？ ……赤？」
「報いよ」

老爺はようやく事を理解したのか、縋るように馬車の中の妹紅を呼ぶ。鶏の足のように細い喉が何度も跳ねる。

「嫌、嫌じゃ、死にたくない……儂はまだ、儂は……赤！ 何が欲しい？ 儂にできるものならば何でも用意しよう。な、赤？ 金か？ 地位か？ 名誉か？」

虫のように草原を這いずる老爺を見下ろし、赤は老爺の首を刎ねた。

全てを終えた赤は、湖に戻り、全てを見ていた姫に声をかける。水底から出てきた姫は、何かを求めるように震えた指を赤へと伸ばす。赤は優しく包み込むように彼女を抱き寄せた。

「怖かった？ もう大丈夫だから。ごめんなさいね」

姫は赤の耳元に顔を寄せ、囁く。赤は姫が何を言っているのか分からず、問い返そうとした。しかし、彼女の口から再びそのようなことを聞くのが恐ろしくなり、何も言えなかった。赤は絶句し、真意を確かめるように姫を見ることしかできない。

暗い瞳の奥底に、どのような思いがあり、姫はそんなことを口にしたのだろう。何故、姫はそのようなことを言うのだろうか。赤が何のために来たのか、姫は知っているのにも拘らず、何故そのようなことを言うのだろうか。あの時、姫を守ると誓ったのにも拘らず、何故赤は姫から離れ、真意を尋ねるかのように再び、彼女の名前を呼ぶ。これは、姫の一時の迷いだ。そうに決まっている。

「……姫？」

しかしそうであるのならば、何故、姫の目から今にも涙が零れ落ちんとしているのだろうか。濡れた彼女の身体に震えに触れたなお、請うような言葉を聞いてなお、気の迷いと言えるのだろうか。

姫は赤の覚悟を待たず、念を押すように再度、言う。

「騎士さん、私を殺してくれませんか？ 私、騎士さんに殺されたいんです。それが、私の願いです」

「嫌、嘘よ……そんな、どうして、おかしいじゃない」

果たして姫は、いつからそのような願望を懐いたのだろうか。初めて出会った時からだろうか。あるいはまた、流星に願いを叶えようと思った時からだろうか。人間が姫を狙う。

震える手に姫の熱い血が降りかかる。懸命に言葉を紡ごうとするも声にならない姫の姿が、輪郭を失い、湖に倒れる。そんなことをするために、老爺達を殺害したのではない。

「あの時、言ったじゃない。これからも一緒だって」

「怖いんです」

「姫を狙う人間は、私が殺すわ。だから心配しなくていいの。ずっと側にいるわ。だから、だから……」

「私達、少し変わってしまいましたね」

「私はデュラハン、あなたは姫。何も変わってないのよ、何一つ変わってないじゃない」
赤と姫の間にはただの知り合い以上の感情がある。男と老爺の関係のような主従関係が二人の間には存在していた。姫はそれが気に入らないのだろうか。

ならば、赤はまた再び、彼女の友に成り下がろう。そうすることによって彼女が生きられるのであれば、赤は甘んじてその役目を承ろう。しかし、それらのことは、今、姫に刃を向けなければという不確定な未来の先に存在している関係であった。

姫は赤を鼓舞するように、とある旋律を歌う。高音に差し掛かった時、姫の声が掠れた。無理に声を出そうとして、出なかつたように。

「今は少しだけですが、きっと近いうちに失います」

張り裂けそう赤の心は、氣遣うように微笑する姫にかける言葉を見付けられなかった。内から溢れる疑問が知らず知らずの間に言葉になっていたらしい。

「分かりません。だから、何度も何度も星に願いました。そのお陰でしょうか、まだこうして話せます」

「言ったら……」

「だって、騎士さんのお願い、聞いてしまいましたから」

「そんな約束、破ればよかつたじゃない！ 私なんかのために、そんな、そんなこと！」

赤の悲鳴が森を揺さぶる。眠っていた鳥が慌てたように翼をはためかせ、幾つかの影が星々を隠すように飛び立つ。

「声を失ったら、好きな歌も歌えません。騎士さんに愛しているも言えません。そんな私は私じゃありません。ですから、騎士さん、私を愛しているのですしたら、殺してください」

その言葉の他に、赤に伝える言葉がないのか姫は口を閉ざした。

赤は姫を失いたくなかつた。己が騎士であり、姫が姫であるからという種族としての理由ではなく、姫が言ったように赤もまた彼女を愛しているからこそ、失いたくはなかつた。

しかし、赤は騎士である。姫を守ると誓った騎士である。己の愛のために姫を生かすのか、姫の願いを聞き入れられるのか。

赤自身のために、姫を生かすことはできる。声を失ったとしても伝える方法は沢山あるだ

ろう。その方法を見付けるために二人で生きてもいい。が、姫には地上で生きる足を持っていない。

声を失い、伝えるべきことも伝えられず、湖に生きるということは、赤の想像を遙かに超える絶望が待ち受けていることだろう。己が愛しているからという理由だけで、そんな世界で生かすことが許されるのだろうか。

己はデュラハンであると名乗ったのにも拘らず。

姫の頬に流れた涙を、月光が優しく照らした。

「ありがとうございます……良かった、私だけの騎士さん」

姫の首が水底へ落ちた。〈了〉

居場所

その者が霊夢の記憶の底から這い出てきたのは、今年の夏からであった。顔ははつきりと浮かんでこず、声も聞こえず、姿形も分からない。記憶から出てきた者ということは、霊夢自身が知っている者と考えて間違いないのだが、何者なのか分からない。

その者を思い出すのは、決まって夜だった。布団に入り、短い夜が終るまで眠ろうと目を閉じた時、瞼の裏に、頭の片隅から唐突に現れる。数々の記憶の一つずつ検証して、姿形を明らかにしようと試みるも途中で力尽き、気が付くと朝を迎える。

そんなことが数日続いたある昼のことである。閉めきった部屋は蒸し暑く、障子を明け放つても風一つ吹いてこず、蝉の鳴き声だけが響いてくる。

長い階段を登って訪れる参拝客はおらず、東の最果てに居を構える霊夢の所まで飛んで来る友もない。

香霖堂で購入した扇風機を居間へ移し、障子を閉め、日陰に籠もる。横になろうとした時、向こうの部屋に麦茶を置いていたことを思い出し、芋虫のように取りに行く。汗のかいたガラスが心地良い。卓袱台へ置いた時、残っていた氷が柔らかい音を立てた。

夜の眠りを取り戻すように横になった時、嘲るような声が落ちてきた。

「暇そうね」

障子と机の間にスキマが生まれ、紫が顔を出していた。涼しそうな白い顔に蒸し暑そうな長い金髪の妖怪。白い長手袋に足首すら見えない長いスカート。畳へ上がる紫を見て、霊夢は机の上に置いてあった団扇に手を伸ばした。

「暑くない？」

「平気よ」

微笑を浮かべる紫は、どこからともなく湯呑みを引っ張り出してきた。

「それで、何かあったの？」

「いえ、何も。ただ、どうしようもなく暇そうな娘を見に來ただけよ」

「藍のサポートでもしたら？」

「藍の仕事を奪うのは失礼じゃない？」

「あなたの仕事でもあるでしょ」

「私は私の仕事があるのよ」

「嘘ばかり」

「何かあったでしょ？ 最近」

雲でも流れてきたのか、部屋全体に影が落ちてきた。紫の黒目がちの瞳にも陰が入り、暗くなる。潤み、微かに震え、涙を堪えるような瞳に、昔の紫を見出した。霊夢が今よりも幼く、紫の腰ほどの背丈しかなかった頃、こういう目をしていることが多かった。

昔の紫は、今の霊夢がそうするように縁側に腰掛け、霊夢達の帰りを待つのを常としていた。霊夢が声をかけると、紫はその瞳を隠すように微笑むのである。霊夢はその時から、紫のそういう微笑が好きになれなかった。何か隠し事をしている不審ではなく、どうしてそんな顔をしてまで霊夢の所に来るのか分からないという疑問から生じたものだった。一度、訊いたことがあるのだが、抽象的な言葉で誤魔化された。

だから、こういう目を向けられると、自然と眉間に皺が寄る。紫が何が言いたいのか理解しているのだが、正直に答えたくなかった。頬杖をつき、氷の溶けた茶を一瞥する。視線を

上げると、霊夢を心を見透かすように深い色を広げた紫の瞳がある。奥底には、未だ隠しきれなかった波が引いたり、寄つたりを繰り返していた。

「……何が？」

「何もなかったらそれでいいのよ」

「そっちは何もないの？」

突つ慥貪に尋ね返すと、紫は隣まで擦り寄り、全然関係のないことを話し始めた。藍のことや橙のことから、四季映姫との不仲に繋がり、妖夢の成長に広がり、幽々子の詩歌の技術と感覚を評したかと思えば、先代の庭師の時代まで飛んだ。霊夢はどの話にでも冷たい相槌を返していたが、あることに気付き、紫の話を堰き止めた。

「あなたは？」

「私？」

「あなたは、どこにいるの？」

風鈴が扇風機の風を受け、涼しげな音を部屋に落とす。

どの話にも、紫は登場していなかった。紫が話す以上、紫自身が見聞したものはずだが、どこにも紫の気配が見えない。何を思い、考えていたのかすら分からない。

紫の息の飲む、か細い音が、沈黙に更なる固さを加えた。いつものように微笑を携え、軽口の一つでも返してほしいと思つた霊夢の期待を裏切る音だった。

これは霊夢の巫女としての直感が、無意識の間に紫を触れてはならぬものに触れてしまつたがゆえに生じた音でもあつた。

こんな人間的な怯えを見せるのではなく、幻想郷の賢者として、大妖怪として、霊夢を掌の上で転がすとばかり思つていた。どうして、こんな反応を見せたのであろうか。

紫は霊夢の知らないことを知つている。となれば、この頭の中に己とは全然関係のない存在がいることも知つているのかもしれない。霊夢の頭に思い出す鍵があらう、紫がいるとなれば尋ねてみるしかない。そのために、紫は来たのだから。

紫の手を借りるのが好ましくなかつたが、このままだと調子を崩されるようで嫌だった。霊夢は溜息を零し、諦めたように口を開けた。伏し目がちな紫の口元に濃い笑みが浮かんだ

のを目撃した。

「最近、私の頭の中に誰かがいるのよ」

「一つずつちゃんと説明してちょうだい。いつから？」

「この夏から。急に出てきたのよ。……思い出してしまったって方が正しいかしら？」

「思い出したとなら、どこかで会ったことのあるんじゃないの？」

「私もそう思うんだけど、どうも分からないのよ。思い出せないんじゃないかって、分からないの」

「顔は分かる？」

「分からないから困ってるの。ただ、そこにいるっていうのが分かる。……そんな感覚ないかしら？」

「……憑かれている？」

「博麗の巫女よ」

霊夢は堪らず語気を荒らげた。霊夢は博麗神社の巫女である。その巫女が、自らが霊に憑

かかっているということに気付けないのは有り得ない。霊夢を悩ましているのは霊ではない、思い出せない記憶のせいなのだ。

「博麗の巫女だからじゃない？」

「何が？」

そういうことを言われるのが好きではなかった。霊夢は好きで博麗の巫女になったわけではない。魔理沙のように自らの意志で魔法使いになったわけでもない。霊夢は生まれた時から博麗の巫女という使命を背負われた少女なのである。

紫は障子へ視線を移し、その向こうの庭を見ているようだった。霊夢やこの部屋を見ながら、遠い過去を見渡しているようだった。

博麗の巫女は霊夢が初めてではない。過去に同じようなことで悩まされた巫女はいないだろうか。

「……あなた、暇よね。ちょっと手伝いなさい」

先代達に関するものは使わないであろうと判断し、庭の蔵にしまっている。蔵を開けると

柱の影が動き、埃が舞い、鼠が庭を駆けた。空気が淀んでおり、臭う。

先代がどういふ人間だったのか全く覚えていない。霊夢がまだ幼かった頃、先代の博麗の巫女がおり、この手に傷ついた手を重ねてくれたことは覚えている。温かい手であった。

先代の巫女がどういふ人間だったのか全く記憶にない。もしかすれば、記憶の中に眠る存在は、先代の巫女なの shouldn't ない。何故、この時分に突如として現れたのであろうか。考えを巡らしてみるのが、全然分からない。

蔵の手前には昨年に使った物が置いてあるため、先代に関するものは蔵の奥にしまっていることだろう。

いつまで先代が霊夢の側にいたかも覚えていない。気が付けば、霊夢が彼女の代わりに博麗の巫女を名乗っていた。先代との間に何があったのか分からない。絶えず、幻想郷を見ていた彼女ならば、何か知っているのではないだろうか。蔵の中で呼びかけるも、返事はない。蔵の中に彼女の姿はなかった。

蔵の外へ顔を出すと、紫は扇風機の前を陣取り、茶を飲んでいた。

「手伝って。あんたしか知らないんだから」

「知らない？」

「そうよ」

「どうして？」

「どうって言われても……」

覚えていないことを責め立てるような調子に、言葉に詰まった。厳しい調子が段々と崩れ、膝の上で丁寧に丸められた指が震え始めた。

部屋に上がり、目を伏せる紫に詰め寄る。

「どうして、そんな顔するの？」

膝を折り、覗き込むように紫を見た。涙で潤む瞳の向こうに、自分が映っているのをしっかりと見たが、「紫は全く霊夢を見ていなかった。紫の手に、己の手を乗せ、震えが止まるように優しく包み込む。」

「紫、私を見て」

西日を受け、頂が暑い。庭は急に静かになった。蟬が土に落ちたのだろう。

一文字に結ばれた唇が僅かに開き、こういう言葉を吐き出した。

「約束したのよ」

「誰と？」

「先代の博麗の巫女と」

「どんなことを約束したのよ」

紫は意地を張るかのように首を振り、拒んだ。紫の口から聞き出せないとなれば、紫を組み伏せたところで、告白するとは思えない。むしろ、頑なに拒むことであろう。霊夢自身か
思い出すしかない。

側を離れると、紫は小さく謝罪の言葉を口にしたが、何も答えず蔵の奥へ歩む。

蔵の物を全て確認を終えた時、日は沈み、冴えた月と星が見える時分になっていた。結局、
先代に関するものは何も見付けられなかった。汗だくの霊夢が部屋に戻った時、紫の姿はな
かった。帰ったと思ったのだが、台所の方から物音が響いてくる。顔を出すと、火の番をし

ている紫と目が合った。長い手袋は台所の端に掛けてある。冷蔵庫や棚を開けたらしく、憐れむような視線を投げられた。

「夏だから仕方ないじゃない」

夏に限った話ではなかった。一人で生活するようになった当初は万が一に備えて買い込むこともあったが、食材を駄目にしてしまうことが多かった。次第に置いておく量が少なくなり、今では一食に必要な分と少しを保存しておくようになったのである。

紫は霊夢の返答を、体調の悪さに結び付けたらしい。

「どこが悪い？」

「寝付きが悪いだけよ。あんたも知ってるでしょ」

「もうすぐできるから、横になって待っていていいわよ」

紫の言葉に甘え、座布団を枕に横になる。台所の方から漂ってくる音と香りに腹の虫を鳴らし、現と夢を行ったり来たりしていた。そうしていると、記憶の奥底にいた存在が熱を帯びて蘇ってくる。今まで形がなかったのにも拘らず、見慣れた影になる。糸のように細い金

髪の内には白い顔が浮かんできた。憂いがちな目元、口元に引かれた薄い笑み。霊夢を試すような言葉の数々も蘇ってくる。涙が零れないように堪える張りのある瞳で、霊夢を見つめているその妖怪。

その目を、今日だけで何度も見た。何故、彼女の形になったのだろうか。紫が霊夢の記憶にしているのは分かる。昨日、一昨日、一週間前、一ヶ月前、一年前……会ったことがあるため、その時の出来事が記憶になっている。しっかりと日時が思い出せる記憶の紫と、この紫は違う存在なのではないだろうかと直感が働いた。

深く考えようとすると、思い出しはならないものを思い出そうとしているか、頭痛が付き纏う。

そもそも記憶なのであろうか。頭の中に紫がいる。ゆえに、いつかの記憶であろうと判断していたが、その出来事を思い出せないとなれば、記憶ではないのかもしれない。しかし、記憶ではないとすれば、何故、紫が霊夢の内には存在しているのだろうか。霊夢の知らないところで、紫との間に何があったのであろうか……。

いつの間にか眠っていたらしく、紫に声をかけられ起こされた。寝惚け眼で周りを見ると、卓袱台には鉢に盛られた素麺があり、奥に微笑する紫が座っている。霊夢は頭痛を思い出し、堪らず顔を顰め、低い声を上げる。

「どうして私の中に、紫がいるの？」

「どういうことかしら？ 分かるように説明してちょうだい」

「お昼の時も言ったけど、その正体があんただったってこと」

「私？」

「そうよ」

「何かあったかしら？」

「私が知っているわけではないじゃない」

霊夢は紫の返答を待ち、素麺をすする。

紫が答えるかどうか分からない。いつも通り、分かりにくい答えを示すのだろうか。それとも、正直に全てを告白してくれるだろうか。紫のことだから、あやふやな言葉で、的を射

るようで全然射ないような言葉を並べることだろう。が、昼のことを思い出すと、正直に答えてくれるだろうという考えの方が強くなった。

霊夢の頭の中に紫がいるということは、紫の言っていた約束と関わっているのだろうか。もしそうであるとすれば、霊夢と紫の間で何があったのであろうか。

答えない紫を急かすように言う。短くまとめようとした言葉は勢いを手に入れ、怒りをぶつけるように言えなかつた言葉が次々と出てくる。

「これはきつと、思い出すとか思い出さないとかそういうことじゃないのよ。私の内に、あなたがいる。私……違うわね、私達に紫が付き纏っているって感じかしら？それが良いことなのか、悪いことなのか、きつと良くないことなんだけど、今更私が言えることじゃないと思う。先代や先々代が何をしたのか、何があったのか覚えてないけれど、もし何かあったら、その時に言っているはずだから。これはもう、博麗の巫女がそうであるのと同じように、そうあるべきことなのよ。……そうでしょ？」

霊夢の話の黙って聞いていた紫の頬が濡れた。指で雫を拭うが、止めどなく溢れ、両手で

顔を覆う。白い手の隙間から零れ、微かに腕を伝ったかと思えば、卓袱台へ落ちる。

あまりに突然のことに霊夢は言葉を失い、見守ることしかできなかった。彼女の背や肩に触れるには、あまりに遠いところに居る。紫へ向けて伸ばした手は、空を切り、やがて行き場を失い、霊夢の膝頭へ落ちていった。

訊きたいことは山のようにある。何故、どうしてと問うことが許されるのならば、遠慮なく問うたであろう。しかし、嗚咽を漏らす紫に、言葉を奪われた。

紫の反応を見ると、霊夢の言葉はその通りであったのだろうか。

紫は一つ一つ、記憶の縁をなぞるように答えたのは、それから少し経ってからだった。「帰る場所が欲しかったのよ……どこにも帰る場所がなかったから。だから、あなた達と約束したの。博麗の巫女になるその代わりに」

「帰る場所……？」

「少し、寂しいのよ。少しだけね。ただの観測者っていうのは、一人ぼっちだから。それでね、帰る所が……何事も気にせず、羽を伸ばせる居場所が欲しかった」

「それが、私ってこと？」

「霊夢だけじゃないの……。あなた達が人間だったから。何者にも加担しない、冷酷で、優しい人間だったからよ……」

霊夢はずるいと思った。紫はここに帰ることができる。それはきつと、遠い昔の間に取り決められた約束なのであろう。幻想的の全てを観測し、人間に付き纏う妖怪が人間の内に帰る場所を見付けられれば、霊夢達人間はどこに帰る居場所を見付ければ良いのであろうか。

博麗の巫女ゆえ、どこにも帰ることが許されず、この世界を揺蕩うことしかできないのであろうか。博麗の巫女としての霊夢は、どこに安らぎを求めれば良いのであろうか。この世界の楽園を担う者は、どこで羽を休められるのであろうか。

「ねえ、紫、私はどこに帰ればいいの？」

紫は赤い目を微笑んだ。その目に暗いものはなかった。

「私の側に帰って来たらいいじゃない、昔みたいに」

紫はそう言い、鉢に箸をつける。霊夢は一連の事を思い出し不安になった。

「ちゃんと待てるの？」

「待つわよ、待っていたじゃない」

「これは待つつて言わないのよ。ついてくるって言うのよ」

「そう？」

「そうよ」

「ごめんなさいね、そこらへんの境界が曖昧で」

「霊夢は諦めたように溜息をつき、紫と同じように鉢へ箸を伸ばした。〈了〉」

夏至

序

ある夏の夜のことであった。紅魔館の主であるレミリア・スカーレットは目覚めたばかりであったが、ドアの向こうが妙に騒々しいと思った。レミリアを起こしに来た従者である十六夜咲夜は、いつもと変わらない様子だった。レミリアは、またメイドか勝手に慌てているだけだろうと考えた。しかし、館のことを把握しておくのも主の仕事の一つであるため訊いた。

「お早いですね、おはようございます」

「何かあった？」

着替えながら、来客の予定があったかどうか思い出してみたがそんな予定はない。クロウゼットから着替えを出す咲夜は、テーブルを、とだけ答える。咲夜の言葉通り、ナイトテーブルには一通の手紙が置いてある。昼の間に来たのであろう。急であれば咲夜が返事を書い

てくれただろう。食事を摂ってから、返事を書こう。

「誰から？」

レミリアは袖を通し、化粧台の前に座る。寝癖が目立つ髪を整えようとブラシに手を伸ばしたが、ブラシはもう咲夜の手にあった。鏡の向こうに映る咲夜の口元は少し嬉しそうであった。それはきつと、レミリアが普段より早く起き、事が上手く進んでいるからであろう。

咲夜はレミリアの髪を整えながら、手紙の差出人を答える。

「霊夢です」

「え？」

「手紙の差出人は霊夢です」

「誰宛てなのかしら？」

「お嬢様です」

「私？」

「もう、来てます」

「ねえ、咲夜、どうして今言うの？」

「客間です」

「霊夢は、どうして来たの？」

「話は通しているから、と」

どうやら悠長に髪を梳き、洋服を選んだりしている余裕はないらしい。咲夜の手から半ば強引にブラシを奪い、慣れた髪形に整える。

手紙は昼に送られてきたはずだ。だということに、霊夢はもう館に来ている。紅魔館にはなく、レミリア個人にということとは急ぎの用事なのだろう。待たせるわけにもいかない。霊夢は客人として紅魔館に来ている。

館が妙に騒々しいのも納得だ。レミリアはキャップスタンドから適当に帽子を選び、無造作に被ると咲夜に命ずる。

「咲夜、霊夢は今宵、客人として来ているの。急ぎなさい。丁重に、失礼のないように」
手紙を片手に、ベッドルームを出た。レミリアの荒い靴音だけが、一層痛々しい空気を刺

激した。客間に向かう道中、レミリアは霊夢から送られてきた手紙の封を切った。中身に目を通し、急ぎで来た理由がよく分かった。霊夢がそういう手紙を書いた理由も、よく分かった。「お待たせしちやったわね」

「こっちこそ急にお邪魔してるわ」

客間にはアイステイーを飲む霊夢の姿があった。すらりとソファに座り、落ち着いているようだが、色の白い頬が微かに赤みを帯び、濃い血潮が頬のみならず耳まで広がっているのをレミリアは見逃さなかった。レミリアは霊夢の前に腰を据え、話を切り出そうとした。霊夢はレミリアの腫れぼったい目元を見て、微かに眉を寄せた。

「寝起きなのね」

「普段からこうよ」

「咲夜、お嬢様の分の紅茶はないのかしら？」

「気遣わなくて結構よ。話が終わってからいただくわ」

「そう、じゃ、どうなの？」

霊夢はレミリアの手にある手紙を一瞥した。目を通してゐるのならば、すぐに答えられるだろうということなのか。

が、レミリア個人に宛てられた手紙の返答を、咲夜が控える場で口にしたくない。レミリアは咲夜に下がるように言葉を選んだ。

「咲夜、もうすぐ、フランが起きてくるわ」

「かしこまりました」

咲夜は客間から姿を消した。霊夢は咲夜がフランドールの所に戻ったのを横目で見て、全身に蓄積されていた緊張を吐き出すように息を吐いた。レミリアはテーブルに置いてある水注から水を注ぎ、一口飲んだ。

霊夢の手紙はたった一文しか書いてなかった。

『咲夜を一晩貸してほしい』

ただそれだけだった。それがどういうことか、レミリアには分かった。分かったのだが、こうして突き付けられると困惑してしまふ。グラスを持つ霊夢の指先に汗が見えた。霊夢は

どういう気持ちでレミリアの前に居るのであるのか。知りたくはないが、気になるものがある。そして、咲夜をどうするつもりなのだろうか。

咲夜のことを決めるのはレミリアである。咲夜は従者であり、レミリアが主なのだから当然である。

レミリアは心のどこかで、霊夢の手に咲夜が渡るのを恐れている。その恐れは、咲夜が帰ってこないかもしれない、という恐れではない。

霊夢もそのことが分かっているのか、レミリアの答えを促すように低い声で言う。

「返事は？」

一晩だけで良いのか、とレミリアは霊夢に訊けなかった。もっと沢山の時間が必要なのではないだろうか。しかし一晩以上となると、レミリアが許さないと霊夢は考えたのだろう。一晩という限られた時間は、霊夢なりの譲歩ということだろう。

「今晚、貸してあげる」

「話が早くて助かるわ」

「礼は結構よ」

微笑する霊夢に、レミリアは少なからず同情した。同情しただけではなく、彼女の涙を見ていた。それでも、霊夢がそう望み、咲夜も言動には見せないが、霊夢と同じようなことを望んでいるのは分かる。ならば、主人として採る選択は一つしかなかった。

しかし咲夜が霊夢の元へ行つたところで、霊夢の望んでいる結末に至らないことを、レミアも、そして霊夢自身も分かっている。それでもなお、咲夜を求めたのは霊夢の……。レミアが霊夢のその感情をどういうものなのかを決めてはならない。レミアはただ、ここで咲夜の帰りを待つしか許されない。

客間に戻ってきた咲夜に、レミリアは言う。

「霊夢を家まで送ってあげなさい」

「霊夢を？」

咲夜は意外そうにレミアと霊夢を交互に見た。二人の間にどのような会話が交わされたのか探るかのようだった。

「客人なんだから良いじゃない」

霊夢の一言で、咲夜は納得したように笑った。咲夜の案内で客間を出て行く霊夢は、レミアの方へ向き嬉しそうに笑った。

「レミアア、ありがとう」

「いいのよ、別に」

「霊夢？」

「今、行くわ」

客間のドアは閉まった。

レミアは強がった。もし咲夜がドアを閉め、耳を傾けていなかったならば、何故そこまでするのかと訊いたことだろう。レミアは、咲夜を霊夢に預ける前に、霊夢の心の隅々まで点検して、理解しておきたかった。しかしそういうことを訊かなかつたのは、霊夢がレミアよりも幼く、レミアの質問全てに対して答えられないかもしれないためだ。

レミアは決して、咲夜と霊夢に一線を越えるなど忠告したいわけではなかつた。ただ霊

夢の心が傷付くのを見たくないだけなのだ。が、レミリアには、幼過ぎる霊夢の心が、どういふことで傷付くのか分からない。しかしそれでも、咲夜を貸せないということが霊夢の心を大いに傷付けるといふことだけは理解できた。どのような結末を迎えようと、だ。

霊夢は咲夜に向けている感情が、咲夜を振り向かせることができるかと信じているのであるか。信じていないからこそ、この時を選んだのではないか。きっと霊夢は今、その狭間で揺れている。完璧に信じているわけでもないのだが、己まで否定してしまえば、この感情すら偽りになってしまう。レミリアに直接頼んだのにも拘らず、咲夜が霊夢を見てくれない。咲夜にとって己の感情はそれほどじゃないのだろうか。

その全てを確かめるのに、一晩で足りるのだろうか。何故、咲夜なのだろうか。魔理沙でも紫でもなく、何故、咲夜を選んだのであろうか。

咲夜は帰ってくる。そう信じている。しかし、どうなるかはレミリアには分からなかった。今夜、レミリアは咲夜の主人ではない。霊夢が主人である。どうなるのかは霊夢が知っているだろう。もしかすれば、霊夢も、そして咲夜も何も知らないかもしれない。

レミリアはこの時になって、少し後悔した。しかし、朝になれば咲夜は帰ってくると思っている。この夜の間こそ霊夢が主人であるが、咲夜の主人はレミリアである。その咲夜を信じられないわけがなかった。ならば、堂々と主人として待とう。

時は夏至、夜が最も短い時分のことであった。

一

例年より少し早い初雪の報せを文の号外で知った。郵便受けには号外以外にも入っていた。博麗神社の巫女である博麗霊夢は、里の間から寒中見舞いの葉書を受け取った。足元には束になった白菜が置いてある。曰く、良いのが収穫できたので奉納とは別にお礼として、とのことだ。

一人で暮らす霊夢にとって、この量の白菜は少し多かった。どこかにお裾分けをしようと考えたが、東の最果てに住む霊夢にとってはどこも遠い。しかも、この雪だ。

暗い灰色の雲がどこまでも広がっている。雪はまだまだ降り続けるだろう。霊夢は白菜を中へしまい、納屋にしまつてある雪掻き道具一式を引つ張り出してきた。雪は容赦なく霊夢の身体に落ち、払おうとすると溶け、冷たいものになる。霊夢は縁側に道具を置き、ドタドタと足音を響かせ、炬燵に潜り込んだ。冷えた手足にじんわりと熱が広がる。湯呑みから勢い良く上がっていた湯気はもう横に揺れていた。

霊夢は炬燵と白湯で冷えた身体を温めながら、今日の予定や白菜をどうしようかということとをぼんやりと考えていた。雪が激しくなれば、雪掻きが必要になるので事前に手伝つてくれそうな人間や妖怪に声をかけておこうか。お礼はこの白菜で良いだろうか。となれば、己が思っているよりも少し多めに残しておいた方が良いだろう。魔理沙はどうせ暇だからお礼で来るだろうし、魔理沙が来るとなればアリスにも声をかけるだろうし、アリスが来るといふことは労力が増えるので霊夢は楽できるだろう。

となれば、霊夢はその間、昼食の鍋でも用意しておく二人から非難を浴びせられることもない。しかし、霊夢は一人で生活している。大人数ならば宴会で料理をするように適当に

準備をすればいいのだが、霊夢を含めて三人となると分量の加減が難しい。霊夢はあまり食事を採らない。アリスもそんなに沢山食べている記憶はない。魔理沙はなんだかんだでよく食べているのを目にする。アリスがもつと食べるならば準備も簡単になりそうなのだが、人間ではない彼女にそういうことを頼むのは酷なのかもしれない。

この微妙な加減が、霊夢は苦手だった。考えられることは考えられるのだが、ついつい最後まで考えられず途中から適当になってしまふ。今回はお礼の食料であり、お礼として提供するのだから、いつもの適当ではいけない。

霊夢はそこまで考え、それ以上考えるのが面倒になり、畳へ横になった。耳を澄ますと社の参道に雪が溶ける音が聞こえてくるようだった。竈で火にかけていた土鍋がぶくぶくと音を立てる。良い匂いが、台所の方から漂ってくる。朝食の準備の途中だったが、こうして炬燵に包まれていると何もかもが面倒になってくる。

こういう時、霊夢の代わりに食事や洗濯や掃除をしてくれる者が家にいたらどれだけ楽だろうか。霊夢はただその者に、あれをしてほしい、これをしてほしい、と言うだけで良い。

霊夢は自然と紅魔館で従者として働く十六夜咲夜の姿を思い浮かべた。

レミリアは毎日、自分の好きなように咲夜に身の回りのことをさせ、好きなように暮らしているであろう。咲夜がレミリアの身の回りのことをするとなれば、レミリアは普段から何をしているのだろうか。霊夢や咲夜のように料理をしなければ、掃除も洗濯もしない。羨ましい生活だが、何もしない時間ばかりとなると暇になってしまうのではないか。レミリアは普段から何をしているのだろうか。霊夢のようにぼんやりと物思いに耽っているのだろうか。しかし、レミリアほどの妖怪が一体何を考えているのだろうか。ただの巫女である霊夢には、レミリアの考えていることなど想像できなかった。

ならば、人間のことを理解できるのかと自問していたが、人間のこともよく分からなかった。その人間の中に霊夢自身も含まれていたが、自分のことが最もよく分からない。博麗神社の巫女であることはよく分かる。そういう博麗神社の巫女という役職があり、自らがいる。そんなことしか分からない。その自らが何なのかだとか、何をしたいのかと問われると分からない。

霊夢はこういうことを考えるのが苦手なのだ。考えないで済むならば考えたくない。自らを自らであると思っているのならば、それで良いではないか。そこに何か特別なことや他人と比較して自らは何なのか、何者なのか、ということとは考える必要はないのだ。強い自己があれば、それで良いのではないか。己が己であるという理解が難しい者だけが、こんなことを考えて、自らの存在を認識している。そうに決まっている。

炬燵の中で休んでいると考えないで良いことばかり考えてしまう。もしかすれば、レミリアはいつもこんなどうでもいいことばかり考えているのだろうか。となれば、彼女が常に不機嫌そうで重々しい顔つきをしているのも納得できる。そんなレミリアの側にいる咲夜も大変だろう。

そんなレミリアの側にいるのではなく、今だけこちらに顔を出して、何か朝食でも作ってくれないものだろうか。霊夢の願いとは裏腹に、家の中は相変わらず静かだ。咲夜にそう願ってみたが、咲夜の作る料理はどれも味が濃い。朝からそういう料理を食べるのは苦しいものがあり、やはり、自分で用意するしかない。腹の虫が鳴り、霊夢はようやく重い腰を上げた。

初雪は庭の雑木に積もろうとしていた。今日は誰も来ないことだろう。

半纏の上から割烹着を着て、竈の火を弱める。隣の焚き口には昨夜残しておいた味噌汁がある。ご飯が炊き上がる頃を見計らい、火にかける。もう一つ空いた焚き口で何か煮ろうかと思つたが、朝からそんなに食べたくない。炊きたての白米と味噌汁、それに温かいお茶があれば十分である。貰つた白菜の下拵えは、食後から始めよう。

火の番をしながら、今日の予定を考えてみたが人里の見回り程度で特に予定という予定はない。他にあるとすれば、人里に降りた時に白菜のお礼でもしておく程度だ。予定を早く終わらせて、後は炬燵に籠もり、のんびりするだけで良い。

朝食が出来上がり、お盆に乗せて、すぐに炬燵へ戻つた。炊事場は広いがその分、寒い。火の番をしていると手先や顔は熱くなるのだが、足先はそうもいかない。炬燵に入ると爪先からじんわりと熱が広がる。炊き上がったばかりの白米と湯気立つお茶と温め直した味噌汁が、身体の芯まで温めてくれる。

朝食を食べ終え、洗い物を済ませ、炬燵に戻ってくる途中、漬物に関する本を寢室の箆筒

の上から取ってきた。小鈴からお礼として貰った本だ。貰った当初はそこまで読む気はなかったのだが、里の人間から日頃の感謝として野菜を貰うようになると保存のために読み返すことが多くなった。他にも幾つか保存方法があるようなのだが、霊夢は白ご飯とお茶と合うこれを採用する回数が多かった。

ただ、白ご飯とお茶に合うのは問題だった。というのも、昨年も白菜の漬物を作ったのだが、その時の白菜は美味しかった。美味しかったのだが少し辛くなってしまい、そのため白ご飯にお箸が伸びることが増え、白梅が開くようになった頃には少し体重が増えてしまった。そういう経験があったため、今年は白ご飯にあまりお箸が伸びないようにしたい。おそらく、分量で加えた塩の量が、白菜に比べて僅かに多かったのだろう。

白菜を切り分け、箆に広げ、縁側に置きに行こうとして足を止めた。雪である。ここから天日干しをして、白菜に含まれている余分な水分を抜くのだが、この天気でちゃんと水分は除かれるだろうか。

普段の霊夢ならば何も気にせず、水分は除かれるであろうと考え置いておくのだが、昨年

のことがあり、そうはいかない。塩を昨年より減らし、白菜の甘みを楽しめるようにしたい。となれば、天日干しの時間を長くし、塩の量を減らせれば良いのだろう。こういう時、本に目を通すのだが、好みに応じて変えて良いと書かれているので困る。昨年の経験を元に手を加えるしかない。

縁側に箆を置いた時に障子を開けたが、寒風が身を切るようであった。庭の葉は微かに雪で覆われている、このまま雪が強くなれば、明日の朝には積もっているかもしれない。見回りの間だけでも小降りになってくれれば良いのだが、東の空にはまだまだ暗い雲が連なっている。

霊夢はすぐに障子を閉め、見回りに向かう前に防寒を整える。竈や炬燵の火を始末をしてから、外套をまとい、シヨールを巻き、靴棚から雪沓を取り出そうとして手が止まった。庭にもまだ雪は積もっていないならば、人里でも同じではないか。ならばと普段履いている靴を履き、霊夢は人里へ向かった。

霊夢は上空から人里全体の様子を見回り、人里に降り立った。霊夢の顔や髪やシヨールに

は沢山の雪が降りかかり、冷たい。見回る前に茶屋に顔を出し、状況を説明し、拭く物を借り、ついでに奥で温かいお茶を貰った。痛かった指先はじんわりと温くなる。飲むと口を茶器に近付けると、思っていたよりも熱く、舌先を火傷した。

そんなところを誰かは見ていたらしく、店先から呆れたような声が飛んできた。店員の向こうに、見慣れた顔があった。十六夜咲夜である。咲夜の両手には幾つもの袋がある。こんな茶屋に顔を出すなんて珍しいことであったが、霊夢はそんなことより見られたことが恥ずかしく刺々しい返事を返した。

「……何してるのよ」

「こっちの台詞よ」

「買い物よ」

と、咲夜は両手を軽く上げてみせた。霊夢は朝の間に考えていたことが蘇り、劳いの言葉をかけた。咲夜は意外そうに両眉を寄せたかと思えば、霊夢の前まで来た。まじまじと顔を覗き込まれる。

咲夜は荷物を机に置き、手袋を外し、霊夢の額に触れた。咲夜の手が冷たいのもあり、微かに声を上げそうになったが、それよりも霊夢は突然の行為に驚き、理解が追いつかなかった。咲夜は霊夢の額から手を離し、自分の額に手を当て、小首を傾げ、また霊夢の額に触れる。

「熱はないみたいね」

咲夜はそう言つて、霊夢の前に腰を下ろす。霊夢は確かめるように温かい手で自分の額に触れたが、熱はない。咲夜は慣れた様子で温かいお茶を頼む。二人の間には奇妙な静けさがあったが、霊夢はすぐに思い出したかのように声を上げた。

「え、何？」

咲夜は霊夢の疑問に答えず、茶を啜る。霊夢も少なくなった茶を啜りながら、何か心配されることでも言つたであろうかと考える。

咲夜にとつて、心配されるということはそれほど不思議なことなのであろうか。霊夢も巫女である。幻想郷の巫女である。そこで暮らす人間や妖怪の心配の一つや二つぐらいする。霊夢にとつて、咲夜は人里の人間と同じように失いたくない人間である。もし咲夜が霊夢の

言うことに耳を傾けるのであれば、紅魔館から離れてほしいとすら思っている。

霊夢からしてみれば、あそこは何ともない館なのだが、咲夜を始めとした人間が生活するには、恐ろしい所なのではないだろうか。まず、館の主であるレミリアが吸血鬼であり、その妹のフランドールも吸血鬼である。レミリアの親友であるパチュリーは魔女であり、門番も妖怪である。人間が暮らせる環境であろうか。もし、咲夜があつた館から出たいと言え、霊夢は喜んで力を貸すだろう。そして、咲夜が安心して暮らせる環境を提供する。これは何も咲夜を特別視しているわけではない。魔理沙がそう言えば、同じようなことをする。

霊夢は彼女達人間が大事なのだ。生きられるのならば生きてほしい。それが博麗の巫女としての一つの務めでもあると考えている。一人でも多くの人間を生きられるように生かす。

しかし、彼女達の生きる道に霊夢は干渉してはいけない。どのように生きなければならぬのかと道を整えるのは霊夢の役目ではないように思える。そこまでしてしまつては、自身の役目を履き違えている。人間がどのように生きるのかということは、人間にも妖怪にも分からない。

正しい人間の営みがあり、それ通りに生きなければならぬことはない。咲夜は妖怪の側で従者として生きており、魔理沙は自らの道を勝ち取った。今更、博麗の巫女として口酸っぱく、生き方を説く必要はない。もしそんなことを言えば、きっと二人は口を揃えてこう言うことだろう。霊夢はどうなのか、と。

自分の生き方が正しい人間の在り方なのか分からない。霊夢は人間でありながら、純粋に人間ではないように思えた。それは血の問題ではなく、博麗の巫女という神職から導かれた感覚だった。

霊夢は人間でもなければ、妖怪でもない。そういう輪から外れたところで生きている人間だった。少なくとも、人里で暮らすような少女と同じではないと自覚している。自分が特別であると認識したことはないが、特別な存在であるということは分かっている。他の人間から尊敬され、妖怪を退治する。そういう存在である。

だから、霊夢には咲夜や魔理沙といった普通の少女達のことがかからない。妖怪でもないのでレミリア達の考えていることなど分からない。輪の外から輪を維持するために全体を見

ている存在なのである。妖怪で近い存在といえは、同じように幻想郷全体を見ている八雲紫が辛うじて、同じ存在なのかもしれない。

しかし霊夢は、彼女と同じと言われるのは好きではない。激しい口調で否定するだろうか、呆れた口調でたしなめるだろうか。どちらであれ、あんな妖怪と一緒にしないでちょうだい、と言うことは決まっている。

咲夜は一杯の茶を飲み終え、ようやく口を開けた。

「霊夢らしくないって思っただけよ」

霊夢は咲夜に自分がどのように思われているのか気になり、少し浮ついた声で訊く。

「そう?」

「興味ないんじゃないの?」

「興味ないわけじゃないわよ」

「そう?」

「そうよ」

「それが仕事だから」

「私の心配をすることが？」

「それだけじゃないわ」

「大変ね」

「代わってくれる？」

微笑する咲夜に、霊夢はすぐに彼女の性質を理解して笑い返した。

「代わってあげましょうか？」

「……いいわ、やっぱり」

「助かるわ、理解が早くて」

咲夜に霊夢の代わりが務まるとは思えない。それは咲夜が霊夢より劣っているというわけではなく、従者である咲夜には霊夢の役目は果たせないということだ。何事にも肩入れせず、ただただ調整のために動く。咲夜ならば無意識の間に、全体を見ている紫の希望や願いのために少しづつ、どこかに傾く。そうなってしまうえば、幻想郷の平穏が崩れる。

魔理沙も霊夢の代わりを務めることはできない。あの少女は咲夜よりもっと普通の人間である。人間から人間の理を外れようともがいている。博麗の巫女になってしまえば、どうすれば良くなるのかということに考えを費やし、己の能力のなさに潰れてしまうのが目に見える。何より、もし霊夢が幻想郷の害となる行為に走った時、魔理沙は一瞬でも躊躇う。極僅かの間だけでも、情を考える。霊夢との間にあった思い出を考える。そして、本人でも分らない範囲で鈍る。それでは、巫女としての務めを果たせない。無情で冷徹に、幻想郷の害となる存在の息の根を止められなければならない。

霊夢ならばできる。この場で咲夜が幻想郷に害を為す存在になれば、容赦なく亡き者にできる。幻想郷の調律、それが博麗の巫女として最も優先せねばならないことだ。そこに情も思い出もいらぬ。

結局、この幻想郷に霊夢の代わりを務められる人間は存在しないのだ。咲夜も魔理沙も普通の人間からしてみれば、特別な能力をもった人間であろう。しかしそれでも、霊夢と比べるとどうしても普通の少女だ。片や従者で、片や魔法使い。その程度の少女だ。

幻想郷があり、霊夢という博麗の巫女がいて、初めて生きたいように生きられることが許されるのが咲夜や魔理沙達であろう。この幻想郷に生を授かった時から、霊夢は彼女達よりも上に立ち、彼女達の行く末を見守る存在として生きることが決定付けられている。

そういう役回りなのである。だから、人間や妖怪のことは分からなくも構わず、自らのことなどもっと分からなくていい。必要な時に必要な行動を完遂するだけだ。

朝の考えがまた蘇る。霊夢はレミリアが何を考えているのか知りたくなかった。博麗の巫女として興味があるのではなく、一人の人間として興味があったのだ。レミリアのように暇だと何を考えるのだろうか、と。つまらないことばかり考えて、つまらなくないのか、と。

「レミリアって何を考えているの？」

咲夜はいつの間にかどら焼きを頼んでいたらしく、フォークで切り分けていた。咲夜は手を止め、霊夢の心を探るかのように青い目を向ける。青い瞳の底には疑う色だけではなく、霊夢が何を考えているのかを楽しむような色もあった。

「それは、どういうこと？ 巫女として気になっているのかしら？ また何かするんじゃない

かつて」

「別にそんなことないわ。第一、また何かしても止められるから」

「大した自信ね」

「一度、やっているからね」

咲夜が霊夢の真意を知ろうとしているのは明らかだった。馬鹿正直に、主人が何を考えているのか興味があるので教えてほしいと答えるのも癪だったので、あえてそういう言葉を口にした。疑いの色が濃くなり、それまでであった楽しい色は奥底に沈み、主人への無礼を責める色が薄つすらと浮かぶ。それでも、咲夜の調子は至って平静だった。

「それでお嬢様の何を知りたいの？」

「私の平和を邪魔しないかどうかとてところかしら」

「それは分からないわ」

「従者なの？」

「霊夢のことなんて分かるわけじゃないじゃない。何が平和で何が平和じゃないかなんて難しい

ことだわ」

「分からない？」

「だったら訊くけど、私のこと分かる？」

「分かるわけじゃないじゃない」

「でしょ？ 同じよ」

そう言われるとその通りだった。霊夢が咲夜のことを分からないように、咲夜も霊夢のことを分からない。しかし、それは霊夢と咲夜の間のみ生じる感覚なのだろうか。霊夢は誰のこともよく分からない。

咲夜の場合、主人であるレミリアのことも、主人の友人であるパチュリーのことも分からないとなれば生活に支障を来す。

咲夜は分かっていると思うのだが、霊夢は何故だか知らないが咲夜の口からその確証が欲しかった。

「……レミリアは？ レミリアのことは分かるの？」

咲夜は靈夢の調子から冗談の気配が消えたことを察し、安心させるように微笑んだ。

「当たり前じゃない」

分かつていた返答に靈夢も笑った。咲夜はレミリアのことを分かっている。従者として当たり前のことのように言い切った咲夜を、靈夢は羨ましく思えた。もし、靈夢にもそういう詳しく知れる者がいれば、咲夜のように動くだろうか。何を考え、過ごしているのかと理解しようとするだろうか。靈夢は咲夜のようになれない。考えるだけ無駄なことだ。

靈夢は咲夜の近くにいるとそんなことばかり考えてしまいそうになり困った。咲夜という人間が、靈夢にそんなことを考えさせるのだろう。何者かに仕え、一生を終える気である咲夜だからこそ、靈夢もその考えに流される。

靈夢は咲夜のように抛り所になる場所もなければ妖怪もない。冬が終わり、春を迎え、夏が過ぎ、秋が訪れるように幻想郷を揺蕩っている。花が枯れ、開き、また枯れるように靈夢は何者かの感覚に寄り添いながら、何人にも触れられないところに落ち着く。

自分とは正反対のような咲夜を羨ましく思っているかもしれない。何もない靈夢に比べ、

咲夜は両手から溢れるほどのものを有している。しかしそういう羨望は妬みや嫉みに繋がることはなかった。ただ、霊夢と咲夜の違いをはつきりと映し出すだけだ。

外の雪は段々と激しくなり、店の窓を叩き続ける。人里の見守りの最中に明日も雪が続くと教えられた。

「明日、手伝ってほしいことがあるの」

「雪掻きは嫌よ」

「それは魔理沙とアリスの仕事だから」

「じゃ、何？」

「いつもと変わらない仕事よ。お礼もするから。それじゃ、明日の朝、待ってるから」
霊夢はそう言って、咲夜の追及を待たずに店を出た。

※

翌朝、博麗神社の参道も本殿も雪に覆われた。澄んだ陽の光を受け、積もった雪はきらきらと輝いている。雪は晩の間に止んだようだった。白い息が宙を漂う。屋根の雪を払い、参道や本殿の雪掻きをしていると全身に汗が広がる。一人だと何往復もしないといけないため、自然と息が上がる。頬が熱い。マフラーを外し、黙々と続ける。雪掻きを終わると昼になっていたらしく、魔理沙とアリスが来た。中庭に案内し、雪掻きを手伝うように伝える。

霊夢は彼女達がスコップを振るう音を聞きながら、炊事場に戻る。割烹着を着直し、火の番を続ける。霊夢の予想通りならば、今頃、野菜を切り、鍋に投入し、また野菜を切り、時々鍋の様子を見たりするはずだった。それがこうして、魔理沙達の様子を見たり、お茶を啜る程度のことができるのは、隣に咲夜が居るお陰だ。霊夢が魔理沙達の様子を見に行っている間に、咲夜が手際良く作ってくれていた。家主として火の番はすると言ったのだが、炊事場を離れるとその役目も咲夜が引き受けてくれた。

霊夢は咲夜が来るとは思わなかった。この雪だ、紅魔館の屋根や庭も雪に覆われていることだろう。そっちを優先すると思っていたし、レミリアもそう命ずると思っていたのだが、

咲夜は霊夢の所に来た。何もなく咲夜を貸してくれるとは思えない。何かあった時のための貸しであろう。紅魔館のことより、博麗神社のことを優先したのだから今度はこっちの番なのではないか、と言うための。

咲夜を借りることとレミリアの願いが釣り合えばいいのだが、あの吸血鬼がそこまで霊夢に親身になってくれるとは思えない。早く帰した方が良さそうだが、複数人の料理を作るとなるとまだ時間がかかる。

「あなたの所は大丈夫なの？」

「美鈴が何とかするから大丈夫よ」

「頼りになる妖怪じゃない」

「門番としては駄目だけどね」

「随分と手厳しいこと」

「当たり前じゃない。仕事はしてくれないと困るわ」

「雪搔きは門番の仕事なのかしら？」

「巫女も巫女の仕事をしてくれないかしら？」

「もうやったわ」

「まだやってもいいのよ？」

「じゃ、雪掻き手伝いに行く？」

「戻っていいってこと？」

「駄目よ」

「困った巫女だこと。今頃、美鈴がお嬢様やパチュリー様やメイド達に囲まれて大変なことになっていると思うのだけど」

「そう思うのなら、どうして来たのよ」

咲夜の横顔に戯ける色が見え、霊夢はそれが本心からの言葉か分からなかった。

火を強め、咲夜は肉を入れる。霊夢は咲夜から包丁とまな板を受け取り、手持ち無沙汰な咲夜に茶を渡した。咲夜は火を見ながら話し、霊夢は洗い物をしながら咲夜の言葉を一つ一つ聞いていた。

「お嬢様と話した結果よ」

「話した？」

「そうよ」

霊夢は洗い物を終え、咲夜の言葉を反芻させる。咲夜はレミリアと話したと言った。ここに来たのはレミリアの命令ではなく、咲夜が自らの意志で紅魔館と博麗神社のことを考え、選んだということだ。咲夜も昨日の雪を見ていたはずだ。積もるということは心のどこかで理解していたはずではないか。それなのに、紅魔館を美鈴に任せ、ここに居る。どういう意識が働き、咲夜はここに居ることを選んだのだろうか。霊夢には全く分からず、素直に疑問を口にする。

「それで、紅魔館よりこっちを選んだの？」

「不思議？」

「不思議よ」

霊夢は咲夜の隣に置いてある空き箱に腰を下ろした。咲夜を見上げてみるが、何も答えて

くれない。鍋はまだ煮えそうにない。

咲夜という人間がよく分からない。レミリアの従者であるということ以外、霊夢は咲夜のことを知らなかった。それだけ知っていれば十分なのかもしれないが、それだけではいけないような気がする。どうしてそんなことを思ったのか霊夢自身よく分からない。自分が納得できるような理由を並べ立てるとすれば、咲夜が紅魔館よりも博麗神社を選んだからというものがあった。

咲夜が何を思い、何を考え、レミリアと話し、何を決めて、隣に立っているのか分からない。それでも隣に立っていることには変わらない。霊夢はそれで十分だった。今この瞬間、レミリアより霊夢が選ばれたようだった。霊夢は直接、レミリアよりも自分自分を選んだのかということを訊きたくなかった。咲夜が否定すると分かっているから。それでも、どうしてここを選んだのかは確かめたい。

しかし、もしその理由が霊夢の願う答えでなかったら霊夢はどうすればいいのだろうか。そもそも、霊夢は咲夜にどう答えてほしいのだろうか。レミリアよりも霊夢を選んだ、と答

えてほしいのだろうか。そんな答えを聞いて、霊夢はどうしたいのだろうか。咲夜もそんなふうに答えて、一体どうしようというのだろうか。

レミアアと比べ霊夢を選んだとは言つてほしくなかった。しかし、確かな理由が知りたい。身勝手極まりない願いだと霊夢自身も分かっていたため、咲夜が答えるまで沈黙を貫くことしかできない。

咲夜は口を真一文字に結ぶ霊夢を何度か見たが、霊夢が何も話さないと察すると観念したように口を開けた。

「先に約束したから」

それが咲夜の本音なのであろうか。咲夜と付き合いの長くない霊夢には彼女の何が本音で何が嘘なのか知ろうにも知れない。ただ、この状況で嘘をつくとは思えない。きつと、本音なのだろう。そう思うと自然と頬が緩くなりそうだったが、咲夜にそんな姿を見られるのが何となく嫌だったから、本音を包み込んだ言葉を返した。

「そんな約束、破っても良かったのよ」

咲夜は立っているのが疲れたのか、霊夢の隣に腰を下ろした。からかうように笑う咲夜の顔に腹立たしいものを覚え、ぶつきらぼうに言い返す。本音か嘘かこちらは分からないのに、向こうには筒抜けなのも腹立たしい。

「破ったら怒るでしょ？」

「別に」

「本当？」

「多分」

「絶対怒ったわ」

「でも、紅魔館のこともあったじゃない」

「お嬢様もいる、妹様も。パチュリー様だって。小悪魔も美鈴もいる。妖精メイドだって。でも、霊夢は？」

「魔理沙やアリスが手伝ってくれるわ」

「今は、ね」

霊夢は火を弱める。咲夜の言葉を考えようとしたが、その言葉への返事はすぐに出てきた。霊夢は咲夜のように沢山の妖怪に囲まれ、穏やかに楽しく過ごすことはできない。霊夢は妖怪を退治し、妖怪は霊夢に退治される。仕方ないことなのである。霊夢の返答は煮える鍋の音に飲み込まれ、咲夜の耳まで届かなかった。

霊夢が一人だから咲夜はここに来たのだろうか。霊夢は事前に咲夜の他にも魔理沙やアリスが来ることは伝えている。それなのに、咲夜は霊夢が一人していると判断したのだろうか。それが約束に包み隠された本音なのだろうか。そう考えると、咲夜に同情されているように身体が芯が熱くなる。そんなことを思われるために咲夜を呼んだのではない。

咲夜は霊夢をどう思っているのだろうか。魔理沙やアリスと同じような者と思っているのだろうか。訊けば答えてくれるかもしれないが、訊くこと自体が間違っている。

霊夢は博麗の巫女であり、彼女達とは違う。そんなことを今更確認するのははおかしい。しかし、この確認はその確認とは全然違うように思える。そんな確認をして、霊夢はどうしたいのだろうか。咲夜に彼女達と同じではないと認められて、咲夜にとっても自分自身が特

別だと思われたいのだろうか。

しかしその特別は博麗の巫女だからこそ許される特別であり、霊夢自身は含まれないような気がする。霊夢は己と博麗の巫女をどう切り離して考えればいいか分からなくなった。普段ならば、博麗の巫女であれば己を意味している。自分が選ばれた巫女であるということに納得できる。

しかし、この場合は違う。咲夜に博麗の巫女だから特別だと思われるのと、そこに霊夢はいない。博麗の巫女という殻だけがあり、言葉があり、中身には何も無い。ただ、空っぽの博麗の巫女がある。その空っぽの博麗の巫女を、咲夜は特別だと思っている。そんな気がする。だから、咲夜に博麗の巫女が特別だからと言われても、霊夢は全然嬉しくなかった。何故、咲夜の言葉にのみそんな力があるのか分からない。

全てを確認する勇気が霊夢にはなかった。確認してしまえば、何か霊夢にとって嫌なことが起きるような予感がする。咲夜が霊夢を特別と思っていないような、霊夢の期待を裏切ることを咲夜は口にする。霊夢の勘が、霊夢の口と胸を強く縫い付けていた。もし今、霊夢の

疑問を全て咲夜にぶつければ、この関係に亀裂が走る。そんな未来が見える。この関係を壊したくない。沢山のことでの悩み、考え、時々嫌になってしまいが、この関係を悪くしたくない。他の人間が相手ならば、こんなに悩まない。相手が咲夜になると沈黙が多くなり、咲夜の心情を考えようとしている。きっと、咲夜も霊夢と似たような環境にいるから、親近感でもいだいているのだろう。

沢山の妖怪に囲まれ、その中の秩序を守って生きている。紫との関係のように、レミリアとの関係がある。咲夜の特別は本来ならば紅魔館の中でのみ働く、特別だ。ここまで伸びていい特別ではない。霊夢のように幻想郷全体の秩序を守るために存在するような特別ではない。それでもこうして特別だと考えてしまうのは、どうしてか分からない。

咲夜のことを知ろうとすると沢山の分からないと出会う。そういうことを考えるのが得意ではない霊夢はそれ以上、考えないようにした。霊夢が魔理沙のように求道者ならば、全てを知ろうと沢山の本を読み、調べ、人と会い、一つまた一つと歩み続けたことだろう。しかし霊夢は魔理沙のように根気強くない。一つのことを長く考えられる人間ではないのだ。きつ

と魔理沙も霊夢のような立場に立っていれば、同じように考えるはずだ。

霊夢の元には沢山の情報が入る。自ら情報を得るために動く必要はないのだ。この最果ての地で、観測するだけで良い。本当に危なくなつた時のみ、動けばいい。

ただそうなる困ることがある。何もしない時間が増え、色々なことを考えてしまう。今日の食事のこと、明日のこと、人里のこと、幻想郷のこと。そういうことを考えてしまう。霊夢はそういうことを考えたくなかつた。炬燵に籠もり、何も考えないように過ごせばどれだけ幸せだろうか。この幻想郷で起きることを泡沫のことと考え、何事にも動かない。そうなれば、どれだけ幸福だろうか。しかし、そうなつたところで霊夢自身は幸せに思えるのだろうか。泡沫の中で享樂に耽り、霊夢はそれを幸福と考えるのだろうか。泡沫の中で生じる異変のみを解決する巫女になって、霊夢は良いのであろうか。

今の霊夢の周りには何人もの人間や妖怪が存在している。彼女達は霊夢の知らないことを知っている。彼女達と接し、同じ時を過ごし、霊夢も彼女達のようになっている。考え、悩み、笑い、悲しみ、楽しみ、怒り、動き、心配し、不安になる。今更になつて、この幻想郷

で起きることを泡沫のことと片付けられない。心が機敏に反応する。身体が動く。霊夢はそういう博麗の巫女なのである。きつと些細なことで動じるであろう、何気ない言葉に引掛かりを覚えることだろう、不意に炬燵から出てしまうことだろう。それでも良い。それでも、博麗の巫女としての務めを果たせるのなら、それで良い。

霊夢の胸に宿るこの感情は、もはや泡沫のものではなかった。この感情は幻想郷のみならず、霊夢の周りにいる人間や妖怪にも向けられていた。博愛と呼ばれる感情だった。しかし、等しく愛そうと思う者の中に咲夜の姿は見当たらない。人間が博愛の対象ではないということではない。魔理沙は博愛の対象であるし、早苗もそうだ。しかし、咲夜は違う。

咲夜は霊夢にとって特別だった。他の人間とは違うと思う。魔理沙や早苗や阿求や小鈴と比べて、少し年上に見えるからだろうか。時として、霊夢よりも年上に感じることもあるからだろうか。確かなことは分からない。

霊夢が咲夜を特別と想っているように、咲夜も霊夢のことを特別と想うだろうか。レミリアの従者である咲夜が霊夢のことを気にするだろうか。霊夢が咲夜のことを幻想郷で生きて

いる人間の中の一人と判断していたように、咲夜もまた霊夢のことを幻想郷で生きている人間の一人と判断していることも十分に有り得る。

咲夜に大多数の人間の一人と思われるのは嫌だった。深く踏み込む勇氣はなかったが、早急に知りたかった。

「私のこと、どう思う？」

沈黙を破った声は、咲夜の答えを期待するかのように濃い恥じらいを帯びていた。霊夢は火で熱くなった頬を冷ますように、手で頬を扇ぐ。咲夜は霊夢の代わりに火を消す。咲夜の横顔はいつもと変わらない白く澄んだものだった。いつもならばすぐに何かしら答えてくれるのにも拘らず、咲夜はまだ口を開かない。咲夜は霊夢を一瞬見たかと思えば、流れるように縁側の方へ目を遣った。霊夢はその時、咲夜の青い瞳から平静が沈み、動揺が走っているのを確かに見た。

霊夢は咲夜ならば、すぐに答えてくれるだろうと思っていた。平静に、普段と変わらない調子で、好きと答えてくれるとばかり思っていた。しかし、現実の咲夜は何も言わない。け

れども、その目は確かに霊夢のことを思っていると教えてくれた。霊夢はこの時になって、咲夜に申しわけないことをした気持ちになった。謝ろうと思つたが、それよりも咲夜にどう思われているのか知りたい気持ちの方が勝つた。特別なのか、特別ではないのか。

咲夜がどうして答えてくれないのか、霊夢には分からなかつた。特別ではない、と言うことで霊夢を傷付けると思っているのだろうか。レミリアの名前を出せば、霊夢も納得する。咲夜がレミリアを特別だと思ふことに嘘偽りがないことを知っている。レミリアと比べればと言われれば、霊夢も、やはりそうかと分かる。しかし、咲夜はレミリアの名前を出さず、口を閉ざした。

霊夢の言葉の意図に、咲夜は気付いているのだろうか。特別ではない、と言われることで霊夢も動揺すると思われているのだろうか。霊夢はそれほど弱いと思われているのだろうか。沈黙が、咲夜なりの答えなのだろうか。普段ならば、そういう曖昧な答えでも許したことだろう。しかし、今は、咲夜の言葉が欲しい。咲夜にどう思われているのか、咲夜の言葉で教えてほしかったのだ。

「答えて」

咲夜は霊夢の目を見て、逃げられないと悟ったのかゆつくりと一つ一つ、言葉を選びながら答える。

「そんなこと、急に言われても……」

「答えられない？」

「ええ」

「そんなに？」

「難しい質問よ。私にはお嬢様がいるんだから」

「だったら最初からそう言えばいいじゃない」

結局、レミリアを出され、霊夢は腹立たしい気持ちを露骨に顔や声に出した。咲夜は霊夢をなだめるように笑う。

「だから、難しかったのよ。分かってちょうだい」

「嫌よ、分かりたくないわ」

靈夢は平然と言い返しながら、自分の心が驚くほどに慌てていることに気付いた。同時に虚しくなるような、温かな感情が胸の底に流れていた。レミリアの従者である限り、咲夜の特別にはなれない。分かっていた、そんなこと当然であるように知っていた。それなのに、この胸に流れている虚しい感情は何なのであろうか。咲夜に期待していた。特別だと言われるような気がした。レミリアほど特別ではないが、沢山の知り合いの一人ほどではないはずだと思いついでいた。博麗の巫女でもあるから。

咲夜の答えは靈夢の期待を裏切ったが、予想は裏切らなかつた。レミリアの従者である以上、そう言われると覚悟していたのにも拘らず、特別になりたいと思っていた。その特別になりたという思いは、何もレミリアの代わりになりたいというわけではない。咲夜を従者としてみたいわけではない。

ただ、咲夜にとって特別になりたいだけなのだ。魔理沙やアリスや早苗と同じような所に分類されるのではなく、同じような感情を向けられるのではなく、特別になりたい。恭しく頭を下げられるのではなく、対等な特別になりたい。

霊夢にとつて、咲夜が特別であると伝えれば、咲夜も霊夢のことを気にかけてくれるだろうか。いくつかの共通点を持っているからこそ親近感をいただき、特別とすら思っている、と。そう伝えられれば、少しでも霊夢のことを見てくれるだろうか。しかし咲夜にしてみれば、霊夢を特別と考えるのは迷惑なことではないだろうか。

咲夜が一番に考えるのはレミリアだ。それからランドールやパチュリーや美鈴のことを考え、紅魔館のことを考える。主人やその友人や屋敷のことを優先するのは従者として当然のことであり、その下に多くの事柄をまとめて考えるのはおかしいことではない。霊夢もそうやって優先順位をつけ、まとめて考えていることがある。

霊夢の胸はいくつのも思いの間で揺れ動き、さまよい、いよいよ悲鳴を上げそうだった。咲夜も霊夢の心を分かっている、黙った。嘘をつくことができたのにも拘らず、黙った。

もし、咲夜が嘘をつける少女だったのなら、咲夜は嘘をついただろうか。すなわち、霊夢が特別だと答えただろうか。咲夜の特別という言葉を、霊夢は何も疑わず受け止められただろうか。きっと、そんな賢い選択はできない。すぐに、直感が働き、本当にそう思ってい

るのか訊いたことだろう。直感が働かなくても、疑ったことだろう。

咲夜の沈黙は双方を傷付けないで済む最善の選択だった。霊夢は自分が傷付き、咲夜の思いを踏みにじった後に、ようやく気付いた。

「失礼なこと、訊いたわね」

霊夢は努めて平静を装った。縁側に目を遣っていた咲夜は、霊夢の声を聞き、すぐに振り返った。霊夢は胸底にある感情が込み上がってこないように震える唇を噛み、堪えた。咲夜は霊夢を見て、何も言わなかった。それが優しさから来るものなのか、何も分からない。今は、何も言われないことが嬉しかった。

霊夢は、咲夜の特別になれない。ならば、この思いをどうしたらいいのだろうか。この思いを捨て、忘れることができればどれほど楽になれるだろうか。

レミリアを説き伏せ、最悪力づくでも咲夜に認めさせる。霊夢がレミリアより強い。だから、特別だと思え、と。そんな方法を選んだところで、レミリアとの力関係が明らかになるだけだ。そんな方法では意味がない。レミリアが、咲夜に霊夢を特別と思え、と命じれば、咲夜

は霊夢を特別に思うだろう。そんなふうに特別に思われたいのではない。優遇されたいわけではない。しかし、主人であるレミリアを無視して、咲夜が振り向いてくれることはない。

霊夢だけでは、もはや何ともならない。レミリアが力を貸してくれば何とかなるだろう。しかし、そんなことを真正面からレミリアに伝えられるわけがない。霊夢も幼ければ、レミリアもまた幼い。咲夜のこととなれば、霊夢と同じように感情的になるのが目に見えている。最も分かりやすい言葉で、霊夢の言葉を否定するだろう。嫌だ、と正直に言う。レミリアならば、正直に言ってもおかしくない。

咲夜のことではなければ、霊夢はレミリア以外の妖怪や人間に頼ったことだろう。けれども今回のことは、レミリアと話す必要がある。

咲夜は縁側で休む魔理沙とアリスに温かい茶を持っていく。霊夢は鍋を持って、三人の元へ向かった。四人は炬燵に入り、各々の疲れを癒やす。咲夜と霊夢の間に会話はなかったが、魔理沙もアリスも気にならないようだった。

魔理沙から、霊夢が礼をしたことに何か裏があるのではないかと訝しがられた。霊夢は

食材が余っていたから、と答えながら、これからのことをぼんやりと考えていた。咲夜に目を遣ったが、咲夜はそれまでの事がなかったかのように涼しい顔をしていた。

やはり、咲夜にとって霊夢はその程度の人間なのであろう。霊夢は少し寂しくなった。

二

厳しい冬が終わり、春が来た。博麗神社の炊事場は昼間から妖夢や藍や鈴仙という給仕の者に溢れていた。先に持ってきた食材や酒をどうするか話し、主人達が来る時間を見越して、準備を手伝ってくれる。霊夢は夜になってから輪の中に入り、準備を手伝っていたが、参道の方から妖怪が来る気配を覚え、宴会の主人として彼女等を出迎えようとする。縁側や参道はもう妖怪で溢れ、夜桜を見物しながら酒を飲んでゐる。

博麗神社の長い階段は桜色に染まっていた。参道の桜が、春風に揺られているためだ。彼女等は律儀に階段を登ってきたらしく、微酔を帯びたように赤い頬をしていた。二人は参道

の桜を見上げ、良い色をしている、歩いて来たかいたがあった、と話している。

霊夢は二人の到着を微笑をもって迎えた。

「遅いじゃない」

「昼に訪れるほど馬鹿じゃないのよ」

霊夢は主人であるレミリア・スカーレットの言葉を無視して、日傘を閉じる十六夜咲夜に目を遣る。

「手伝ってくれてもよかったのよ？」

「これから手伝うじゃない」

あれから咲夜と会ったのは年末年始の時だけだった。といっても咲夜一人で来たのではなく、今と同じようにレミリアと一緒にだった。霊夢の方も大掃除や参拝客の話を聞いたりと忙しく、あの時のことを意識しない日々が続いた。今もそうなると思っていたのだが、心のどこかで思い出し、咲夜の顔を見れなかった。咲夜は霊夢のことなど気にせず、レミリアに一声かけると霊夢へ訊く。

「それで、何を手伝えばいいのかしら？」

「賽銭箱はあっちよ」

「それだけ？」

「ええ。妖夢も藍もいるから、あんたが居ても邪魔なだけよ」

咲夜の顔が一瞬、険しいものになった。何か手伝おうとしていたらしいのだが、炊事場はもう従者が沢山いる。霊夢も彼女等と共に居たのだが、人数過多なのは明らかであり、妖夢や藍の口から、霊夢は霊夢の仕事をしてくれれば十分だから、という言葉すら飛び出した。彼女等が準備をするのを見届けるのも霊夢の大事な仕事なのだが、ああ言われると、宴会の主人として客を迎えるしかなかった。

そこに咲夜が加わったところで、何もすることは無い。霊夢が炊事場に戻っても同じだ。しかしだからといって、酒や料理に舌鼓を打ち、夜桜を鑑賞するようなことも得意ではない。霊夢も咲夜も裏方に徹し、息抜きに鑑賞する方が性に合っていることだろう。霊夢の場合、明日の夜にも眺めることができる。今は客人のために率先して裏方に回った方が良さだろう。

今、炊事場に居る三人を会場に出した方が良いでしょう。時が経てば、各々が勝手に振る舞うことだろう。行き過ぎないように霊夢が見守っておけばいい。

「咲夜、今宵の主人がそう言っているのよ。存分に楽しまないと損よ」

レミリアは霊夢に包みを渡すと、動かない咲夜の手をとって、どんどんと会場へ向かう。咲夜はレミリアに何か言おうとしたが、何も言わなかった。

霊夢は包みを部屋にしまい、炊事場で寛ぐ三人に声をかけ会場に向かわせて一人になった。表の喧騒を耳に、霊夢は静かに茶を飲む。炊事場には残り香が至る所に漂っている。本来なら、霊夢もその中で同じように動くつもりだった。従者の働きを見て、その手先や指先や声に、全然関係ない人間の姿が浮かび、霊夢の動きは時々止まり、いつしか炊事場を追い出され、居間から指示を出すだけになった。

霊夢の胸には、ずっと咲夜の姿がある。あの感情は依然として霊夢の胸にあり続ける。咲夜と会わないことで、時が経つにつれて霊夢の胸から消え去るであろうと思っていたのだが、会えない時の方が色濃く蘇る。

咲夜が来ない間、魔理沙や紫や早苗や文が来た。霊夢はいずれの者にも、この感情のことを口にせず、咲夜のこと口にしなかった。口にしてしまえば、巡り巡って咲夜やレミリアの耳に伝わる恐れがあったからだ。そうやって伝わってしまうのを、霊夢は恐れていた。そういう伝聞が耳に入った時、もう当人の思いから全然かけ離れていることを、霊夢は知っていた。

霊夢は幾つか文（ふみ）を綴り、この思いを咲夜に伝えようとしたが、どれも徒に紙を無駄にするだけだった。上手く言葉にならない。この感情がどういう感情なのか、霊夢自身分かっていないため、沢山の言葉を並べ、どの言葉にもじっくり来ず、否定の言葉を並べ、否定の言葉が全体の否定にならないようにまた言葉を重ね、ということを繰り返し、膨大な量の文章を連ねてしまった。

霊夢はこの感情と真正面から向き合い、咲夜に正直に伝えるのが怖かった。咲夜にしてみれば、霊夢はただの友人なのだ。変えられない、本当に咲夜のことを思うのなら変えてはいけない関係だった。霊夢がもし、もっと我が儘で、自らの感情を抑えられない少女であれば

ば、咲夜も向き合ってくれたであろうか。霊夢はもつと子供になりたかった。自分自身の感情だけを考え、自分自身の感情を伝えられれば、今のようないい思い出がなくて済む。

もし、時を巻き戻すことができれば、過去の己に会えるのならば、忠告の一つや二つを送ったことだろう。しかし、霊夢にはそんなことはできない。咲夜に頼めば、そんなこともできたりするのだろうか。時を操れる咲夜ならば、できるのだろうか。そんなことを言うために、咲夜に会いたくない。そんなことを頼みたくない。頼んでしまえば、咲夜に嫌われる予感が働いた。嫌われるというのは霊夢の思い過ぎかもしれないが、今よりも悪い印象を持たれることは確かだ。そんなことをするために、時を操るのか、と思われる。

しかし、霊夢とて、時を操りたくて操ろうと思つたわけではない。これ以上、傷付きたくなかった。咲夜のことを思い、胸が波打ち、全身に染み渡り、涙が零れるのを堪えるしかないのが嫌なのだ。

この感情を捨てようとしたこともあつたが、捨ててしまえば、霊夢が思っているよりももっと大きなものを失つてしまいそうな恐怖を覚える。無意識の間に考えないようにして、捨て

ているような時もあったが、また無意識に霊夢の胸に帰ってくる。一層、強い思いとなって霊夢の胸を叩く。

「お酒、貰えるかしら」

レミリアの静かな声が、霊夢の肩を揺らす。声のした方に目を向ければ、空になったグラスを持ってゐるレミリアの姿があった。障子の向こうはまだまだ騒がしい。霊夢はレミリアの隣に咲夜の姿がなかったことを確認し、彼女を探した。しかし、霊夢の視界に咲夜の姿は見えてこない。この宴会のどこかで、酒でも飲んでゐるのだろう。

霊夢はレミリアの声音から酒気を嗅ぎ取り、微かに眉根を寄せた。

「主人よ？」

「主人なら客人の要望を聞くものじゃなくって？」

霊夢は仕方なくといった様子で棚から日本酒を出し、封を切る。慣れた手付きでグラスに注ぎ、微笑む。レミリアは注がれた日本酒に手を付けず、霊夢を見上げる。

「霊夢の分は？」

霊夢は湯呑みを持った。レミリアの顔はまだ曇ったままだ。レミリアはグラスを居間の卓袱台に置き、障子を閉め、腰を下ろす。霊夢の心を見透かしたように柔らかな視線を向ける。

「何かあった？」

「何かって？」

「何かは何かよ」

「何よそれ……」

吹き出した霊夢とレミリアだったが、何を知らないのか二人共に分かっているようだった。しかしそのことを簡単に問うてしまいたくなく、意地を張ってしまった。レミリアも咲夜のことを知っていたがっている。厳密に言えば、霊夢と咲夜のことを知っていたがっている。霊夢が、咲夜のことを、咲夜とレミリアのことを知っていたがっているように。

もし、レミリアに全てを打ち明ければ、レミリアは協力してくれるだろうか。レミリアが咲夜に命令するのではなく、霊夢の力になってくれれば、咲夜に胸の内を告白できる時が来るのではないだろうか。レミリアは咲夜のことをどう思っているのだろうか。従者としてだ

けではなく、一人の妖怪として咲夜という少女のことをどう思っているのだろうか。

霊夢が思っているようなことを、レミリアも思っているのだろうか。もし思っているのなら、霊夢は身を引けるだろうか。レミリアと咲夜のことを思って、自分の思いを伝えずにいられるだろうか。分からなかった。それでも、レミリアしか目の前に居らず、何も伝えな
いわけにはいかなかった。

「咲夜のこと、どう思うの？」

霊夢は口火を切った。レミリアはその問いに一瞬目を丸くしたが、すぐに落ち着きを取り
戻し、酒を飲み、茶化すように軽い言葉を投げ返した。

「さあ、どうかしら？ そんなこと考えたことなかったから分からないわ」

霊夢はレミリアの答えが聞こえなかったように、自分の思いを口にした。震えた声が、静
かな居間へ滑り落ちた。

「私は……。私は、側に居てほしいと思うわ」

霊夢は咲夜に伝えられなかった言葉を、レミリアには伝えることができた。それは決して、

レミリアから咲夜に伝えてほしい、ということではなかった。伝えれば、何か力になってくれるだろう、というものではない。何かレミリアにしてほしいという思いから生じた言葉ではない。ただ、言葉にしたかったから言葉にした。言葉にして、霊夢が咲夜をどう思っているのか明らかにしたかった。その言葉を聞いて、レミリアがどう思うのか、ということは一切考えていなかった。

レミリアは浮かべていた笑みを崩した。

「どうしたいの？」

「私はどうしたらいいの？」

「質問を変えるわ。私は何かした方がいいかしら？」

「咲夜のこと、どう思っているの？」

「霊夢、質問に……」

「咲夜のこと、教えて」

「大事な従者よ。誰にも渡したくないわ」

自信に溢れた答え。嘘偽りのない言葉であることは、レミリアの顔を見れば明らかだった。咲夜は幸せ者だった。そこに、霊夢が入る隙間などないだろう。分かっていたことなのだが、それでも咲夜の隣に居たいと思っっている。胸が締め付けられ、息苦しい。霊夢は胸の底から溢れてくる涙が零れないように耐える。歯を噛み締め、言葉を飲み込む。

「咲夜があなたをどう思っているのか、そんなことを問いたですようなことはしないわ。でも、霊夢はそれでいいの？」

霊夢は無言で首を横に振った。レミリアは霊夢の答えが分かっていたように口元に柔らかい笑みを浮かべて続ける。

「どうになりたいの？ 私のこと、咲夜のこと、そんな都合を無視して、あなたはどうになりたい？ 咲夜をどうしたい？ 今のあなたは選んでもいいのよ。私が許すわ」

「咲夜を？」

「選べない？」

「そんなこと、無理なのよ……」

「どうして？」

「咲夜はあんたのものじゃない」

「果たして本当にそうかしら？」

レミリアの言葉に、心が揺れた。しかしそれは、弄ぶ言葉ではないだろうか。霊夢を弄び、愉快になるための言葉なのではないだろうか。誰がどう見ても、咲夜はレミリアのものであることは明白だ。レミリアも、大事な従者であり誰にも渡したくない、と先ほど答えた。どうして、動揺を誘う言葉を口にしたのだろうか。

レミリアも、咲夜の胸の内を分らないとでも言いたいのだろうか。咲夜はレミリアに打ち明けていないことでもあるのだろうか。主人と従者の間に秘め事があることが良いことなのか悪いことなのか分からない。主人であるレミリアを不安に思わせるのなら、悪いことなのだろう。レミリアは咲夜に訊かないのだろうか。訊けば、咲夜は全てを言うことだろう。二人はそういう関係なのだ。取り繕う必要のない、主従関係なのだ。けれども、レミリアは訊かず、咲夜も話さなかった。レミリアと咲夜の間で、何かあったのだろうか。

霊夢はレミリアの前に腰を下ろし、慎重に声を潜める。

「何かあったの？」

「だから最初に言ったでしょ。何かあった？ って」

「咲夜に何かあった？」

先程、咲夜の様子を見たが何かおかしい様子はなかった。むしろ、驚くほどいつも通りだった。もしかすれば、霊夢と会うから、霊夢達と会うから装ったのかもしれない。紅魔館の中の咲夜の様子など分からない。

「咲夜の様子がね、少し変なの。いつも通りに仕事はしてくれるわ。時々あれなのは別に今に始まったことじゃないからいいの。私が言いたいのはそんなことじゃないのよ」

「咲夜には？」

レミリアの顔色が少し暗くなったように見えたが、夜闇のせいであろう。

「言いたいことは分かるわ。主人ならば従者の調子ぐらい整えなさいってことよね。分かるわ。正しいわ。少し前の私なら、咲夜のことなど考えず、言ったでしょうね。全てを話せ、と。

何があり、何を思い、どうしたいのか。そうすれば、咲夜も全てを正直に話すでしょう。でもね、それでいいのかしら？ 主人ならば、全てを知っていいのかしら？」

「私には分からないわ」

「もしこれが異変に繋がることだったら、どう？ 実は私が全てを知っていて、あなたの首を狙っているのなら、どう？ 博麗の巫女として全てを知れるでしょう。その優秀な第六感で、理解できるでしょう」

「これは異変じゃない」

「本当？」

「誰も困ってないじゃない」

「それじゃ、刃でも向ければ、異変になるかしら？」

「それで？」

レミリアの雰囲気が変わり、自然と霊夢の調子は低いものになった。もしレミリアが本当にそういうことを行うのであれば、霊夢も博麗の巫女として動かなければならない。しかし、

レミアが異変を起こす気などないことは、勘で分かった。

「全てを知ることが、解決になるかしら？ 知らないでいる方が幸せなんじゃないかしら。異変を解決するなんて回りくどいことはせず、妖怪全て滅ぼせばいいじゃない。そうしたら異変なんか起きない。ずっと平和で平穩で、樂園の完成よ。できるでしょ、博麗の巫女なら。でも、しない。そんなこととしてほしくないわ。そんな極論に走ってほしくない。同じことなのよ。主人だからといって、従者の全てを知ってはいけない。だったら、従者は咲夜じゃなくもいい。河童に機械人形でも作らせて、そいつに全てを任せればいい。私が大事に思っているのは、人間なのよ。人間である咲夜、少女である咲夜。だから、隠し事の一つや二つあっていい」

「でも、気になるのね」

「女はいつになっても色恋沙汰が気になるものなのよ」

「困った吸血鬼ね、五百年生きてそれなの？」

「永遠に少女なんだから当然じゃない」

レミリアの瞳が子供のように輝き、霊夢は露骨に苦い顔をした。

「協力しなくていいから」

「どうして？」

「あんたが協力するのは違うような気がするのよ」

「それじゃ、このままでいいの？」

「よくない」

「それじゃ」

レミリアの言葉に被せるように霊夢は叫んだ。

「分かっているのよ……分かっている、でも」

レミリアに言われるまでもなく分かっている。このままでは何も変わらないことはよく分かっている。レミリアよりも分かっている。このことの間レミリアが入ってしまったら、霊夢の影がなくなるように思える。咲夜とレミリアの間でのみ解決され、結果として霊夢が出て来るだけ。そんな未来が見えた。解決だけならば、その方が良いのかもしれない。しかし、

そうになった時、咲夜はどうするのであろうか。咲夜の言葉を本心から出た言葉として聞けるのだろうか。咲夜の本心から言った言葉を、霊夢は信じられるだろうか。レミリアの作為を感じてしまうのではないだろうか。仕事に支障が出ないようにしろというレミリアの命令を感じ取ってしまうのではないだろうか。

咲夜のことである以上、レミリアのことは避けられない。しかし、レミリアに事を中心に立ってほしくない。このことは、霊夢と咲夜の問題なのである。二人で明らかにしなければならぬことなのである。

レミリアの影に怯えず、咲夜の本心からの言葉を聞く方法はもうこれしか残っていないように思えた。

「咲夜を貸して」

「それはできない相談ね」

「大事な従者だから？」

「他に理由が必要？」

「十分よ」

霊夢の周りに、そんな人間はいない。妖怪すらもない。博麗の巫女として当然なのかもしれない。誰にも寄り添わず、寄り添わせず、一人で過ごす。それが、博麗の巫女として与えられた生き方なのかもしれない。だからこそ、この咲夜への思いを、博麗の巫女だから、という理屈を前にして捨てたくない。博麗霊夢として勝ち得た感情だからこそ、咲夜に伝えたい。

力なく笑う霊夢を気遣うように、レミリアは力強く言う。

「でも、霊夢が客人として来たら、そうね、考えてあげる」

「優しいのね」

「客人の願いは可能な限り聞くものよ」

レミリアはそう言って、グラスの酒を飲み干すと障子を開けて出て行った。宴会は夜通し続くようで、霊夢も重い腰を上げてその輪に入って行った。

東の空が微かに白んで来た頃、博麗神社の宴会はようやく僅かながらの静寂を迎えた。西

の空にはまだ白い月が見えた。妖怪達は青い顔や赤い顔をしたまま各々散り散りに帰路につく。その中に、レミアアの姿はなく、咲夜の姿もなかった。夜に間に帰ったらしい。

妖怪達が帰った神社は空瓶に溢れていた。全てを片付けた頃、日はもう高い所に昇っていた。霊夢は欠伸を一つ零し、昨夜のレミアアの言葉を思い出していた。レミアアの言葉が確かならば、紅魔館に客人として迎え入れられれば、咲夜の事を考えてくれる。しかし、正直に咲夜を貸してほしい、と伝えたところでその間の屋敷のことはどうするのか、と言われてしまう。

客人ならば無遠慮に振る舞っていいわけではないだろう。咲夜が紅魔館を離れても許される時間、霊夢が思いを伝えるのに必要な時間、二人の問題全てが片付けられる時間。レミアアが求めているのは、そういう時間なのではないだろうか。

客人としてレミアアの前に立つということは、そういうことなのではないだろうか。自身の都合のみを押し付けるのではなく、咲夜やレミアアのことを考えて導かれた時間。レミアアが欲しているのは、そういう時間なのではないだろうか。

二人にとって都合の良い時間とはいつなのであるか。霊夢が咲夜に思いを伝える時間はどれほどあれば足りるのだろうか。どう伝えれば、間違いなく咲夜に伝わるのだろうか。霊夢の言葉を受け、咲夜が答えるのにどれほどの時間があれば足りるのだろうか。一日、三日、一週間……あの雪の日、咲夜は何と言ってレミリアの了承を得たのだろうか。咲夜は美鈴に頼んだと言っていた。しかし、霊夢と美鈴にそれほどの関係はない。あの雪の日、咲夜とレミリアは、雪掻きならば美鈴も使えると判断し、レミリアは許可を出したのだろうか。

館の中のこととなれば、美鈴では難しいだろうか。一時的であれば、咲夜の代わりに務まるのではないだろうか。しかしそうした時、門番はどうなるのか。

咲夜が長く屋敷を離れることは有益ではない。代わりの人間を立てられればいいが、咲夜のように時を止められる人間はいない。霊夢が客人としてではなく、紅魔館で働くということも考えたが、そうなつてしまえば思いを伝える暇などないだろう。

霊夢も咲夜も紅魔館から離れ、二人つきりになれる所が良い。咲夜が紅魔館のことを気にせず、霊夢のことを考えてくれるような所が良い。そのような所は、やはりここしかないの

ではないだろうか。この過ごし慣れた家に、咲夜が来る。そして、思いを伝える。

あれから、咲夜と真正面から話したことはない。募り続けた思いを伝えるのに、霊夢はどれほどの時間があれば十分なのだろうか。そもそも一体霊夢は、咲夜に何を伝えたいのだろうか。

大切に思っている、特別になりたい。それだけの言葉で伝わるのだろうか。それらの言葉には、レミリアと同じように、レミリアよりも、という言葉が隠されていることを咲夜は分かってくれるだろうか。きっと咲夜は分からないだろう。だから、そういうことも伝えなければならぬ。咲夜は霊夢の思いを聞き、どういう言葉で応じてくれるのだろうか。

霊夢と咲夜の間には、どれほどの時間があれば良いのだろうか。あまりに長い時間であれば、レミリアは許さないだろう。しかしだからといって、短い時間であれば伝えられない。

霊夢はそれからの何日かを、ある時と同じように白紙の前で過ごすようになった。桜は散り、眩い新緑の葉が満ち、雨が降り、時々晴れ間がさすようになった。

どれほど考えても、霊夢と咲夜にとって丁度良い時間は分からない。霊夢は、それならば

とレミリアのことを考えるようになった。レミリアが許す時間、それさえ分かれば、後はその時の自分に任せるしかない。自暴自棄に陥ったわけではない。今、どれほど咲夜のことを考えても、その時にならないければ分からないことがある。例えば、咲夜が霊夢の気持ちを知っていて、レミリアよりも優先すると言われれば、霊夢は何を言っているのか分からなくなる。どれほど霊夢が考えていようが、咲夜の一言で全てが吹き飛ぶことは十二分に有り得ることだった。もう咲夜のこと、霊夢自身のことも考えないようにした。二人のことを考えないようにになった時、ようやくレミリアのことを考えるようになった。同じ人間である咲夜のこと、とが分からないのに、妖怪であるレミリアのことなど分かるわけがなかった。従者もおらず、主人でもない霊夢にはレミリアのことなど分かるはずがなかった。

しかしそれでも、一つだけ分かることがあった。咲夜のことである。レミリアが咲夜のことを大事にしていることはよく分かる。

大事にしているからこそ、永遠に自らの下に置いておくままでいいのか、と悩んでいる。咲夜はレミリアのものなのであるが、もし咲夜にレミリア以上に大切な存在ができれば、レ

ミリアは咲夜を手放すことができるだろうか。一日や二日という日単位のことではない。そういう日が訪れた時、レミリアは咲夜のことを思つて、そういう選択が採れるだろうか。もしレミリアが我が儘で、幼いのであれば、きっとこんなことには悩まないだろう。感情を露にして、咲夜の意見を、咲夜が離れるのを拒絶する。涙を流してでも引き留めることだろう。

今のレミリアがそういうことを言わないのを、霊夢は知っている。咲夜のことを思う主人として、咲夜のことを思つて、告げる。今、レミリアはそういう所に立っている。レミリアの意志ではなく、霊夢と咲夜が立たせた所なのかもしれない。

霊夢はこれから、そういう妖怪の所に客人として足を運ぶ。そう思うと、霊夢の手は自然に動き、ある一文を書いた。文が新聞を配達しに来た時、霊夢はレミリアにと伝え、手紙を渡した。

手紙にはこう書いた。

『咲夜を一晩貸してほしい』

その日の夜、霊夢は紅魔館へ向かった。

時は夏至、夜が最も短い時分のことである。

三

咲夜が霊夢と共に紅魔館を出た。レミリアは少しの間、客間から動かなかった。自分の選
択が正しかったのか、その正しいというのとは一体誰に向けられたものなのか、ということ
をぼんやりと考えていた。霊夢のためなのか、咲夜のためなのか、はたまた自分自身のため
なのか。咲夜と霊夢のことが気になるが、もう口を挟んではいけない。夜が明けた時、咲夜
らの言葉を楽しみに待っておこう。

しかし、夜はまだ始まったばかりである。レミリアは客間を出て、寝室の冷蔵庫からグラ
スを二つ持ち出し、紅魔館の奥へと向かう。霊夢が帰った後の紅魔館は、皆何事なのかと開
いた口が塞がらないのか静かだった。

レミリアはある部屋の扉を開ける。暗く、埃臭い部屋だった。奥に進むと埃の臭いが消え

た。明かりがあり、テーブルの上には沢山の本が置いてある。その明かりの下で、小さな背中を丸め、読書に耽っている少女が一人。

図書館の主でありレミリアの親友でもあるパチュリー・ノーレッジは、レミリアが来ても振り向こうとしない。眼鏡の奥の瞳はずっと本の文章を追っている。パチュリーが眼鏡を掛け始めたのは最近になってからだ。裸眼で読むよりずっと読めるらしい。そのことに気付いてからは、眼鏡をかけることが多くなり、今では読書の時以外でもかけている。

レミリアは何も言わず、テーブルにグラスを置いた。パチュリーも何も言わず、レミリアを一瞥すると魔法を展開した。するとテーブルにウイスキーが現れ、透明な丸い氷がグラスへと落とされた。

レミリアはウイスキーをグラスに注ぎ、一口飲むと長い沈黙を破った。

「咲夜が霊夢の所に行ったわ」

パチュリーはようやく本を閉じ、積み重ねると同じようにウイスキーを飲む。パチュリーは驚きも悲しみもせず、静かに、そうと一言だけ零し、こう続ける。

「いつ帰ってくる予定？」

「明日の朝」

パチュリーは嘆息し、何事もなかったかのように本に手を伸ばす。パチュリーも明日の朝ならば何も心配する必要はないと思っている。レミリアもそう思っている。しかし、霊夢の思いを聞いた咲夜が、帰ってこないことは十二分に有り得るのではないだろうか。レミリアはパチュリーを制止することなく、自らの思いを言葉にする。

「もし、もしもよ、咲夜が霊夢の側に居たいと言うなら、私はそれで良いと思うし、きっと止めないわ。咲夜がいなくなったら館のことは大変でしょうね。前みたいに新しいのが来るまで美鈴や小悪魔に中のことをやらせるのは、咲夜に慣れてしまった私達には難しいことだと思うわ。でもそれは咲夜のせいじゃないのよ。咲夜は何一つ悪くないわ、悪くないと言ってちょうだい。もしそうなった時、悪いのは私。未熟な私のせい。そんな先のことで、今の咲夜を迷わせるわけにはいかないのよ。あの子の人生は短いんだから」

パチュリーはレミリアの思いを聞き、伸ばしたままの手を引つ込めた。

「従者が誓った忠誠を信じられないのは主人としてどうなのかしら？」

「咲夜は私の下において本当に良いのかしら？ 従者としては当然よ。でも、従者ではない部分で考えたら？ 私の従者だから咲夜というわけではないじゃない。咲夜だから私の従者になった。そういう運命であつたとしても、咲夜が咲夜のことを思うなら、私はそれでも良いんじゃないかしら。そう思うことがあるのよ」

「仕事に支障を来すぐらいならつてこと？」

「誰もそう言つてないじゃない」

「質問よ、レミィ。咲夜が仕事に支障を来さなかったら、許した？」

「目を瞑つたことでしょうか。きっと」

咲夜の失敗は今日もあつた。手紙が届いた時にレミリアを起こせていれば、霊夢との間に何があつたのか報告させ、どういう選択を採らせるべきなのか言えたことだろう。

レミリアが最初に咲夜の異変に気付いたのは、去年の初雪の後だった。レミリアの覚えている限り初めてのことだった。咲夜の口から、博麗神社の手伝いへ行く、という言葉が出た

のは。博麗神社だけに雪が積もったわけではない。紅魔館も雪に覆われた。フランドールが陽気になり、外へ出て、美鈴と雪合戦に興じ、レミリアの顔にも雪玉が飛んでくることもあった。そういう日だった。

レミリアは当然、屋敷のことはどうするのか、と確認した。咲夜はフランドールと美鈴に声をかけ、雪掻きが遊びの延長になり、二人で作った門より大きい雪だるまが門番になった。そういう日だった。

屋敷を出る咲夜にレミリアは問うた。何故、紅魔館よりも博麗神社なのか、と。もしレミリアがその時、私の従者ではないのか、と覚えていれば咲夜は肯定し、紅魔館で雪掻きをしたことだろう。レミリアがそう問えなかったのは、フランドールが笑い、美鈴が雪を集め、妖精メイドが慌て、小悪魔がパチュリーを連れ出していたからだろう。咲夜はフランドール達を眺め、寂しそうに、同情するように笑い答えた。

「霊夢は一人ですから」

レミリアはそれ以上追及しなかった。それはきつと、咲夜自身も言葉にできないだろうと

思ったからである。その感情は、その感情に至る道筋は、咲夜には分からない。レミリア達がいる少女の咲夜では分からない。霊夢がいだいているであろう感情は、むしろレミリアを始めとした長年生きた妖怪の心に不意に宿る感情である。何気ない日常の隙間から落ちてくるような、何気ない考えの縫い目から生じるような感情。指先に僅かに切り傷ができてくるような、無意識の寂しさ。

咲夜が同情したのは、霊夢の寂しさではない。もっと単純な、一人で雪掻きをする労働への同情であろう。しかし、それからの咲夜の胸に、霊夢の感情に対する同情があったのかどうかは知り得ない。咲夜が霊夢のことを考えている時間が増えたのは、彼女の仕事の小さな失敗の連続から想像できるが、咲夜が霊夢をどのように思っているのか分からない。分からなかったのではない。分かっているといけないと思ひ、訊かなかったのである。そこだけは、咲夜自身で考えさせ、決めさせたかった領分だったのだ。

レミリアが大事に思っているのは従者である咲夜以上に、咲夜自身なのだ。もし咲夜が主人であるレミリアを優先させるのならばそれでいい。もし咲夜が友人である霊夢を優先させ

るのならばそれでもいい。たとえ主人であろうとレミリアが口を挟んでいいわけがなかった。レミリアができることは精々、咲夜と霊夢が誰にも邪魔をされずに話せる場を用意する程度だ。そこから先は二人で決めることであり、レミリアが見聞きしていいことではない。

「仕事ができるとかできないとかそういうことじゃないの。パチエ、いつものように本を読んで、ああまた友が何か言っている、と聞き流してもいいのよ。いつもそうじゃない。でもない。それはきつと、私が聞いてほしいと話すよりも先に、パチエ自身が、本よりも大事なことがあると判断したからでしょう。咲夜のことと同じよ。咲夜が仕事に失敗したから、どう？ 私達はそれで何か困ったかしら？ 妖精メイドは困ったことでしょね。でも、私達はいつものように過ごしている。今も。かつてのように話し、酒を飲み、夜を明かしている。咲夜がいけないほど昔に戻っている。パチエ、そんなくだらない過去の話より、未来の話をしてみましょう？ 何が起きるか分からない素敵な未来の話を」

「咲夜が従者じゃない、ただの紅魔館の主人であるレミィの言葉を聞かせて。咲夜を霊夢にとられることは、どう思うの？」

「パチエ、あなたの読んだ本に、咲夜の幸せについて書かれてある本はあるかしら？」

「ないわよ、そんなもの」

「私も知らないわ。だからね、もし霊夢の側に居ることが咲夜の幸せなら、それで良いのよ」

「私は嫌よ。泣きつかれるこっちの身になってちょうだい」

「だから、未来の話をしに来たんじゃない」

レミリアとパチュリーは意識してか無意識の間か、霊夢がどう思っているのかは口にしなかった。レミリアもパチュリーも、霊夢の心情となると分からないことの方が多くなるからだろう。分からないことを分かるようにするためよりも、二人共知っている咲夜の話を話した方が早い。

霊夢が咲夜に何と云うのかすら分からない。そもそも、話す気なのだろうか。霊夢自身、どれほど自分のことに気付いているのだろうか。霊夢は咲夜にいただいている感情を正しく理解しているのだろうか。あの宴会の日、霊夢はどれほどのことを知り、考えたのだろうか。そういう霊夢の感情を向けられているのを、咲夜は気付いているのだろうか。

咲夜も悩んでいることだろう。その悩みはレミリアや霊夢のものとは違う。もっと悲劇的なものだろう。咲夜には主人であるレミリアがいる。ならば、霊夢はどうなる。他の人間達と同じような関係だろう。しかし、霊夢の気持ちを知ってなお、他の人間達と同じ領域に置いていられるだろうか。咲夜がもう少し歳を重ねれば、余裕を持てるようになれば、霊夢が傷付かない言葉を選べることだろう。

しかし、今の咲夜にはそんなことはできない。霊夢の熱をそのまま受け止めてしまうだろう。そうして、霊夢にその身を委ねてしまうことは有り得る。

幼い少女達なのだ。一晚あればそこまで進展するだろう。一晚というのは、それほどの時間なのだ。二人の距離を縮めるのに十分な時間なのだ。きつと霊夢はそこまで考えていないだろう。咲夜のことを思い、レミリアのことを思い、レミリアが許す時間を考えて、割り出した時間が一晚。今の霊夢と咲夜ならば、一晚はあまりに長い時間だ。二人はこの夜の間に何を話す気でいるのだろうか。

「未来、ねえ……。次のメイドの話でもする？」

「興味ないわ。咲夜は帰ってくる」

「レミイ、また出て行くことだつて有り得るのよ？」

「何か問題でもあるかしら？」

「ちゃんと考えて」

諭すように言うパチュリーに、レミリアは可笑しくなつて堪えきれなくなり笑みを零した。眉を顰めるパチュリーに、レミリアは諭すように言う。

「パチエ、問題は今だけなのよ。この夜、咲夜がどちらを選ぶか。大事なのはそれだけなのよ。良いこと？ 今日帰つて来て、明日また行くのは当然なのよ。明日、私から言いましうか？ 今日には行かないの？ っ。その程度。だから、それほど、今日という日は大事なのよ。本ばかり読んでいる魔女には難しい話かしらね？」

「人間の血にしか興味はない吸血鬼がそこまで考えているなんて意外ね。良いわ、聞いてあげるから話さないよ」

「咲夜にとつて、ここは、帰つて来るに値する居場所だった。主としてこれほど嬉しいこと

があるかしら？」

「相当酔っているのかしら？」

「酔ってないわよ。私はね、咲夜だったら永遠に時間を止めることだってする。霊夢と二人でいられるのならば。……してもおかしくないと私は思うわ」

「そんなことしないでしょ」

「咲夜だから？」

「ええ」

「咲夜一人だったらそんな真似しないでしょうね。あの娘は時を操れる。だから、その危険性も分かっている。だから、しない。でも、霊夢は？ 霊夢から言われたら？ 咲夜は断れるかしら。互いの思いを知っていて、それでも、時を止めないかしら？ 永遠の内に逃げないかしら？」

「危険だと分かっているならしないでしょ」

「パチエは人間のことをよく分かっているのね。世の中には愛し合っているのにもかか

わらず死ぬ人間だっているのよ」

「随分知っているのね」

「私、人間好きだから」

「大した自信なこと。何か賭ける？」

「悪癖よ、それは」

「良いじゃない。人間世界のことに興味がない魔女にご教授ついでに」

「高くつくわよ？」

挑発的に笑うパチュリーに、レミアも笑った。長年生き続けた二人の共通する癖がそれだった。互いが暇になると、こんなことを言い合うことがあった。明日、館に人が来るのか来ないのか、今度の門番は使えるか使えないか。勝敗はどうでも良かった。煩わしい時を楽しくしたいがための賭け事だった。

「明日の朝食でも賭けましょうか」

「だったらこうしましょう。咲夜が帰ってきたらパチェが私の朝食を作る、帰ってこなかっ

たら私がパチエの朝食を作る。どう？ 小悪魔を使うのはなしよ。フランも美鈴も他のメイドもなし。良い条件じゃない？」

「メニユー、考えときなさいよ」

「あなたもね」

夜はまだまだ明けそうにない。レミリアはパチュリーに何か面白い本はないかと聞いたり、魔法の研究のことを聞いたり、昔話をしたりして、刻一刻と朝になるのを待った。話をしながら酒を飲み続けると思考が溶けて行き、押し留めていた不安が飛び出しそうになる。咲夜は帰ってくる。そう思い続けても、朝になるまで分らない。誰にも分らない。ただ思い続けることしかできないのが、もどかしい。今からでも咲夜達の後を追いつけ、待つて、と言うべきだろうか。今夜の主人である霊夢が許すわけがない。

レミリアが苦しむように、霊夢も苦しんだ。長い月日を堪え、ようやく手に入れた機会なのだ。霊夢と咲夜には、今この瞬間しかない。レミリアと咲夜のような未来はないのだ。レミリアは奥歯を噛み締め、不安を飲み込んだ。そういうことを分かって、霊夢に咲夜を貸し

たのだ。今更、己の都合を出すのはあまりに無粋だ。ここで矜持を捨てれば、それはもう咲夜の主人ではない。ただの我が儘な吸血鬼に成り下がってしまう。そんな妖怪になりたくない。咲夜は帰ってくるのだ。このレミリアの下に帰ってくるのだ。気高く尊大なレミリアの下に帰ってくる。

一晚の自由、一晚の幸福など味わい尽くせばいい。それは紅魔館では絶対に味わうことのできないものなのだ。レミリアは待つ。己の感情を飲み込み、紅魔館の主人として、従者の幸福を願うために。

四

雲がない夜空に、白い月が輝いている。星もある。森の方からは妖怪が嘶く。振り向くと、真っ赤な屋敷がある。夜闇の中で不思議に輝く屋敷。咲夜と霊夢は、そんな屋敷から出てきた。

「珍しい？」

霊夢は森の前で立ち止まり、咲夜に訊いた。咲夜は霊夢の方を向いて、朗らかな笑顔を浮かべて頷いた。浮かれる頭でも、霊夢の声が固く、微かな緊張を帯びているのはすぐに察することができた。

霊夢とレミリアの間にどういう会話があったのか分からない。屋敷を出る前に訊いてみようと思ったのだが、霊夢のまとう雰囲気と言葉を寄せ付けないように思ったため黙っていた。二人の間には今も、不自然といえるような距離があった。咲夜は夜の幻想郷に、それほど慣れていなかった。迷わないためにも霊夢の手を取ろうとしたのだが、自然と逃げられてしまう。

二人はそれ以上話さず、一定の距離を保ったまま、博麗神社へ向かう。夜風が吹き、木々がざわめく。夕に降っていた雨の雫が、咲夜の髪を濡らす。咲夜は、何故、霊夢が飛ばないのか分からなかった。飛んで来たのだから、飛んで帰ればいいのではないか。そんなことを考えると、何故、霊夢は客人として紅魔館に招待されたのだろうかと思つた。レミリア宛ての手紙にはどういふ文章を書いたのだろうか。疑問がまた疑問を呼んだが、黙々と歩く霊夢

に訊けなかった。霊夢の背中はい夜を寄せ付けぬ孤独が広がっている。

霊夢は常に孤独を友にしていたように思う。まず博麗神社が東の最果てという所にあり、常に人が訪れることはない。加えて博麗の巫女だからか、魔理沙のように自らの研究のために顔馴染みを増やすのではなく、い夜のように誰かに従うのではなく、一人だった。一人で慎ましい生活をするのが、霊夢だった。

い夜の思う霊夢の孤独は、生活の上での孤独だけではなく、精神的にも孤独になっているということだ。

パチュリーも一人で過ごすことが殆どだが、い夜がおり、小悪魔がおり、レミリアがいる。友人であるレミリアには色々と話すことがあるようだというのを、レミリア本人から聞かされたことがある。パチュリーは好き好んで孤独になっている。パチュリー自身の性格もあり、自らが選択したことだ。

しかし、霊夢の孤独に霊夢の意志は感じ取れない。なるべくしてなった、という印象を覚える。

この孤独が霊夢にどれほどのものを与えたのかは咲夜には分からない。博麗の巫女という役職を手に入れた代償での孤独なのであろうか。霊夢は霊夢自身のことについて、どう思っているのだろうか。霊夢は自らのことを話したがない。それも長年の孤独から生じたものなのであろうか。咲夜には霊夢のことが全然分からなかった。分からないのであれば放っておくこともできたかもしれないが、咲夜は放っておきたくない。もしここで咲夜が霊夢から離れてしまえば、霊夢はまた一人になってしまう。しかし、霊夢の中に咲夜が存在することは許されるのだろうか。

彼女を思い優しく差し伸ばした手を拒絶された時、咲夜は普段と同じような調子で、自らの行き過ぎた行爲を過ちだと認められるだろうか。身勝手だと、己の優しさが何故分からないのかと、感情的になってしまうのではないだろうか。相手のことを思っているようで、相手の内に映る自分自身について考えているようで、吐き気が込み上げてくる。

霊夢を博麗神社まで送り届けた咲夜は踵を返し帰ろうとしたが、霊夢の汗ばんだ手が咲夜の手首から離れない。見上げる霊夢の黒い瞳が大きく、潤み、咲夜は一瞬息を飲んだ。レミ

リアとの間に何があったのだろうか。霊夢は何を知っているのだろうか。

「何？」

「帰るの？」

咲夜は努めて冷静に答える。少しでも気を抜けば、霊夢の瞳に吸い込まれ、その身を案じてしまいそうだった。咲夜は霊夢のことを知るためにここに居るのではない。レミリアの言い付け通り、送り届けただけだ。他に役目はない。

「そうよ、私の役目はあなたを家に送り届ける」

「違うわ」

「お嬢様が帰りを待っているんだけど」

「借りたから」

「は？ え？ 何？」

「あんたを借りたのよ。今晚だけ」

霊夢の言葉に咲夜は素っ頓狂な声を上げた。霊夢の顔に緊迫が満ちたところを見ると、ど

うやら冗談でもないらしい。レミリアに送られた手紙はそういうことだったのか。客人として訪れた霊夢を受け入れたレミリアも、そういうことだったのか。咲夜はようやく理解した。レミリアが許可を出しているのならば、咲夜は断ることができない。

しかし、霊夢は咲夜を一晩借りて何をする気なのだろうか。

「掃除でもしたらいいのかしら？ 晩御飯でも作ればいいのかしら？ それとも洗濯？」

部屋や炊事場を見て回ったが、どこも綺麗に整っている。静かな家だった。

「話を聞いてほしいの」

「誰の？」

「私の」

「私が？」

「咲夜だから聞いてほしいの」

「……どうということ？」

「お茶淹れるから待ってて。それからでも遅くないでしょ」

「淹れるわよ、従者なんだから」

「じゃ、それなし。今夜だけは対等にしましょう」

主人である霊夢にそう言われると、従うしかなく、咲夜は居心地の悪さを覚えながら小さな居間で霊夢を待つ。障子を開けると月はまだ高い所で白い光を降り注いでいる。

この居間に座ったのは、この前の雪の時以来だった。その前の日から、霊夢の様子は変わった。普段の霊夢とは違い、色々と考えていることが伝わってきた。しかも霊夢のことではなく、咲夜やレミリアのことを考えているような口振りだった。咲夜は驚き、自然と、何故、霊夢が咲夜やレミリアのことを考える必要があるのだろうかと思った。答えは翌日、霊夢が教えてくれた。

「私のこと、どう思う？」

咲夜は今でも、すぐにレミリアの次に大事、と答えられなかったことを後悔している。霊夢のことを思うと、咄嗟に答えられなかった。レミリアの名前を出せば霊夢も納得するだろうと分かっている、言えなかった。あの時、レミリアの名前をすぐに出していたら、咲夜

は今よりも大きな後悔を覚えていたように思える。

霊夢の純粋な気持ちに、嘘をつきたくなかった。レミリアを一番に思っていないわけではない。霊夢のことを、レミリアの次に大事と思っているわけでもない。霊夢は魔理沙や早苗と同じように大切な友達の一人だ。咲夜がそう思っているけど、霊夢は違う。霊夢はもっと別の関係を望んでいる。その関係になれないと霊夢自身も気付いている。咲夜はレミリアの従者だ。レミリアのことを一番に考えている。

が、それはあくまで咲夜自身が一番に考えているというだけだった。もし他人から、咲夜のことを一番に考えていると言われれば、咲夜はその言葉を切り捨てることができるだろうか。レミリアの従者だからといって逃げられるだろうか。咲夜は逃げられなかった。分からなかった。その感情を向けられ、どういう反応をすれば相手が喜ぶのかすぐに分からなかった。だから黙った。黙っておけば、相手が考え、察し、諦めるだろうと思っていた。実際、諦めてくれた。まるで訊いたことが間違いだであるかのように。

しかし、それで相手の気持ちが悪く落ち着いたのかといえば全く落ち着いていなかった。咲夜

の考えなかつたような手段を採り、この夜の間だけが咲夜の主人になっている。この主従関係に強い強制力がないことは明らかだったが、咲夜は帰らなかつた。霊夢が咲夜に話したいことがあるように、咲夜も霊夢に話したいことがある。

霊夢が茶を持って戻ってきた。二人は少しの間、何も話さず茶を啜る。互いの出方を探っているようだった。口を開けたのは霊夢の方が先だった。白い頬が障子の隙間から入ってくる月の光を浴び、一層白く見えた。薄い影の中で小さく唇が動く。霊夢の微かに揺らいだ瞳に、咲夜は不安な香りを嗅ぎ取ったが、顔には出さず黙って耳を傾けた。

「レミリアが悩んでいるわ」

「お嬢様が？」

「咲夜が何か隠し事をしているんじゃないか、って。でも、隠し事をすることは悪くないんですって」

「何それ？」

「咲夜のことがよく分からないらしいわ」

「なら、今夜のご主人様だったら分かるのかしら？」

「そのことには、私が関わっているらしいわ」

「らしい？」

「難しいことみたいよ」

「霊夢？」

他人事のように言う霊夢に、咲夜は微かな危機感をいだいた。もしかすれば、霊夢は霊夢自身の気持ちに気付いていないのだろうか。気付かずに、ここまで事を運んでしまったのだろうか。霊夢は自分自身の感情が、何なのか分かっていないのだろうか。分かっているのに気付かない振りをしているだけなのだろうか。

咲夜一人が考え過ぎ、先に進んでしまったのだろうか。霊夢をどう思っているのか。咲夜は霊夢にどう思われているのか。レミリアは咲夜のことでも霊夢のことでも知っているが、口出しをしない。そうして、この夜を迎えた。覚悟をしていたのは咲夜だけだったのだろうか。霊夢から告白されると思っていたのは、咲夜の思い過ぎだったのだろうか。思い過ぎして

あるのならば、霊夢は何故、レミリアから借りたのだろうか。それも一晩という区切りを設けて。何もないはずがない。やはり霊夢は気付いていない振りをしているだけだ。咲夜の口から言わせるつもりなのだろうか。

霊夢に告白するとなれば、咲夜は何を伝えればいいのだろうか。伝えたとところで、咲夜の本音と受け止められるのだろうか。咲夜にはレミリアがいることを、霊夢が知らないわけではない。どれほどの言葉を積み重ねれば、本心からの言葉と信じてくれるのだろうか。咲夜は一度、答えられない問いに沈黙で答え、当然な言葉を口に出している。そんな脆く弱い少女が、霊夢の側にいていいのだろうか。

霊夢までそうなってしまうのではないだろうか。一生懸命に一人で生き続けた霊夢も、咲夜と同じような少女になってしまうのではないだろうか。そうなってしまうえば、霊夢は霊夢なのだろうか。博麗の巫女と呼べるのだろうか。何者に加担せず、情を移さず、淡々と幻想郷の平穏を守る巫女でいられるのだろうか。

霊夢が咲夜とレミリアのことで悩んだように、咲夜も同じように巫女と霊夢の間で悩んで

いた。レミアアに咲夜が必要であるが、幻想郷に必須ではない。霊夢は、博麗の巫女は、幻想郷にいなければならない。霊夢は幻想郷にとつて特別な存在なのだ。そんな霊夢が咲夜のことを思うなど驚くべきことだった。博麗の巫女として博愛に徹していると思った。何故、咲夜が選ばれたのだろうか。魔理沙や早苗やアリスや紫ではなく、何故、咲夜なのだろうか。何故、霊夢は咲夜を選んでしまったのだろうか。

時計の針の音だけが二人の間に響く。咲夜は意を決し、口を開けた。

「どうして、私なの？」

短い沈黙の後、霊夢は頬を赤らめた。

「似ているから？」

「冗談でしょう？」

「本当よ。沢山の妖怪に囲まれて、それでも人間として生きている。だから気になる。気にしないようにしても、気になっちゃう。でも本当のことは、私も分からないの。気付いたら、こうなった。こうなった理由を探して納得しているだけ。納得したらそれで終わるかな、っ

て思ったんだけど駄目みたい。考えれば考えるほど分からなくなって、どうしたらいいのか分からなくなつて……。初めてで、私……」

霊夢は言葉を詰まらせた。沢山の分からないに囲まれた霊夢だったが、それでも一つだけ分かっていることがある。この感情が報われない。咲夜にはレミリアがいる。霊夢が割つて入れる余地はない。

畳の上に、幾つもの染みができる。霊夢は慌てたように両手で顔を覆い隠したが、細い指の隙間から雫が零れ落ちる。発作的に激しく肩を揺らし、涙で濡れた言葉を吐き出した。

「一人は嫌、もう嫌……」

咲夜は胸が締め付けられた。昨年の初雪の翌日、咲夜は紅魔館ではなく博麗神社の雪掻きを手伝いに行った。その時、咲夜はレミリアにこう言った。

「霊夢は一人ですから」

あの時の言葉は、単純なものだった。霊夢が一人で雪掻きをするのが大変だからだろうという同情から出たものだった。しかし、その前日、霊夢から聞かされたはずだ。咲夜のやる

ことは雪掻きではないことを。ならば、どうして翌日に、大変だからと思つてしまったのだろうか。もしあの時、博麗神社に行かなければ、こんなことにはならなかつた。こんな霊夢を見ることもなければ、こんな感情をいだかせることもなかつた。

咲夜が無意識の間にも同情したのは、もっと別な部分なのではないだろうか。人間である咲夜が、霊夢に同情できる部分が少ない。博麗の巫女は特別なのだ。しかし果たして、背中を丸め、一人は嫌だと涙したこの少女は特別なのだろうか。咲夜が勝手に、博麗の巫女だからと特別にしていただけなのではないだろうか。誰も居ないこの家に住む、咲夜と大して歳の変わらない少女を、博麗の巫女だからと思つていいのだろうか。自分の気持ちを正直に伝えるために、客人として来た少女を、博麗の巫女だからと考えていいのだろうか。

仮初の主人ではなく、対等に、と言つた少女のことを、咲夜が博麗の巫女だからと決め付けていいのだろうか。

そんなことが許されるわけがない。霊夢をこうしたのは咲夜なのだから。けれども、咲夜は罪滅ぼしとして霊夢に近寄る気はない。もし、今、罪滅ぼしで霊夢に言葉をかければ、咲

夜はまた後悔してしまふ。靈夢はそんな罪滅ぼしの言葉を求めている。靈夢が欲しているのは、対等な言葉である。

咲夜は靈夢に寄り添い、慈しむようにその細い背中に触れた。柔らかな月の光の中で、咲夜は靈夢の心の底にある感情をなぞる。

「靈夢は、寂しいのね」

靈夢は咲夜の胸に縋り、泣き続ける。咲夜は優しく抱きとめ、艶やかな黒髪をなでる。この小さな身体で、靈夢はどれほどのことに耐えてきたのだろう。博麗の巫女としての役目を果たし続け、靈夢という少女の器はどれほど傷付き、疲れたことだろうか。傷や疲れすら自覚できず、過ごしてきたのかもしれない。

靈夢が自覚したのはつい最近なのかもしれない。あの日、レミリアのことについて尋ねてきた。あの日を境に、靈夢の胸に不意に芽吹いた。レミリアのように何百年も生きていない靈夢は、この感情をどうすればいいのか分からなかった。そして、その寂しさは咲夜により安らぎ、別の感情になった。

しかし、霊夢はその二つの感情について詳しく知らない。どうすれば収まるのかもそうだが、何故生じたのかも分かっていないことだろう。そもそも、二つの感情があることを霊夢は気付いているのだろうか。気付いていない可能性の方が高い。気付いていないように振舞っているのではなく、本当に気付いていないのだろうか。

咲夜がどうい言葉で霊夢に伝えようかと悩んでいる間に、温かな声が聞こえてきた。

「……好き」

「霊夢？」

「咲夜のこと、好き」

霊夢は顔を上げ、黒々と濡れた瞳を真っ直ぐ向けて来る。咲夜は言葉を奪われた。気付けば、反射的に口にしようとした言葉を飲み込んでいた。

霊夢は咲夜の背中に手を回し、離れないように強く抱き締めた。

「お願い。今だけはレミリアのことを忘れて……お願い」

懇願に、胸が締め付けられる。こんな時でもレミリアのことを意識してしまう自分自身が

憎らしい。レミリアのことを忘れられれば、咲夜は霊夢に自分の気持ち伝えられるだろうか。あれほど大事に思っているレミリアが今では咲夜の枷となり、心を縛っている。咲夜はレミリアの許しが必要ならば、霊夢に愛しているの言葉すら伝えられないのだろうか。温もりを感じられるほど近くにいるのかかわらず、心の距離は一つも縮まらないのだろうか。レミリアの従者であるがゆえに。

しかし今は、この夜だけは、そんなことは関係ないはずである。ただの少女である。そう分かっていても、レミリアの影に怯えている。朝になれば、この夜のこととはなくなってしまうのではないか、と勝手に思ってしまう。そんな先のことを考える必要がないのだが考えてしまう。情けない自分に涙が零れ、霊夢の肩を濡らす。霊夢の告白を聞き、この夜の間に居られないことがひどく悲しい。一人の少女から向けられる対等な愛情が、この夜の内を終わる。そういう結末を迎えると分かっていた。それでも、胸が痛くなる。霊夢の手が咲夜の涙を拭く。止めどなく溢れてくる涙に、咲夜は謝ることしかできない。

時を止められるのならば止めてしまいたかった。しかし時を止めてしまえば、霊夢の決意

はどうなる。一夜だけだから、勇気を振り絞った。好きだと言ってくれた。レミリアのことを忘れてほしいとも言った。時が流れるからこそ、許された言葉の数々だった。この時間は特別な時間なのだ。操っていい時間ではない。早めることもせず遅らせることも止めることも許されない。咲夜にとつて、初めての時間だった。失いたくない時間だった。尊い時だった。失うと分かっているからこそ、大切にしたい。この時間は咲夜のためだけにあるのではない、咲夜と霊夢二人のためにある時間なのだ。

東の空が白んできた。夜が明ける。霊夢は咲夜から離れ、晴れ晴れとした笑みを浮かべる。咲夜はその笑顔を直視できず、顔を伏せて、呟いた。

「もう少しだけ一緒に居ましょう？」

霊夢の笑顔はすぐに崩れた。霊夢が何か言うよりも早く、咲夜は嘘偽りのない正直な気持ちで、ようやく口にした。

「離れたくないのよ、もし少しだけでいいの……」

「レミリアはどうするの？」

「今だけは、幸せを独り占めしたいの」

咲夜の言葉に霊夢は頭を抱えたが、すぐに笑顔になった。

「それじゃ、一緒に朝御飯でも作りましょうか」

「もつとあるんじゃない？」

「大事なことよ？」

「そうだけど……そんなことでいいの？」

「咲夜の作る御飯、美味しいからね」

そう言われてしまうと、咲夜は断る術を持っていなかった。霊夢はいつまで経っても動かない咲夜の手を引つ張り、二人は少し早い朝食を作り始めた。《了》

後書き

この度は、本書をお読みいただきありがとうございます。自サークルで主催していない合同誌に寄稿した作品を可能な限り集めました。

楽しんでいただけましたら幸いです。

初出は左記の通りです。

幸福な死 毒殺合同

白露 二十四節気合同

ビブロフィリアとさまよえる妹 ラノベ合同

ダ・カーポ 歴史合同

願い わかばん合同

居場所 ストーカー合同

夏至 咲霊合同

二〇二三年十二月下旬 近藤貴弥

2023年12月23日 初版

原作 東方 Project（上海アリス幻楽団）

発行者 こんどうたかや しゅつらんぶんこ
近藤貴弥（出藍文庫）

連絡先：stkk7.920521@gmail.com

個人サイト：<https://strn2014.com/>

ロゴデザイン 工藤雅弘

この小説はフィクションです。

実在の人物や団体等と関係ありません。

※本書の無断転載・複製・販売等を禁じます。
